松本市文化財調査報告 No.93

HORINOUCHI

松本市堀の内遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1992・3

松本市教育委員会

松本市堀の内遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1992・3

松本市教育委員会

序

松本市街の東方に位置する里山辺地区は古墳など、多くの遺跡が残る地域として以前より知られておりましたところ、この度、折から進行中の県営ほ場整備事業が、堀の内遺跡を含む一帯で実施されることとなりました。そこで松本市教育委員会がほ場整備に先立って発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行なうこととなった次第です。

発掘調査は市教育委員会によって組織された調査団により、平成2年8月から同年12月の長きにわたって継続されました。真夏の酷暑から厳寒の最中に及んだわけですが、参加者の皆さまの並々ならぬご尽力によりなんとか終了することができました。その結果、縄文をはじめ、弥生、古墳、平安という各時代の住居址110軒のほか、方形周溝墓、建物址など、数多くの遺構を検出し、また各時代の遺物を多数発見しました。これらは、今後、この地域の歴史を解明していく上で大変役立つ資料になることと思います。

しかしながら、今回の発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提としたものであったことも事実です。私たちの生活を豊かにするための開発と、それによって失われてしまう遺跡という矛盾のなかで、文化財保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めて頂ければ、幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか発掘作業にご協力頂いた参加者の皆さま、また調査の実施に際して、多大なご理解を頂いた薄川土地改良区、地元関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

松本市教育委員会　教育長　松　村　好　雄

例　　言

1　本書は、平成2年8月4日から12月12日にかけて行われた、松本市大字里山辺1930番地の一帯に所在する堀の内遺跡の緊急発掘調査に関する報告書である。

2　本調査は平成2年度県営ほ場整備事業山辺地区に伴う緊急発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所から委託を受け、松本市教育委員会が実施したものである。

3　本書の作成にあたっては、発掘調査内容が膨大なため、特記される一部の遺構と遺物について詳述し、他は概要に触れたのみである。

4　本書の執筆分担は下記のとおりで、関係する図類も含めて、責任は各担当者にある。

第1章：事務局

第2章第1節：太田守夫、第2節：竹内靖長

第3章第3節1-(2)：竹内靖長、2：関沢　聡

その他：直井雅尚

5　整理・編集作業の責任者および協力者は下記のとおり。

【遺構関係】直井雅尚

調整・作成：石合英子　　トレース：開鳩八重子、

【遺物関係】土器・陶磁器：竹内靖長・直井雅尚　　金属製品：関沢聡

土器洗浄：内沢紀代子・洞沢文江　　土器接合：五十嵐周子

土器実測：伊丹早苗・松尾明恵・三村孝子・望月映・横山真理

同トレース：伊丹・開鳩・松尾・三村・横山・直井

金属製品保存処理：内田和子　　同実測・トレース：久根下三枝子

【編　集】直井雅尚

6　現場での遺構写真の撮影はA・B区：三村竜一・直井雅尚、C区：今村克・直井雅尚、D・E・F区：関沢聡が行い、遺物写真の撮影は宮嶋洋一氏にお願いした。

7　本書に掲載した図類の縮尺は以下に統一してあるが、異なる場合はその都度に示した。

遺構　1：80

遺物　土器・陶器実測図　1：4、土器拓影　1：3、金属製品実測図　1：3

8　遺構番号は、調査時に各区ごとに付けた（旧番号）が、整理段階で通し番号（新番号）に付け替えた。遺物の注記等はすべて新番号で行っているので混乱はないが、現場測量原図が旧番号であるため、本書巻末に新旧対比表をのせてある。

9　本書では調査結果の提示を重視したため、委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類を掲載できなかったが、これらは現場で作成した測量図類、写真類、遺物、同実測図類とともに松本市立考古博物館で保管している。

目　　次

序

例　　言……1

目　　次……2

図 目 次……3

図版目次……4

第1章　調査の経緯

　第1節　文書記録……5

　第2節　調査体制……6

第2章　遺跡の環境

　第1節　地形と地質……9

　第2節　周辺遺跡……14

第3章　調査結果

　第1節　調査の概要

　　1　調査地……15

　　2　遺　構……17

　　3　遺　物……23

　第2節　主な遺構

　　1　竪穴住居址

　　(1)　第4号住居址……27

　　(2)　第9号住居址……27

　　(3)　第81号住居址……28

　　(4)　第101号住居址……31

　　(5)　第86号住居址……35

　　2　方形周溝墓……35

　第3節　主な遺物

　　1　土器・陶器

　　(1)　古墳時代の土器……40

　　(2)　平安時代の土器・陶器……43

　　2　金属製品……76

第4章　調査のまとめ……81

図　目　次

第１図　遺跡の位置……7
第２図　調査地の範囲……8
第３図　土層柱状図……10
第４図　調査地区および遺構分布……16
第５図　Ａ地区遺構分布……18
第６図　Ｂ地区遺構分布……19
第７図　Ｃ地区遺構分布……20
第８図　Ｄ・Ｅ・Ｆ地区遺構分布……22
第９図　第４号住居址……26
第10図　第４号住居址遺物出土状況……28
第11図　第９号住居址……29
第12図　第９号住居址遺物出土状態……30
第13図　第81号住居址……31
第14図　第81・101号住居址遺物出土状態 …32
第15図　第101号住居址 ……33
第16図　第86号住居址・遺物出土状態……34
第17図　方形周溝墓……36
第18図　皿Ａの口縁形態……45
第19図　第４・９号住居址の土器組成……47
第20図　古墳時代土器実測図(1)……48
第21図　古墳時代土器実測図(2)……49
第22図　古墳時代土器実測図(3)……50
第23図　古墳時代土器実測図(4)……51
第24図　古墳時代土器実測図(5)……52
第25図　平安時代土器・陶器実測図(1)……53
第26図　平安時代土器・陶器実測図(2)……54
第27図　平安時代土器・陶器実測図(3)……55
第28図　平安時代土器・陶器実測図(4)……56
第29図　平安時代土器・陶器実測図(5)……57
第30図　平安時代土器・陶器実測図(6)……58
第31図　平安時代土器・陶器実測図(7)……59
第32図　平安時代土器・陶器実測図(8)……60
第33図　平安時代土器・陶器実測図(9)……61
第34図　平安時代土器・陶器実測図(10)……62
第35図　平安時代土器・陶器実測図(11)……63
第36図　金属製品実測図(1)……79
第37図　金属製品実測図(2)……80
第38図　集落の変遷（縄文・弥生）……83
第39図　集落の変遷（古墳前・中期）……84
第40図　集落の変遷（古墳後期・平安）……85

表　目　次

表１　住居址一覧表……37
表２　第４・９号住居址土器構成表……43
表３　杯Ａ法量分布表……44
表４　土師器椀法量分布表……44
表５　黒色土器Ａ法量分布表……44
表６　皿Ａ法量分布表……45
表７　古墳時代土器観察表……64
表８　平安時代土器・陶器観察表……68
表９　住居址番号新旧対比表……86

図版目次

第1図版　調査前の状況
第2図版　A地区
第3図版　B・C地区
第4図版　E・F地区
第5図版　第4号住居址(1)
第6図版　第4号住居址(2)
第7図版　第9・81号住居址(1)
第8図版　第81号住居址(2)
第9図版　第81号住居址(3)
第10図版　第81・86号住居址(4)
第11図版　第101号住居址(1)
第12図版　第101号住居址(2)
第13図版　第99・101号住居址(3)
第14図版　その他の住居址(1)
第15図版　その他の住居址(2)
第16図版　その他の住居址(3)
第17図版　その他の住居址(4)
第18図版　その他の住居址(5)
第19図版　その他の住居址(6)
第20図版　その他の住居址(7)
第21図版　その他の住居址(8)
第22図版　その他の住居址(9)
第23図版　その他の住居址(10)
第24図版　その他の住居址(11)
第25図版　その他の住居址(12)
第26図版　その他の住居址(13)
第27図版　その他の住居址(14)
第28図版　その他の住居址(15)
第29図版　その他の住居址(16)
第30図版　その他の住居址(17)
第31図版　その他の住居址(18)
第32図版　その他の住居址(19)
第33図版　その他の住居址(20)・建物址
第34図版　溝
第35図版　集石
第36図版　火葬墓・土坑
第37図版　古墳時代の土器(1)
第38図版　古墳時代の土器(2)
第39図版　古墳時代の土器(3)
第40図版　平安時代の土器・陶器(1)
第41図版　平安時代の土器・陶器(2)
第42図版　平安時代の土器・陶器(3)
第43図版　平安時代の土器・陶器(4)
第44図版　平安時代の土器・陶器(5)
第45図版　金属製品(1)
第46図版　金属製品(2)

第1章　調査の経緯

第1節　文書記録

平成元年9月29日　埋蔵文化財保護協議を松本市役所および現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

11月9日　平成2年度補助事業計画書提出。

平成2年4月4日　平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。

平成2年度文化財保護事業補助金（県費）内示。

5月10日　平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。

平成2年度県営ほ場整備事業山辺地区堀の内遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。

6月8日　堀の内遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。

7月24日　平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

8月10日　平成2年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。

9月12日　平成3年度埋蔵文化財保護協議を松本市役所および現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

10月12日　平成2年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

10月15日　平成2年度補助事業計画書提出。

平成3年1月7日　堀の内遺跡埋蔵文化財拾得届および同保管証提出。

堀の内遺跡埋蔵文化財発掘調査終了届（通知）提出。

2月14日　堀の内遺跡埋蔵物の文化財認定通知。

3月31日　平成2年度文化財保護事業補助金確定通知。

4月10日　平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金確定通知。

10月9日　平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。

10月15日　平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。

11月1日　平成3年度文化財保護事業補助金（県費）内示。

11月20日　平成3年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。

12月27日　平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

平成4年1月23日　平成3年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

第2節　調査体制

調査団長　松村好雄（教育長）

現場担当者　今村克・関沢聡・直井雅尚・三村竜一（社会教育課）

調　査　員　太田守夫・島田哲男・中島経夫・三村肇・宮嶋洋一・望月映・森義直

現場作業参加者

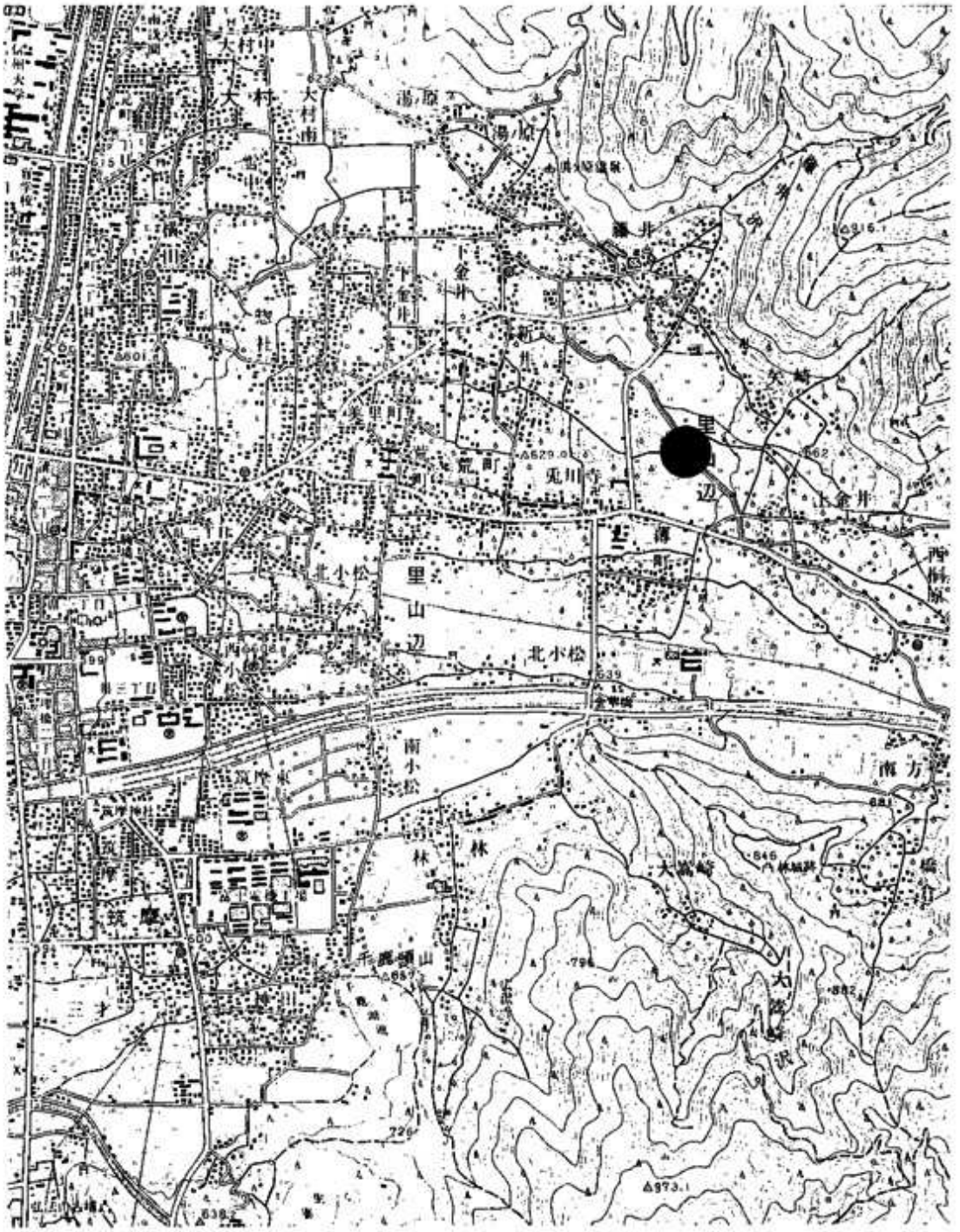
青木雅志、赤羽章、赤羽育代、赤羽さだ子、赤羽貞人、赤羽すゑみ、赤羽紀子、浅輪敬二、新井寛子、石合英子、石合利加子、石川末四郎、伊藤圭一、井上優、因幡美津子、上原松子、浦田長、大下恵二、太田千尋、大谷成嘉、大塚袈裟六、大村貞子、岡部登喜子、小野光信、金井佐和子、上條きみ子、上條妙子、河村陽一、岸輝行、北沢達二、北村洋、草間秀子、草間やす子、久根下三枝子、小池直人、小岩井美代子、興定夫、興喜義、小島茂富、皃玉春紀、小西香珠子、小林勝次、小林甲子世、小林文子、小松房子、小松正子、小柳津倍子、佐々木俊行、佐々木保二、清水菊子、清水公子、清水茂子、清水美代子、下里末子、下里みつへ、末田陽三、鈴木琢二、瀬川長廣、袖山勝美、高橋登喜雄、高橋ナミ、高山寿幸、滝沢隆男、田口吉重、武田睦恵、竹之内健輔、竹村栄美、田多井亘、谷本達治、田村かつよ、田村福美、土屋文昭、鶴川登、中島新嗣、中嶌督朗、中村恵子、中村篤、中村文一、中村安雄、二木茂雄、西沢敬雄、西沢了子、西村好、野沢稔、巾崎助治、花村かつよ、花村みさお、林昭雄、林和子、平林薫、藤井源吾、藤井久子、藤井マツエ、藤本嘉平、藤本利子、藤森公子、降旗大太郎、牧久雄、松下充、真々部まさ子、丸山麻子、丸山恵子、丸山誠、丸山久司、丸山よし子、丸山隆香、三沢元太郎、三代澤武人、三輪美紀、宮川須啓、村田昇司、村山正人、毛國成、百瀬一子、百瀬かね子、百瀬清子、百瀬正美、百瀬縫代、百瀬二三子、百瀬義友、杜達史、矢崎きよの、矢崎寛子、矢沢うめ子、矢島利保、山口幸子、横山小夜子、横山恒雄、横山光代、横山保子、吉江和美、吉江孝子、吉田勝、吉村織絵、依田栄二、米山禎興

整理作業参加者

五十嵐周子、石合英子、内田和子、開嶋八重子、竹平悦子、洞沢文江、松尾さだ子、三村康子、宮嶋加代子、村田昇司、村松恵美子、村山牧江、山田昌子、横山小夜子、横山真理、横山保子、吉澤克彦、六川由美子

事務局

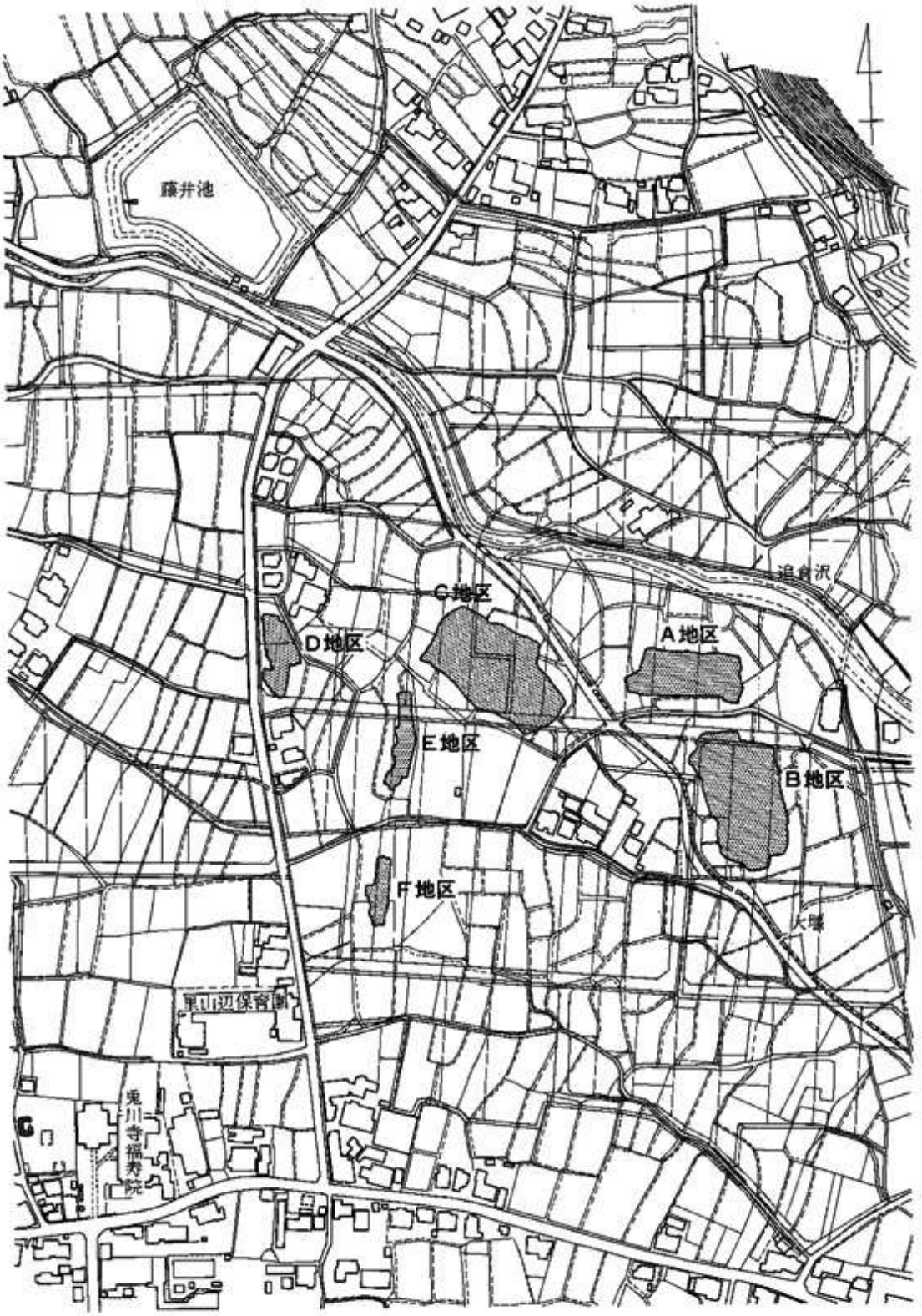
荒井寛（社会教育課長）、田口勝（課長補佐・文化係長）、熊谷康治（課係長）、関沢聡（文化係主事）、直井雅尚（同）、荒井由美、山岸弥生



黒印が遺跡

0 500 1000 1500m

第1図　遺跡の位置



第2図　調査地の範囲

第2章　遺跡の環境

第1節　地形と地質

1　位置と地形

本調査地は、松本市里山辺の兎川寺集落と、追倉沢との間に位置し、標高636～646 m、西へゆるやかに傾く扇状地面（傾斜1.5度）上に広がる水田域にある。地形上は、西流する薄川扇状地の氾濫原の右扇側にあたっている。扇側の北部の山地には、南東から北西に走る断層崖があり、調査地との間に幅200 m ほどの低湿地をつくっている。上金井・藤井・山田等の諸遺跡はこの低湿地上にあり、調査地でもA地区にこの影響がみられる。また調査地の東には北部の山地から流れ出た追倉沢の扇状地の末端が数10 m 内に近づき、さらに天井川となった本流が、現在、調査地の北限となっている。この扇状地の末端や天井川沿いは、一般に低湿地となっていて、調査地のA・B地区の東端では湧水がみられる。

薄川の本流は、現在数段の段丘崖をつくり、調査地から1 km 南の左側扇を西流している。過去に何回かの流路変更や氾濫を繰り返していて、調査地は里山辺地区にあって、最も古いものである。このことは流れの方向N30～40°Wを示す、幅10 m 前後の河床跡が、すべての発掘地区に現れていることからも分かる。河床礫や氾濫によって運ばれた礫は、いずれも薄川系統の径40 cm 以下の巨・大・中礫である。礫層は礫のほか土砂混じり礫層・砂質土層（灰黒・黒・褐・黄褐色）など、氾濫の状況を物語り変化が多い。

これらの河床跡は、上流の里山辺地区の鎌田・石上・薄町遺跡に続くもので、河床跡と住居址の切り合い関係が、河床形成の時期の決め手となる。

現在の水田域は、発掘地の中央を流れる、薄川と海岸寺沢を水源にもつ大堰によって潅漑されている。

2　堆積層と礫

堆積層はいずれの地区も2～3条の河床跡と、その間を埋める土層からなっていて、広範囲の発掘地や扇央・扇側の氾濫原にもかかわらず共通点が多い。一般に表土（水田、一部畑）40～50 cm の下は、厚い砂質土層か河床礫層になっている。遺跡などの検出面は表面から60 cm 前後とみられ、また、この砂質土層は住居址の状態から、河床礫層とは同時異相ではなく、先にあったものと考えられる。

河床はA・B地区から、次第にE・F地区の方向へ移動したものと考えられるが、また氾濫によ

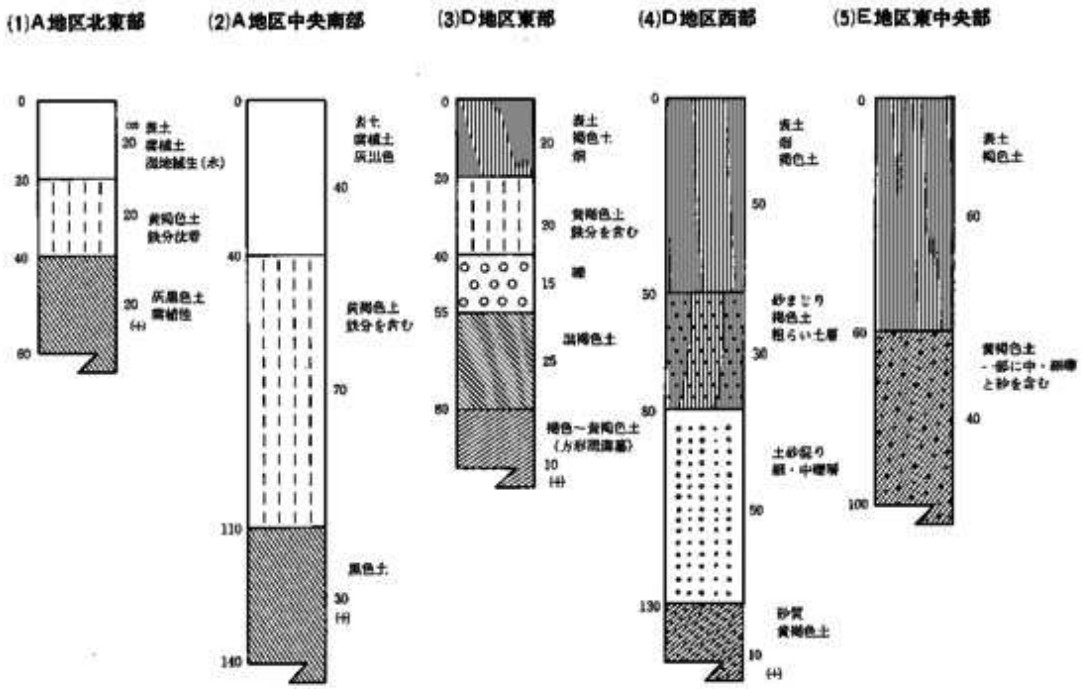
り広く礫に覆われた場所もみられる。さらに河床礫の先端は現在の追倉沢の天井川を越えて、藤井遺跡の泥土層中にもみられる。河床礫は薄川系統で、多い方から安山岩・石英閃緑岩・ひん岩・緑色凝灰岩・砂岩・礫岩と、わずかな白色の凝灰岩である。礫の大きさは、A・B地区は大・中・細礫からなり、C・D・E・F地区はさらに巨礫の多くを混じえる。またA・B地区の礫の中には緑色凝灰岩が多く、C・D・E・F地区で少ないことは、前者と後者の河床に、時期的な違いが考えられる。礫の形は亜角礫・亜円礫・円礫の混ざりである。次に各地区の状況について述べる。

(1) A地区

A地区は追倉沢扇状地の扇端に近く、また追倉沢天井川に最も近い。したがってその影響が、地区の北部・北東部で低湿地や湧水となってあらわれ、現在も湿生植物のヨシ・ガマ・セリが自生している。また土層中には腐植による黒色土がみられる（第3図1）。

発掘面上には東からN40°W、N40°W、N30°Wの走向を示す、3条の河床跡がみられる。東の河床は幅約5 m、やや断続的で細部を明らかにできないが、中央の河床(流れあるいは溝)は幅1.6～1.8 m、礫層の厚さ10～20 cm、礫の大きさは20×10 cm・15×10 cmが多数で、時々30×25 cmの巨礫を混じえ、細礫や砂が少ない。多くの住居址を切っている。西の河床は幅5 m前後、明らかな河床であるが、これより西側には礫の散在と土層が混じる。また発掘地の東端でも礫の散在がみられる。

土層は河床跡や礫の散在地を除き広く分布するが、特に3条の河床跡に挟まれた場所のものは厚



第3図 土層柱状図

い。第3図2は中央と西の河床跡間の断面であるが、厚さは1mを超える。縄文・弥生・古墳時代と考えられる住居址は、この土層中にあり、先に述べた河床により切られたり、散在する礫に覆われたりしているのが目立つ。

(2) B地区

B地区はA地区の上流域にあたり、追倉沢の扇状地末端に最も近い。したがってB地区の東側の水田は湿田状で、畦もとに湧水があり、セリなど湿生植物が生えている。A地区と同様、東側にN40°W、西側にN30°Wの方向を示す2条の河床跡と、河床の両側の厚い土層からなっている。

河床跡間の土層は幅15～16mにおよび、A地区と同じ厚い砂質土である。

西側の河床跡は幅11m前後で、大・中・細礫からなり、巨礫を含まない。礫の種類は安山岩・石英閃緑岩の大礫に、緑色凝灰岩・ひん岩を混じえ、特に緑色凝灰岩が多いのが目立ち、明らかに流れと考えられる。東側の河床跡は幅6～7m、蛇行を示し、礫の種類は西側の河床跡と同様で、やはり緑色凝灰岩の多いのが目立っている。礫の大きさは中・細礫を中心とし、西側のものより小さい。

地層の断面は露頭に乏しく、不明な点が多いが、一般に東側はA地区、西側は次に述べるC地区の堆積状況に似ているところがある。また河床跡は、古墳時代と考えられる住居址を切っている。

(3) C地区

C地区は礫の散在が多く、A・B地区に比べ川の氾濫の印象が強い。その中で発掘地のほぼ中央に、河床跡と考えられる礫層が1条あり、幅5～10m、N30°Wの走向を示している。この礫層や氾濫性の礫は、一般にA・B地区より大きく、安山岩・石英閃緑岩・緑色凝灰岩・凝灰岩とその風化した砂からなり、砂質土を挟む。走向は遠く上流域の薄町・石上・鎌田遺跡の河床礫層につながるものと考えられる。また住居址の深さは20・40・60cmで一般に浅く、平安時代のものを除き、縄文・弥生時代のものは、この礫層や氾濫性の流れによって破壊されている。

(4) E地区

E地区はC地区の南にあり、発掘面積は小さいが、やはり2条の河床跡を示す礫層と、その間を埋める厚い砂質土からなっている。礫層はいずれも幅10～11m、N30～40°Wの走向を示し、C地区の河床跡のさらに左を並流すると考えられる。礫の大きさは大礫が目立ち、中礫と土砂を混じえている。またその中に巨礫も散在している。礫の種類は安山岩が最も多く、全体の礫の½～⅔を占め、A・B地区の½以下とは対照的である。そのほかは他地区と同じく、石英閃緑岩・緑色凝灰岩・ひん岩などである。

土層は第3図5にみられるように、表土の褐色土の下は黄褐色土で、一部に中・細礫の円礫や砂をもつ砂質土を含んでいる。礫層間における土層の幅は23～24mである。この黄褐色土層に住居址が掘り込まれていて、礫層にかかるものは、この層を切っている。

(5) F地区

F地区はE地区のさらに南にあり、南から幅6 m・N30°W、幅12～14 m・N30°W、幅9～10 m・N30°Wの幅と走向をもつ、3条の河床跡がみられる。これらは各地区の河床跡と並走した形をとっていて、礫の大きさ、形、種類はC地区と同じである。河床跡の間には幅7～8 mの土層があり、E地区に比べ含む礫が少ない。これらの礫層・土層は地表から60 cmの深さにあり、遺構検出面ともなっている。住居址は平安時代と考えられ、その深さは20・30・50 cmである。これらのうち礫層上のものは、礫層を切っているのが注目される。

(6) D地区

D地区は以上の地区と様子を異にし、古墳時代前期の方形周溝墓と平安時代の住居址および溝状凹地（N30°W）からなっている。これらの場所で見られる礫の種類は、安山岩・石英閃緑岩・緑色凝灰岩・ひん岩・砂岩のフォルンフェルスなどの円礫と亜円礫であるが、礫の大きさは現れる場所によっていろいろであり、対比がむずかしい。このことは堆積の状況や時期を異にしていると考えられる。また住居址や遺構が極めて接近していながら、状況を異にしているため、さらに対比をむずかしくしている。

方形周溝墓は褐色ないし黄褐色土中にあり、この周辺の地層断面は第3図3のようになっている。方形周溝墓の位置は地表面から80 cmの深さと考えられ、この上層に礫層（15 cm）と黒色土層（25 cm）と表土とが覆っている。平安時代の住居址は、この黒色土層と礫層の同時異相の土層中につくられたと考えられる。

溝状凹地は方形周溝墓や住居址の面より約1 mほど低いところを流れたものと考えられ、第3図4は道路沿いの地層断面や凹地内の断面を合わせてみたものである。流れの走向はN30°Wで、他地区の河床跡と同じであるが、左岸側と右岸側の礫の堆積状態に大きな差異が認められ、その判断をむずかしくしている。即ち右岸側には径25×25 cm前後の安山岩や石英閃緑岩の大礫を中心に、その他の礫が散在している。凹地は浅い鍋底状で、9～10 mの幅をもち、土砂混じりの細・中礫により埋められている。その下部には石英閃緑岩の風化した砂を含む黄褐色土層がのぞいている。

左岸側には幅2 mの中・細礫の河床跡が並行し、さらに幅3 mの土層を隔てて、幅4 m、N30°Wの走向をもつ河床礫層がみられる。この河床礫層は、安山岩の巨・大礫、石英閃緑岩の大礫、緑色凝灰岩・石英閃緑岩・ひん岩・砂岩などの細・中礫の円礫からなっている。安山岩が最も多く、細・中礫の中に巨・大礫が散在した状態である。また他の地区ではみられない、球状の安山岩と石英閃緑岩の礫がみられる。

さて、いずれも同じ走向をもち、薄川系統の礫からなる3条の河床礫層であるが、同時異相とみるか、時期を異にした堆積とみるかの判断はむずかしい。ただ地形面の対比や、断片的な地層断面の観察からは、方形周溝墓・住居址ののる堆積層（黄褐色土層）の後に、これらの河床跡は形成されたものと考えられる。その中で巨礫をもつ左岸側の河床礫層が最も早く、E・F地区の礫層と同じころのものと考えられる。中央の礫層や溝状凹地のものは、それ以後のもので、特に溝状凹地は

右岸側の礫の状態や凹地内の堆積状態からみても、自然流のほかに手が加えられているようにみえる。

形成順は方形周溝墓、巨礫をもった左岸側の河床礫層、平安時代の住居址、溝状凹地と中央の河床礫層と一応、考えられる。

3　地形の形成と遺跡

広い範囲にわたる発掘地であるが、すべて薄川からの流れや氾濫性の堆積層からなっている。発掘地内でも10数条の河床跡(河床礫層)が見つかっている。これらの河床礫層は、いずれもN30～40°Wの走向を示し、上流域の薄町・石上・鎌田遺跡ののる地形面につながっている。発掘地の河床は地形面の傾斜方向である北西へ向かっていて、A・B地区からさらにC・E・D・F地区へ移動して行ったものと考えられる。またこの時期的な違いは、A・B地区に多く他地区に少ない緑色凝灰岩の礫、A・B地区に少なくC・D・E・F地区で多くなる巨礫、さらにA・B地区で全体の礫の½以下しか占めていない安山岩礫が、D・E・F地区では½～⅔の数を示すことなどからも窺える。

これらの河床（流れ）の形成は、遺構（住居址）との切り合いによって推定されるが、本遺跡ではA・B・C地区において、縄文・弥生・古墳時代の住居址が河床（流れ）により切られている。また平安時代の住居址は各地区において、これらの河床を切っているのが観察されている。このことから、すでに述べてきた河床（跡）や氾濫性の礫や堆積は、古墳時代と平安時代の間にあったと考えられる。したがって薄町・石上・鎌田遺跡のような段丘地形の発達が見られない場所での地形形成を知る方法といえる。

一方、追倉沢による扇状地は、海岸寺沢による扇状地に連なるもので、すでに鎌田遺跡でもみてきたように、薄川の高位段丘を埋めて形成されたものである。本発掘地とは直接の被覆関係はないが、扇端における湧水が、A・B地区に影響を与えていると考えられる。実際に追倉沢による湧水は、上金井・藤井遺跡を含む低湿地（「大ブケ」とも呼ぶ）に大きな影響を及ぼしているだけでなく、天井川の舗装により遮られた湧水や地下水が、川の左岸に新たな低湿地をつくっているのがみられる。A地区の北部やD地区の北部に広がる低湿地はこれにあたるものと考えられる。

第2節　周辺遺跡

本遺跡が立地する山辺谷には、薄川扇状地を中心に数多くの遺跡がある。それらは、縄文～近世の各時代にまたがっている。ここでは発掘調査が行われた遺跡を中心に、時期別に周辺遺跡を概観したい。

旧石器時代　この地域においては、弘法山古墳東麓において尖頭器が採取されているのみである。発掘調査では遺物、遺構ともに見つかっていない。

縄文時代　この時代の遺跡は、主に山辺谷山麓から薄川扇状地奥部にかけて分布している。薄川左岸では、1987年林山腰遺跡の調査で中期初頭の住居址3軒、後期の敷石住居址1軒が検出されている。1988年の南方遺跡の調査では早期～晩期の遺物が出土している。右岸では、1989年に調査を行った石上遺跡で前期の住居址3軒、鎌田遺跡で住居址1軒が検出されている。山麓では、堀の内遺跡で住居址が検出されたのをはじめ、藤井、上金井遺跡でも遺物が出土している。

弥生時代　薄川右岸では、1982年の調査で前期の再葬墓群が検出された針塚遺跡がある。また、近接する鎌田遺跡では1989年の調査で後期の住居址2軒が検出された。薄川下流域では、42軒の住居址が検出された県町遺跡があり、当該期の中心的な遺跡として位置付けられる。このほか、元屋敷、惣社宮北遺跡でも遺物を得ている。

古墳時代　山辺谷の各地には20数基の古墳がある。それらの中には、積石塚古墳が6基含まれている。近年、大塚・南方・針塚の3古墳が発掘調査されて大きな成果をあげた。集落遺跡では、1987年に発掘調査された薄川左岸の千鹿頭北遺跡で、前期・後期の住居址47軒が検出されている。薄川右岸では、1982～86年の推定信濃国府確認調査の際、数軒の住居址が検出されている。1989年に調査された鎌田遺跡では、中期の住居址1軒が検出されている。地域全体の様相は不明な点が多く、今後の調査に期待したい。

奈良・平安時代　この時期は、薄川中下流域の各遺跡で発見されている。右岸では、県町遺跡で47軒、石上・薄町遺跡で43軒のほか、惣社宮北、本年度調査した針塚遺跡などでもみつかっている。左岸では千鹿頭北遺跡で17軒のほか、南方、林山腰、神田の各遺跡で検出されている。分布からみると、薄川右岸扇央部から扇端部にかけての広範囲に集落が展開していたと考えられる。

中近世　大塚古墳、薄町、石上、南方遺跡などで中近世の遺物を得ているが、調査例が少ないためその様相はよくわかっていない。今後の調査に期待したい。

第3章　調査結果

第1節　調査の概要

1　調査地（第4図）

調査の前段で行った、トレンチによる遺構分布確認範囲を中心に、A～F地区までの6地区を設定した（第4図）。その範囲は東西約330m（D地区西端からB地区東端）、南北約200m（D地区北端からF地区南端）に及ぶ。各地区の面積は以下のとおりで、合計は10690m²になる。

A地区：1758m²　　B地区：3530m²　　C地区：3702m²

D地区：721m²　　E地区：566m²　　F地区：413m²

(1)　A地区（第5図）

25軒の竪穴住居址と9基の土坑、2本の溝を検出している。竪穴住居址の時期は縄文時代中期初頭が2軒の他は弥生時代後期から古墳時代後期にかけてのもの。2本の溝は自然流路で、溝701は奈良時代の土器を出土する。本地区は縄文時代中期初頭および弥生時代後期から古墳時代後期にかけての居住域であったと言える。なお、第101号・第105号・第117号住居址はいわゆる火災住居で、第101号住居址からは良好な遺物が出土した。

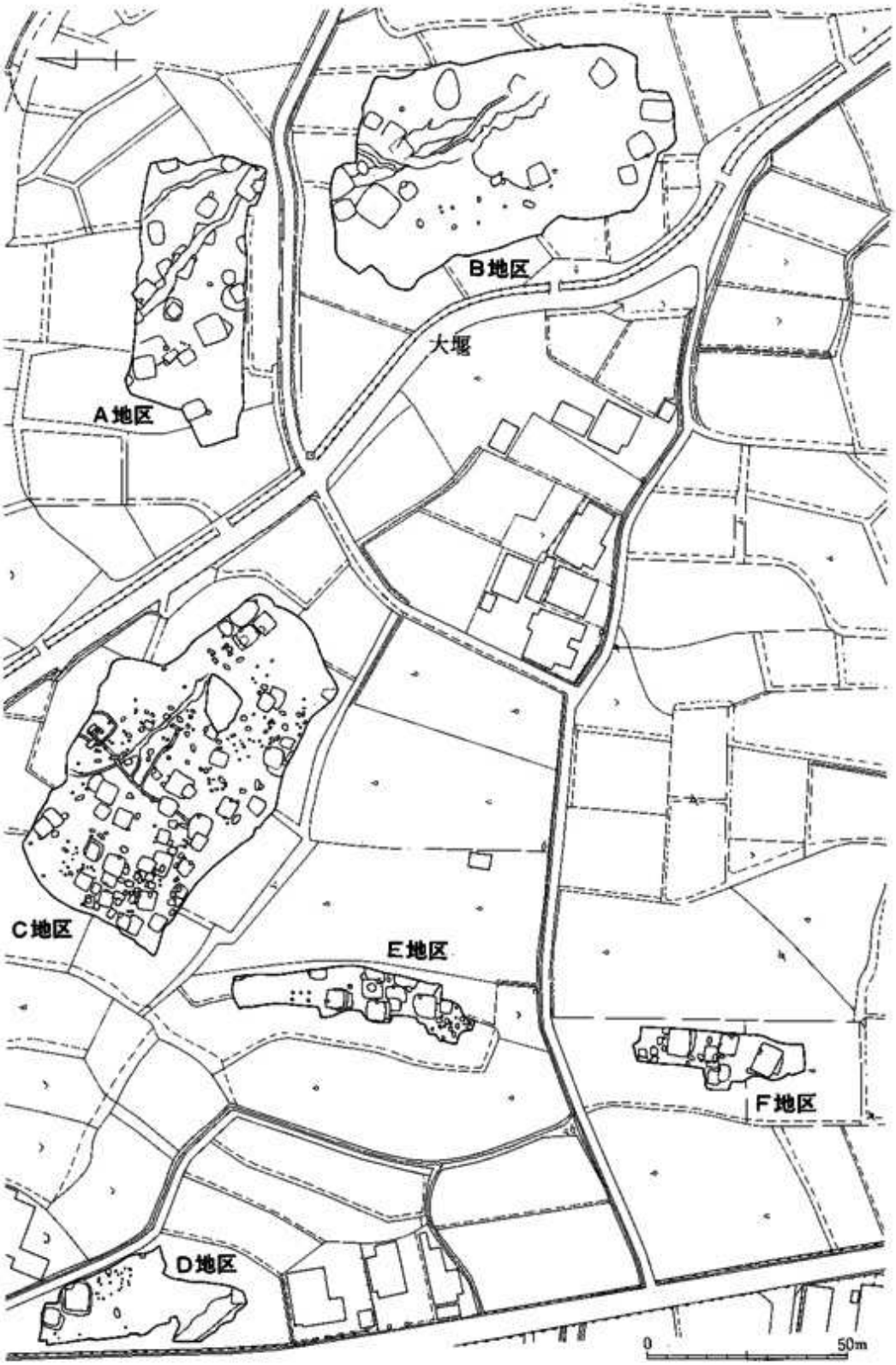
(2)　B地区（第6図）

14軒の竪穴住居址と11基の土坑、2基の集石、3本の溝を検出している。竪穴住居址は1軒が縄文時代中期初頭、他は弥生時代後期から古墳時代後期にかけてのもので、本地区はほぼA地区と同じ頃に居住域になっていたことがわかる。第81号・第84号住居址はいわゆる火災住居で、第81号住居址からは古墳時代中期に属する良好な遺物が出土した。土坑のほとんどは弥生～古墳時代に、また集石は縄文時代中期初頭に属するものであろう。3本の溝は自然流路であるが、時期差があり、出土遺物や重複から、溝601が弥生後期、他は古墳後期以降のものと考える。

本地区は3本の溝以外にも不明瞭で小規模な自然流路の痕跡が随所にあり、それらに因って覆われ破壊された遺構が更にいくつかあったと推定される。その理由は、流路の礫層の脇から古墳時代の土器がまとまって出土したり、縄文時代中期初頭の遺物が一定の範囲に濃密に散布していながら遺構として捉えることがどうしてもできなかった地点が何か所かあったからである。

(3)　C地区（第7図）

41軒の竪穴住居址と148基の土坑、6本の溝、1基の集石炉、および1基の火葬墓を検出した。竪穴住居址の時期が判別したものは、3基が縄文時代中期初頭、1基が弥生時代後期の他はすべて平安時代で、D・E・F地区に続く、本遺跡の平安時代遺構分布の中心になっている。多数の土坑は



第4図　調査地区および遺構分布

縄文時代中期初頭と中世以降が主体とみられ、溝はいずれも人為的な遺構で平安時代以降、集石炉は縄文時代、火葬墓は中世に属する。

(4) D地区（第8図）

4軒の竪穴住居址と方形周溝墓1基、土坑3基、溝1本とピット群が発見されている。方形周溝墓は古墳時代前期と推定され、溝は住居址との重複から平安時代以前に属する。竪穴住居址はすべて平安時代で、ピット群と土坑は中世に属する可能性が高い。

さらに本地区で特記する事項として、かなり狭い地区でありながら区内の南部から西部に向かって非常に浅い自然の谷状地形（溝状凹地）が観察できたことである。当初、大規模な遺構か、または古い時期の流路と考えたが、一様に黒褐色土が埋没しているだけで、遺物の出土もなかった。

(5) E地区（第8図）

16軒の竪穴住居址と1棟の掘立柱建物址、14基の土坑、1基の火葬墓が検出された。竪穴住居址と掘立柱建物址は平安時代の所産で、土坑と火葬墓は時期を知る遺物が少なく明確なことは言えないが、重複関係や類例から見て中世以降のものと推定する。

(6) F地区（第8図）

10軒の竪穴住居址と22基の土坑が検出された。竪穴住居址はすべて平安時代に属し、土坑はE地区と全く同様の状況で、やはり中世以降に比定されよう。土坑墓は重複関係からみて、平安時代前半のものであろう。第4号・第9号の2軒の竪穴住居址は他よりも一回り大きく、しかも火災住居で、多量の遺物を出土した。

2 遺構

今回の調査で発見された遺構の種類と総数は次のとおりで、それらの属する時代も縄文時代中期初頭、弥生時代後期、古墳時代前期～後期、奈良・平安時代、中世の多岐にわたる。

竪穴住居址：110	土坑：207	集石炉：3	方形周溝墓：1
掘立柱建物址：1	溝：12	火葬墓：2	土坑墓：1

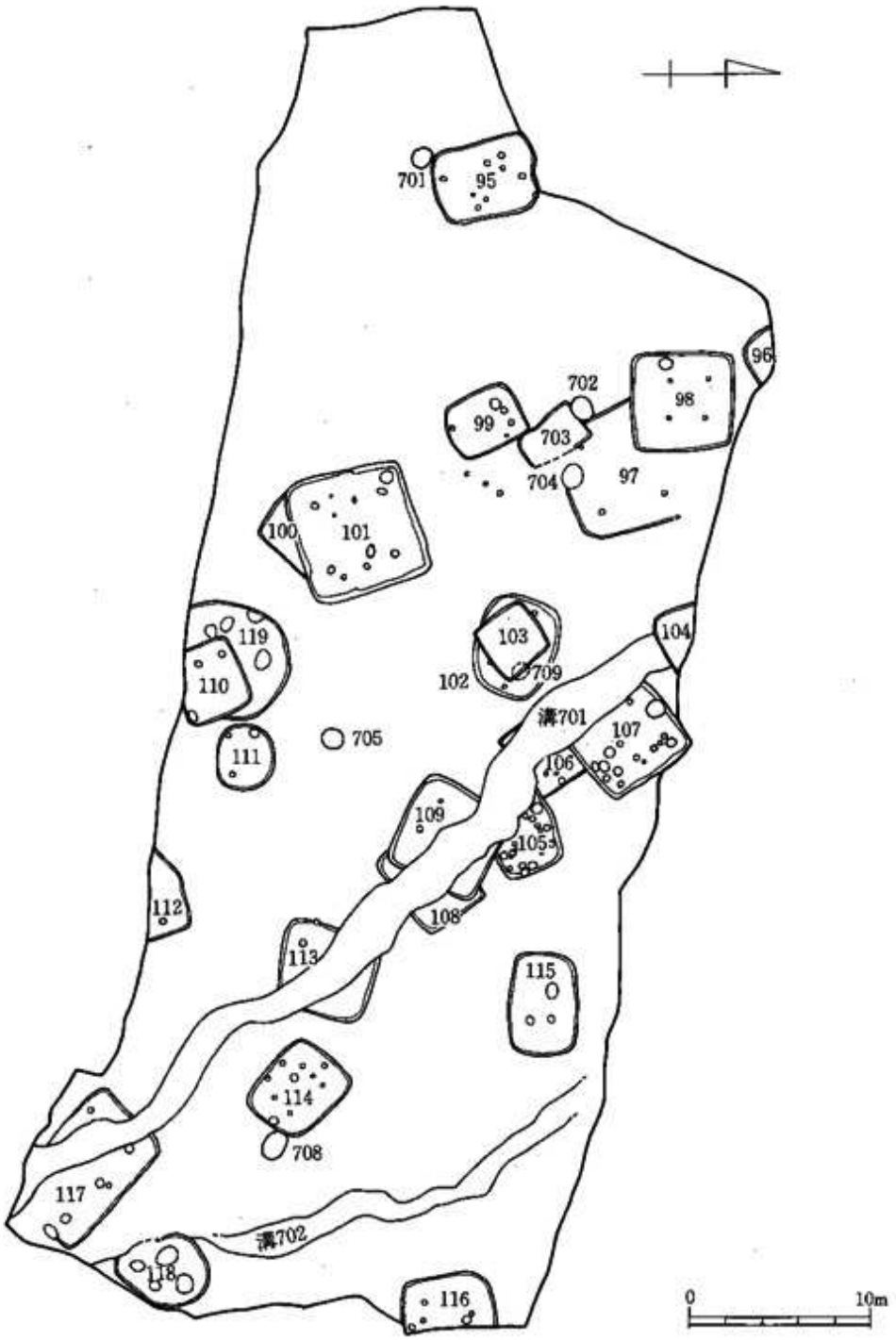
以下では遺構の種類毎に地区、形態、時代と分布の傾向等を概観する。

(1) 竪穴住居址

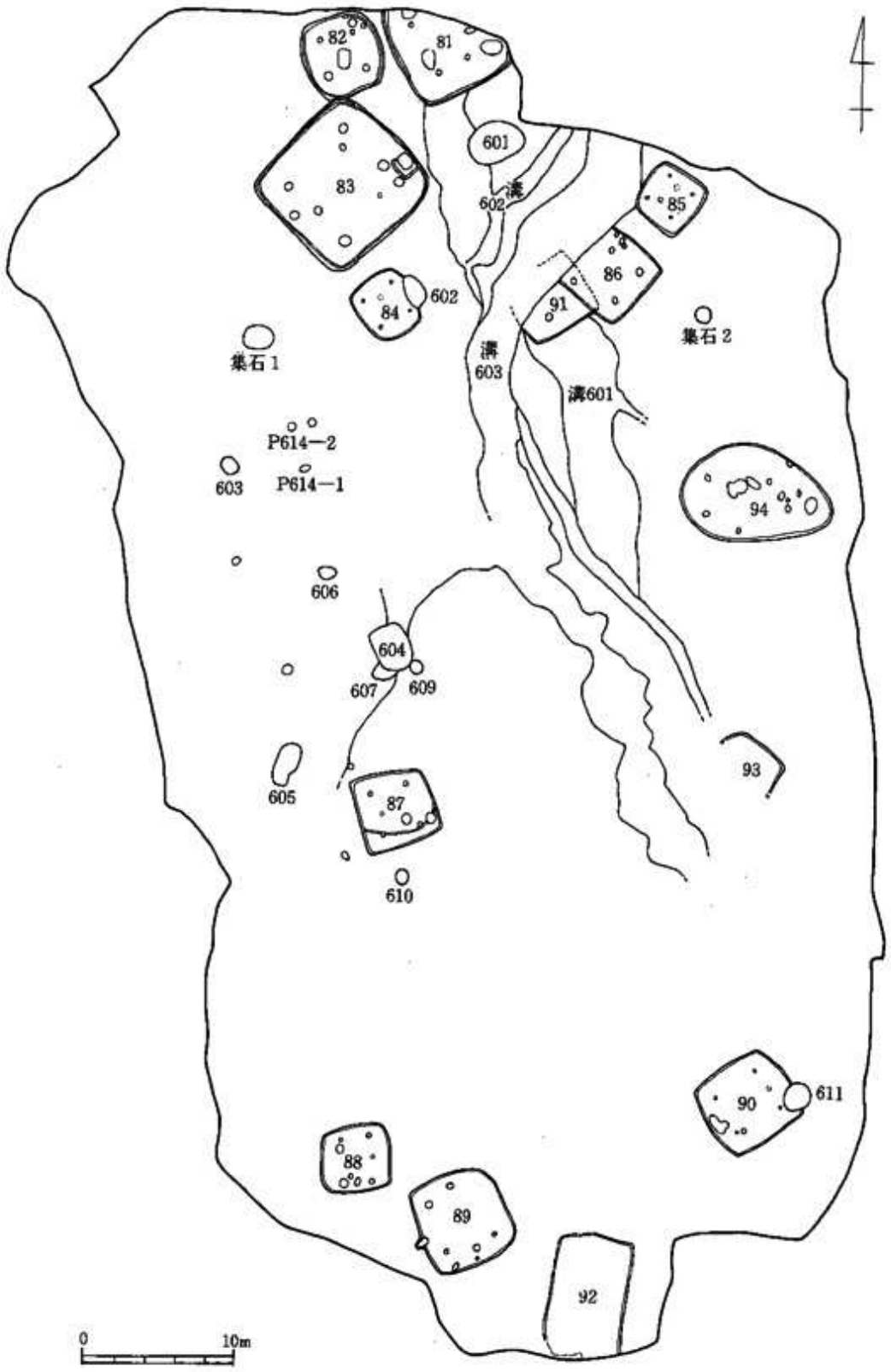
①時期と分布傾向

縄文時代中期初頭6軒、弥生時代後期10軒、古墳時代前期17軒、同中期4軒、同後期4軒、平安時代67軒、時期不明2軒の計110軒の竪穴住居址が発見された。しかし、遺構間の重複や削平、調査区外にかかる等で全形を捉えられていないものも多い。

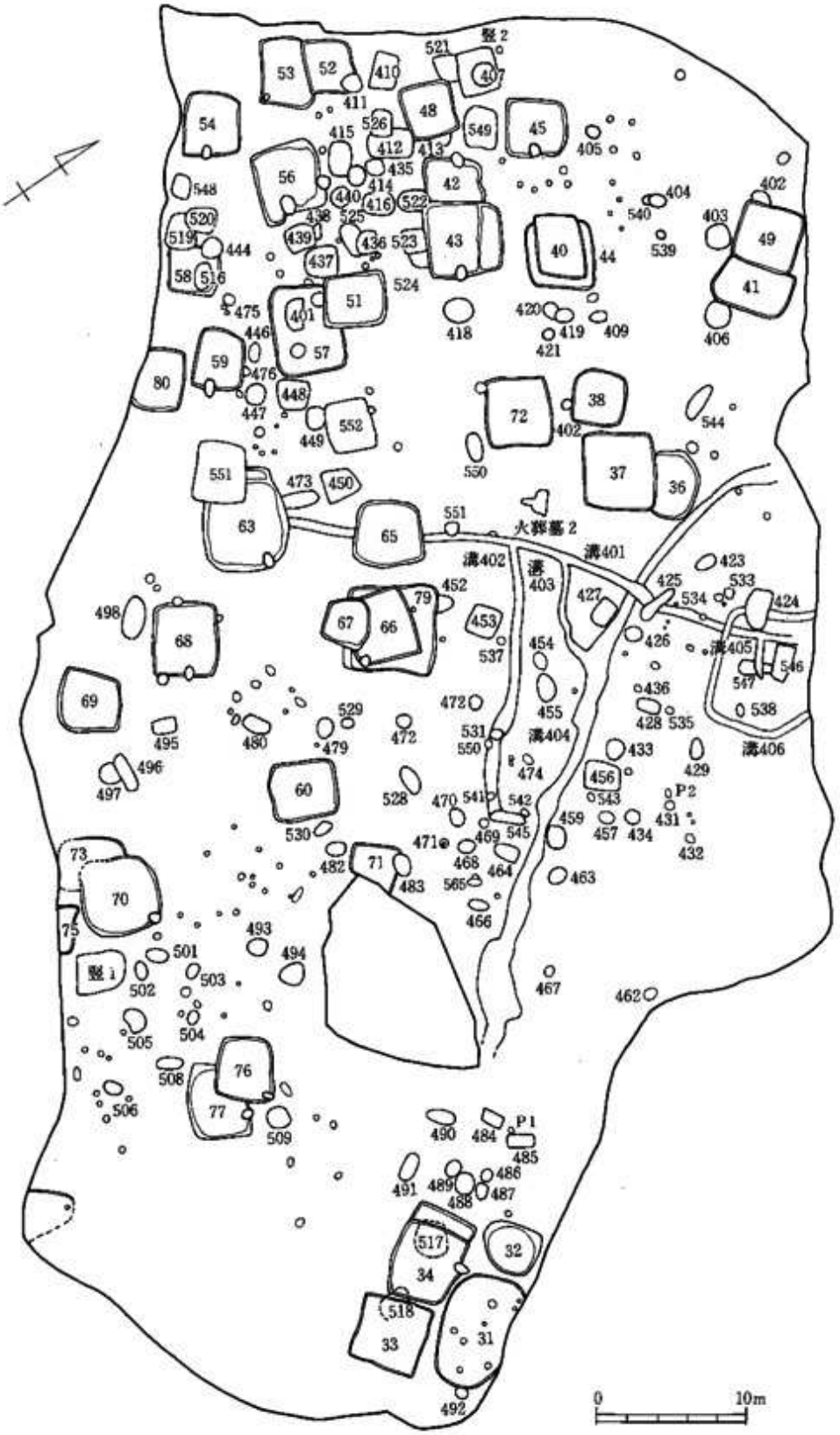
各時期の竪穴住居址の分布にはかなり特徴が見られる。即ち、縄文時代のものはA・B地区からC地区東南部に、弥生・古墳時代はA・B地区を中心として一部C地区に、一方平安時代はC地区とその西のD・E・F地区に分布し、大きく見るとC地区南東部に境界線が設定できる。


701
95
96
98
99
702
703
704
97
100
101
103
102
709
104
119
110
111
705
溝701
107
106
109
105
112
108
113
115
114
708
117
溝702
118
116
0
10m

第5図　A地区遺構分布


82
81
601
83
溝
602
85
602
86
84
91
集石2
集石1
溝
603
溝601
P614—2
603
P614—1
94
606
604
607
609
93
605
87
610
611
90
88
89
92
0
10m

第6図　B地区遺構分布



第7図　C地区遺構分布

②平面形

個々の竪穴住居址の平面形態は、縄文時代のものが概ね円から楕円、弥生時代が方形に近い長方形および長方形、隅丸長方形（かなり隅が丸く、楕円または「小判形」と表現したほうが適切なものもある）、古墳時代以降が方形となる。平安時代のものには、かなり形の崩れた不整形や、大形で長方形のものがある。

③住居内施設

ピット・柱穴・炉・カマド・周溝・貯蔵穴などの施設が見られるが、時期によってかなり異なりがある。柱穴を含む数基のピットは各時期に共通だが、平安時代になると全くピットが発見されない竪穴住居址も多数現われる。炉は縄文時代から古墳時代中期までで、住居床面に僅かに焼土が残る地床炉と土器（甕の胴部）を埋設した埋甕炉の2種類がある。カマドは古墳時代後期以降に見られ、いずれも作り付けカマドだが、平安時代になると袖に石材を多用するようになり、位置も一方の壁面中央部から端に偏っていく傾向が顕著になる。周溝と貯蔵穴は古墳時代前期の一部のものに見られるのみである。

(2) 掘立柱建物址

E地区で1棟発見されているにすぎない。しかも調査区域外にかかり、規模は梁行2間、桁行2間以上ということしかわからない。時期は周辺の竪穴住居址がすべて平安時代であり、それらに伴うものと推定している。

(3) 方形周溝墓

D地区で1基発見された。規模・時期等については第2節2で触れる。

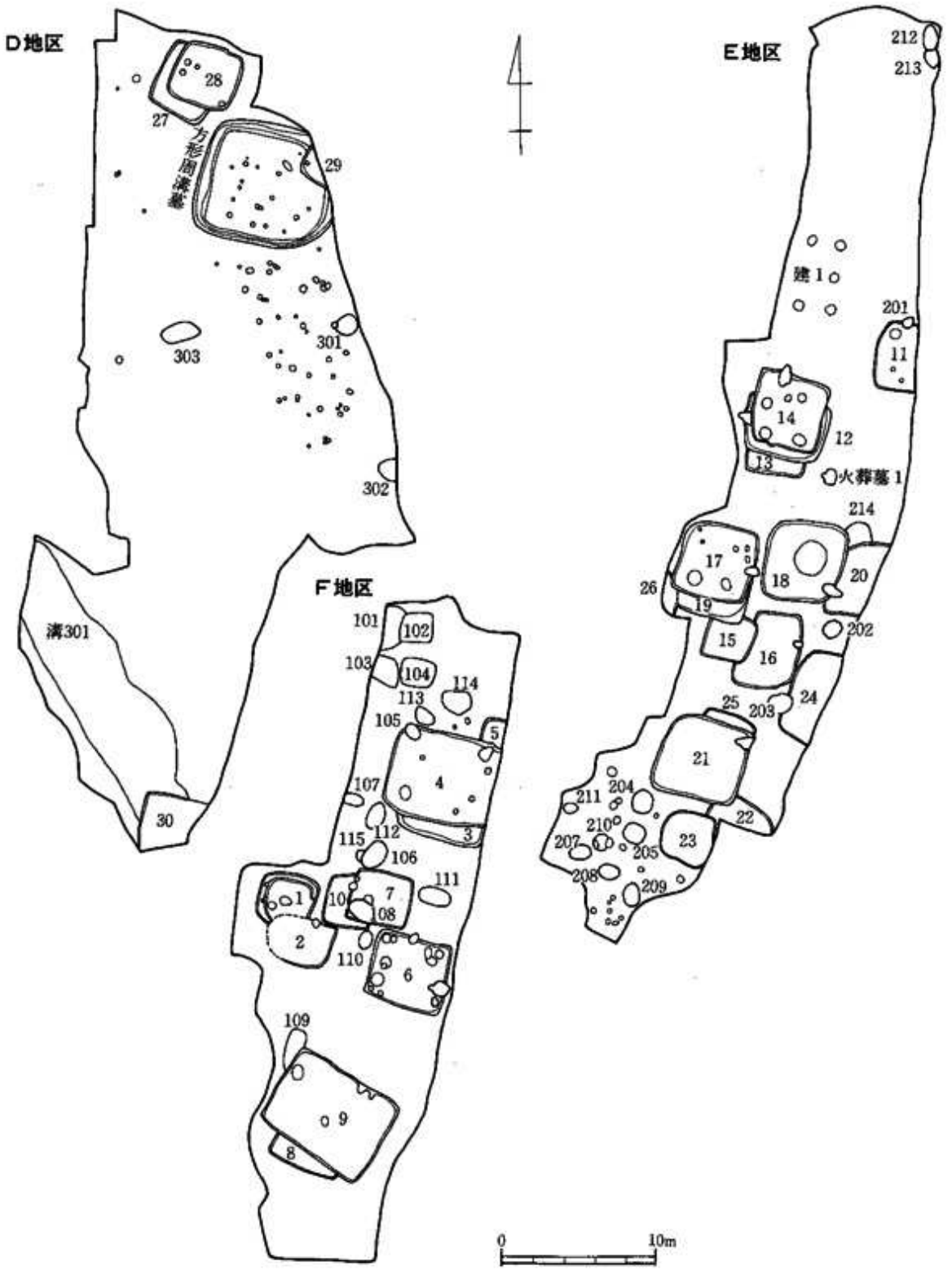
(4) 土坑

径が50 cm から1.5 m 内外の穴を土坑として扱った。A地区9基、B地区11基、C地区148基、D地区3基、E地区14基、F地区22基の合計207基が発見されている。平面形は、円、楕円、方形、長方形などを呈し、規模・深さもさまざまである。時期は、遺物を出土して確定できるものがあまりないが、縄文時代中期初頭、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代以降（中世が主体）に属し、中世以外は竪穴住居址の時期にほぼ一致する。分布も時期によって異なり、各時期の竪穴住居址群分布域とほぼ重なる。即ち、縄文時代のものはA・B地区およびC地区東部に、弥生～古墳時代のものはA・B地区に、平安時代以降のものはC地区以西に広がっている。

土坑に伴った遺物は、各時期の土器・陶磁器、鉄器、石器類だが数量は少ない。縄文時代の土坑で円形を呈す深いものと、中世の大形のものは墓址の可能性が高い。

(5) 溝

溝として一括したが、人為的なもの（遺構）の他に自然流路が含まれている。A地区2本、B地区3本、C地区6本、D地区1本の計12本を把握した。A・B・D地区の6本は自然流路であり、前項B地区の段でも述べたとおり、B地区には明瞭に捉えることができなかった自然流路が、さら



第8図　D・E・F地区遺構分布

に2～3本あると推定する。自然流路の中には遺物を持つものもあるが堆積のいずれかに砂層・礫層を持ち、一方、人為的な遺構は砂礫が見られない。

時期的には、各地区で大きな異なりをみせる。A地区の2本（溝701・702）はいずれもすべての遺構を切り、溝701からは奈良時代に属すると考えられる須恵器の有台杯を出土している。B地区は溝601が弥生土器を出土して、しかも古墳時代の遺構に切られるのに対し、他の2本はこの溝601を切る。溝701と近似する時期であろう。C地区はいずれも褐色土を覆土に持つ人為的な遺構と考えられ、20～30 cm と浅い。縄文土器の小破片を僅かに出土しているが、周辺の同期土坑などからの混入の可能性が高い。むしろ平安時代以降の遺構に切られる点から、弥生時代後期～平安時代の間に所属時期を求めたい。溝406は方形区画状を示すが、細く浅い上に平面形が崩れており、方形周溝墓とは考えられない。D地区の溝（溝301）は幅4 m 以上の大きなもので、覆土に礫が詰まる自然流路であった。南端部で平安時代の竪穴住居址に上部を破壊されているため、それ以前の時期であることがわかる。

(6) 集石

B地区に2基（集石1・2）、C地区に1基（土坑488）が発見されている。いずれも50 cm～1 m ほどの土坑に拳大の礫が詰まる。集石2と土坑488はやや深く、礫間に炭化物が多数混じっており、集石炉になると考える。時期は縄文時代中期初頭の竪穴住居址や土坑に伴うものであろう。

(7) 火葬墓

C地区中央部北とE地区中央部にそれぞれ1基づつ発見されている。小形の隅丸長方形の一辺に突出を持つ形態のもので、内部には炭化材・炭化物と焼骨小片が多量に含まれていた。他遺跡の例から推定して中世に属する遺構であろう。いずれも遺物の出土はない。

(8) 土坑墓

1基のみ確認されている（土坑109）。F地区南部で第9号住居址に切られる形で発見され、僅かな人骨片と歯が遺存していた。平面形は隅丸長方形または長楕円を呈すと推定され、類例からみても平安時代の伸展葬の土坑墓として間違いあるまい。

(9) その他

C地区とD地区に多数のピットが検出されているが、出土遺物が少なく時期や性格を確定できない。ただし、D地区のピットは一定の範囲に群をなし、中世の建物に関連する可能性が高い。

3 遺物

(1) 土器・陶磁器

各時期の遺構および包含層、検出面から多量の土器・陶磁器類が出土している。種別では、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁、白磁、瀬戸美濃系陶器などがみられるが、緑釉陶器以下は、ごく僅かの出土量に過ぎない。

①縄文土器

A・B・C地区の縄文時代の竪穴住居址と土坑、およびその周辺の検出面から多量に出土している。すべて縄文時代中期初頭に編年される土器で、これらを伴った遺構の時期をも示している。出土状態は、A・B地区にあっては、当該遺構の覆土中に一括品や大形破片となって密集していたが、遺存状態が極めて悪く、表面の摩滅が著しい上に細かく割れていた。C地区の竪穴住居址や土坑からの出土品の方が量的には少ないが、土器自体の状態はよい。いずれも今回の報告に提示できるまでに整理が及ばなかった。

②弥生土器

A・B・C地区の弥生時代後期に属する竪穴住居址、溝および周辺の検出面から出土している。すべて弥生時代後期後半から末頃に編年される土器とみられるが、今回の報告作成まででは大部分が未整理なので詳細はわからない。出土状況は、埋甕炉を除いて、竪穴住居址の覆土や床面から破片が散発的に出土した程度で、まとまった資料はない。器種は櫛描文の甕・壺、赤彩した鉢などが見られた。

③古墳時代の土器

種別は土師器と須恵器だが、大きく分けて、それぞれ前期・中期・後期に属するものがある（須恵器は後期に限られる）。いずれも竪穴住居址内から得られているが、前期の土器は溝や検出面からもかなり広範囲に出土した。

前期の土器は土師器ばかりで、器種は壺・甕・台付甕・S字口縁台付甕・高杯・小型器台・鉢などが認められた。当該時期遺構内や溝・検出面から破片が散発的に出土し、一括品が多数まとまって遺存するような良好な資料はなかった。

中期の土器も土師器ばかりで、器種は壺・甕・高杯・小型丸底土器・坩などがある。主に竪穴住居址内から出土したが、当該時期の竪穴住居址にはいわゆる火災住居が何軒かあり、多数の一括品を出土する極めて良好な資料がいくつかあった。この中で最も条件の良い2軒の出土品（第81・101号住居址出土土器）については、第3節で取り上げ詳述する。

後期の土器は主体が土師器だが、若干の須恵器の破片を混じえていた。土師器の器種は、甕・甑・杯・高杯・坩で、杯には内面黒色処理の技法が観察できる。須恵器は大甕の胴部破片のみで器形の復元はできない。後期の土器は、当該時期の竪穴住居址内から少量が出土したのみだが、その中でも比較的まとまっていた第86号住居址の資料を第3節で取り上げた。

④平安時代以降の土器・陶磁器

平安時代の土器・陶磁器は、主に竪穴住居址内から出土している。各住居址からの出土量は、特殊な例を除いて余り多くないが、この時期の住居址の数が多いため、結果として今回の調査で出土した土器の主体をなすものとなっている。ただし細かくみると、時期は9世紀中頃から11世紀末までに拡がり、平安時代として一括するにはやや幅がありすぎ、各期ごとに種別と器種の組成がかな

り異なってくる。通してみると、種別は、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁からなるが、緑釉陶器は際立って少なく、白磁は椀の小破片数点を数えるにすぎない。器種は、土師器（黒色土器を含む）に杯・椀・皿・鉢・盤・甕・小形甕・羽釜・甑、須恵器に杯・蓋・長頸壺・甕、灰釉陶器に椀・皿・段皿・耳皿・鉢・広口瓶・手付き瓶・小瓶、緑釉陶器に椀・皿・段皿・耳皿など多岐にわたる。前述のように竪穴住居址内から散発的に出土したものがほとんどだが、F地区の第4号および第9号住居址からは多量の土器・陶器がまとまって出土し、11世紀代の当遺跡における土器様相を見事に示した。両遺構出土品は第3節で取り上げ、詳述する。

中世の陶磁器は、C・D・E・F地区の検出面や土坑内から、少数の青磁と陶器の破片が出土しているにすぎない。

(2) 石器・石製品

遺構が確認された各時期に伴うものが多数出土している。縄文時代に伴うものとしては石鏃・石匙・石錐・打製石斧・磨製石斧・凹石・石皿・石棒、弥生時代は管玉・磨製石鏃、古墳時代以降は砥石・石臼・礫石錘などの種類がある。これらは主に各時期の遺構内から出土したが、弥生時代のものはA・B地区の検出面に広く散布していた。

(3) 土製品

古墳時代中期の竪穴住居址から出土したミニチュア土器と、平安時代の竪穴住居址からの鞴の羽口が挙げられる。ミニチュア土器は手捏ねの深鉢形をしており、甕か小型丸底土器の模倣品であろう。A地区の第106号住居址からまとまって出土している。

(4) 鉄器・金属製品

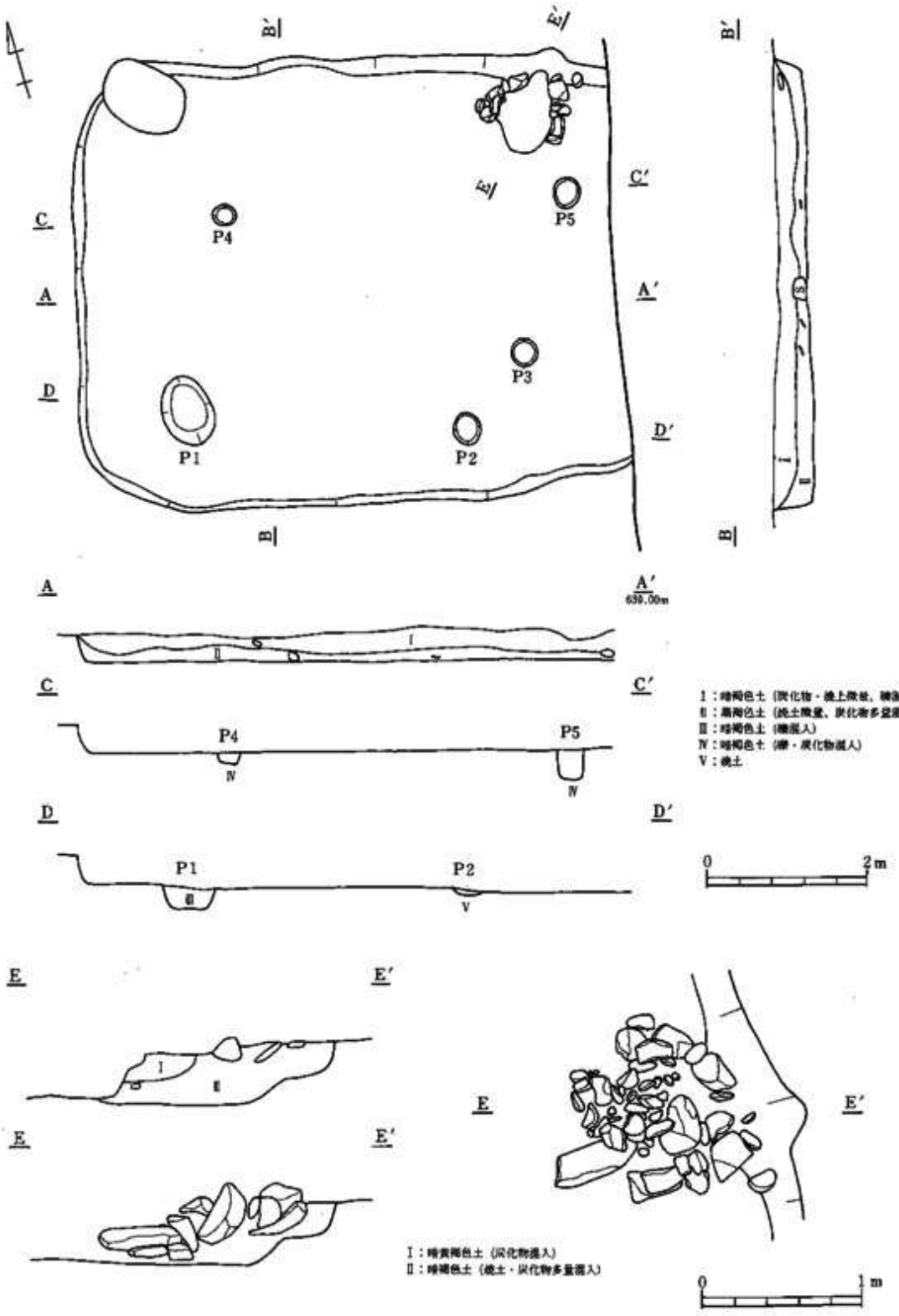
平安時代の住居址を中心として多数の出土がある。種類は鉄器・鉄製品に鏃・刀子・鉇・釘・鎌・鉸具・麻引金具・紡錘車・鍬先・毛抜き型鉄器・クサビ？、銅製品で鋺が確認されている。時期別にみると、ほとんどが平安時代に伴うもので、弥生・古墳時代の遺構からは形態がわかるものとしては鏃が1点出土したのみである。平安時代の多数の鉄器の内、F地区の第4号および第9号住居址から得られたものは質・量ともに際立って優れており、該期の良好な資料として、第3節で詳述する。

(5) 銭貨

C地区の検出面から2点、同じくC地区の第38号住居址覆土から1点が出土している。いずれも宋銭で、検出面からの2点は「皇宋通寶」「元祐通寶」、第38号住居址のものは「淳化元寶」と判読できる。本来は中世の土坑に伴っていたものであろう。

(6) その他

炭化材・炭化物・骨などが火葬墓や火災住居から、また鉄滓がいくつかの平安時代の竪穴住居址から出土している。


B
B'
C
C'
A
A'
D
D'
P1
P2
P3
P4
P5
A'
630.00m
I：暗褐色土（炭化物・焼土微量、礫混入）
II：黒褐色土（焼土微量、炭化物多量混入）
III：暗褐色土（礫混入）
IV：暗褐色土（柱・炭化物混入）
V：地山
0
2m
E
E'
I：暗黄褐色土（炭化物混入）
II：暗褐色土（焼土・炭化物多量混入）
0
1m

第9図　第4号住居址

第2節　主な遺構

1　竪穴住居址

(1)　第4号住居址（第9・10図）

F地区北部に所在する。北西隅を土坑105に切られ、僅かに東側が調査区域外にかかる。6.56×5.48mの東西に長い隅丸長方形を呈し、主軸方向はN－14°－E。壁高は平均40cmを測り、床面積は東側を復元すると32.8m²となって、今回調査の平安時代住居址の中では第9号住居址に次ぐ2番目の大きさを誇る。カマドは北壁の東端にあり、10～30cm大の礫で組んだ袖が残存している。床面は地山を平らにしたもので固く締まっているが、南半部が黄色土の地山に僅かに小礫が露出するのに対し、北半部は砂利質になっている。ピットはP_1～P_5が検出されたが、柱穴にふさわしい位置・規模の組み合わせがみつけられない。

本址は、覆土の埋没および遺物の出土状況が特異であった。覆土は概ね上下2層に分層できたが、下層であるII層：黒褐色土中には多量の炭化物と遺物が含まれる。このため当初、一種の火災住居と理解したが、炭化材の遺存は明瞭ではなく、その点で疑義が残る。いずれにせよ、遺物廃棄に通常の住居址とは異なる過程があったことは認めてよいであろう。従って本址出土遺物は、一括遺物に準ずるものとして扱ってよいと考える。

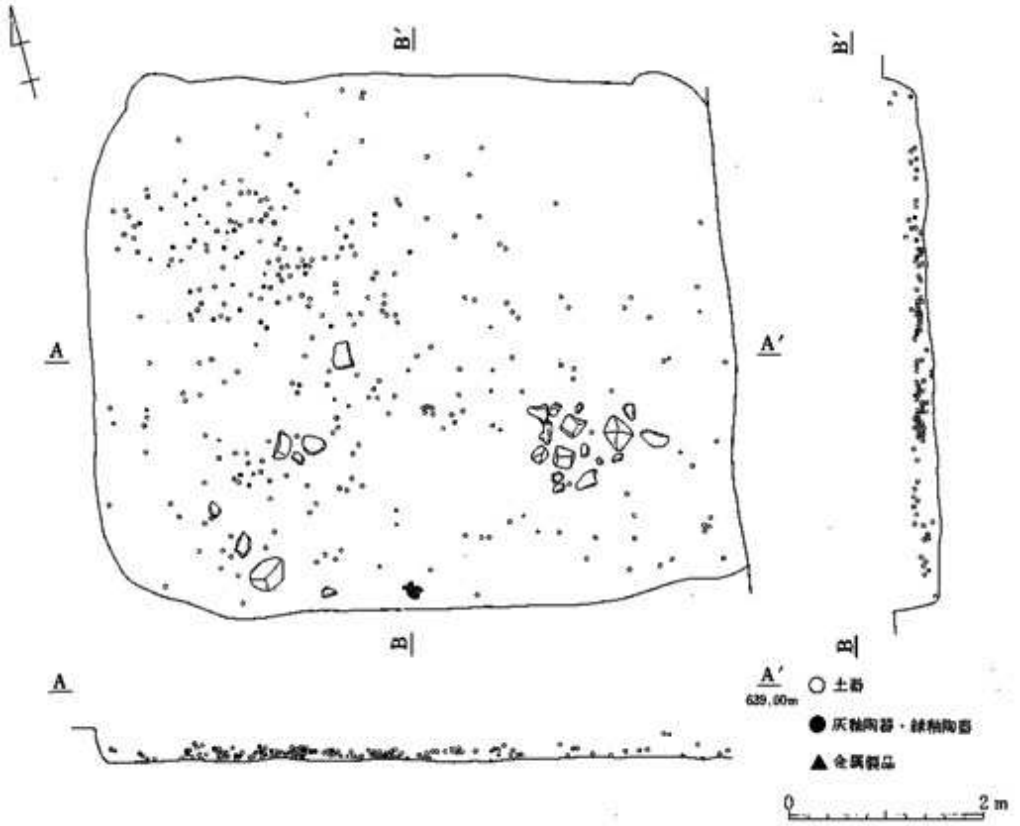
遺物は土器類と金属製品が中心だが、種類と数量が異常に多い。土器・陶器類では土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器があり、図化提示できたものだけでも124点。鉄製品は鏃・鉇・鎌・苧引鉄・紡錘車・帯金具（鉸具）・釘など33点が提示できた。他に鉄滓14点が出土している。

出土した土器・陶器からみて本址は11世紀中頃に営まれた遺構と推定される。

(2)　第9号住居址（第11・12図）

F地区南部に位置し、第8号住居址と土坑109（土坑墓）を切る。東西6.24m、南北5.56mを測るやや隅丸の長方形を呈し、主軸はN－33°－Eを指している。床面積は38.2m²で、平安時代住居址のなかでは最大規模を持つ。壁高は10～30cmとかなり浅い部分もあるが、本来はもっと深かったのであろう。カマドは北壁の東寄りにあり、崩れて礫を数個残すばかりとなっている。床面は地山をそのまま平らにしたものだが、西半部は黄色土でよく締って固いのに対し、東半部は礫が露出している。ピットは2基検出されているが、柱穴等には想定できない。

本址の遺物出土状況は特殊で、床面とやや上部に多量の土器類を中心に、かなりの密度で広がっていた。また、その間には人頭大の礫や炭化物が含まれていた。これをもって火災住居と断じるのは難しいが、通常とは異なる遺物廃棄がなされていることは確かだ。このことから本址出土遺物を一括遺物として認定するのは不可能ではあるまい。



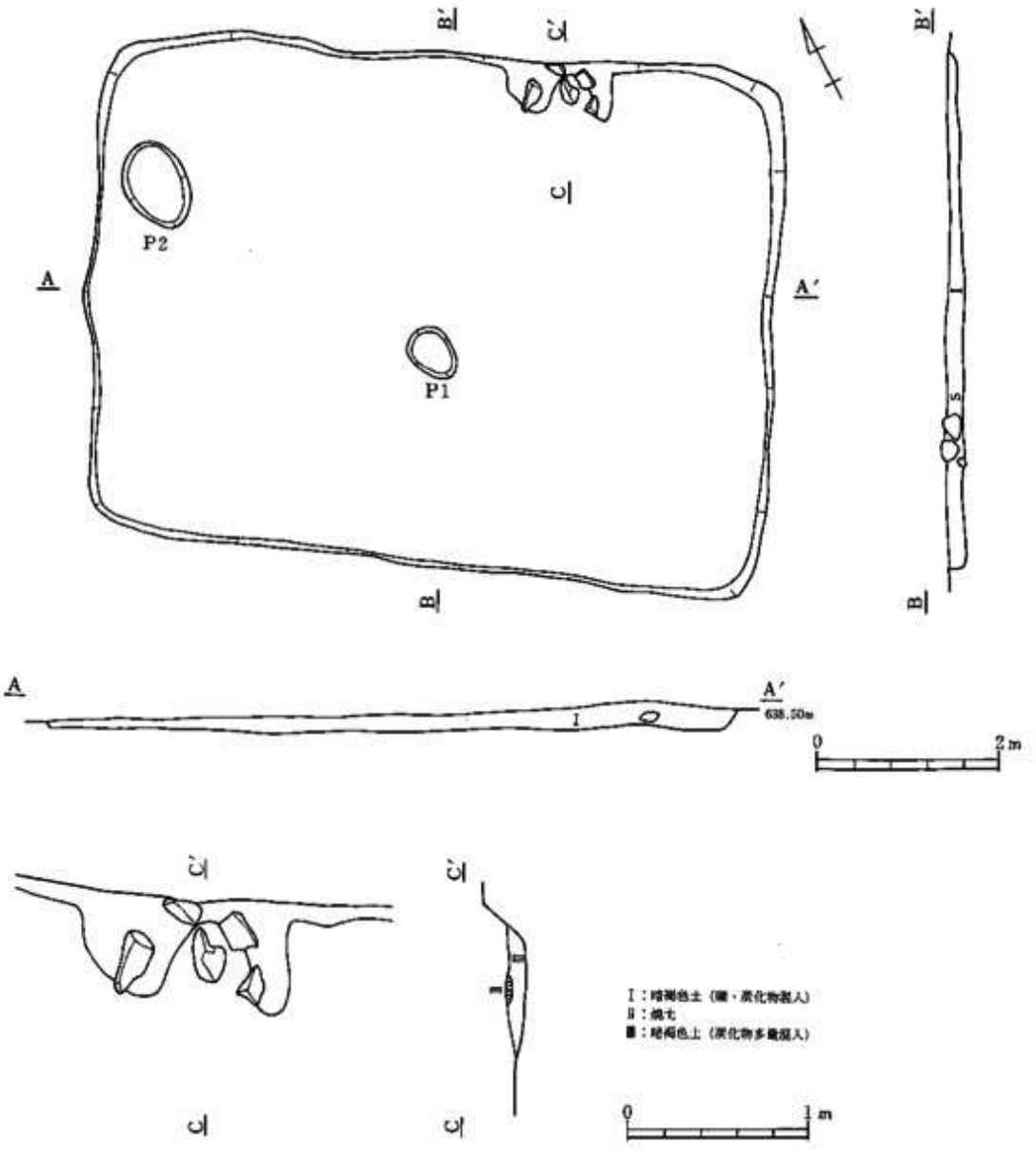
第10図　第４号住居址遺物出土状況

土器類は99点を図示したが、ほとんどは土師器の食器（黒色土器を含む）で、少量の須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器が混じっている。金属製品の出土も多く、鏃・釘・鍬・毛抜き型鉄器・銅製の鋲など７点が図化・提示できた。他に鉄滓４点、鞴の羽口１点も出土している。

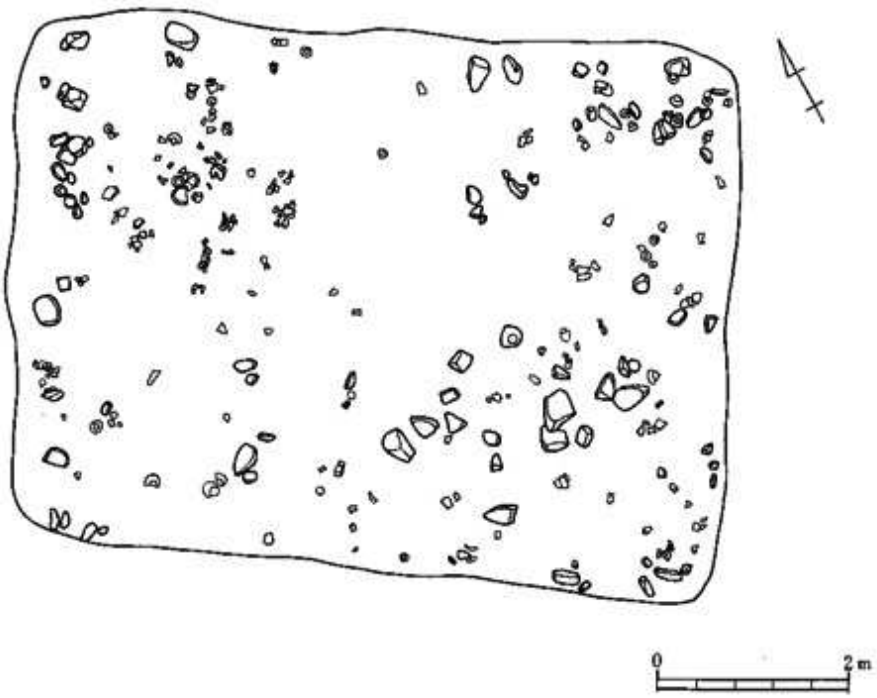
出土した土器・陶器類からみて本址は11世紀後半に営まれた遺構と推定できる。

(3)　第81号住居址（第13・14図）

B地区北端部に位置し、約半分が調査区域外にかかる。また北流する溝601（弥生時代後期）の上部を破壊している。平面規模は、現長で南北辺6.80 m、東西辺6.76 m、床面積31.6 m²を測るが、復元すると一辺７～7.5 m の方形か長方形で、床面積も45 m²以上になるであろう。炉は床面中央部のやや北にある地床炉で50 cm くらいの範囲に薄く焼土が残り、これを通る住居主軸線はN－28°－W


B′
C′
P2
A
A′
P1
C
B
B′
B
A
A′
638.50m
I
0
2m
C′
C′
C
C
I：暗褐色土（焼・炭化物混入）
II：焼土
III：暗褐色土（炭化物多量混入）
0
1m

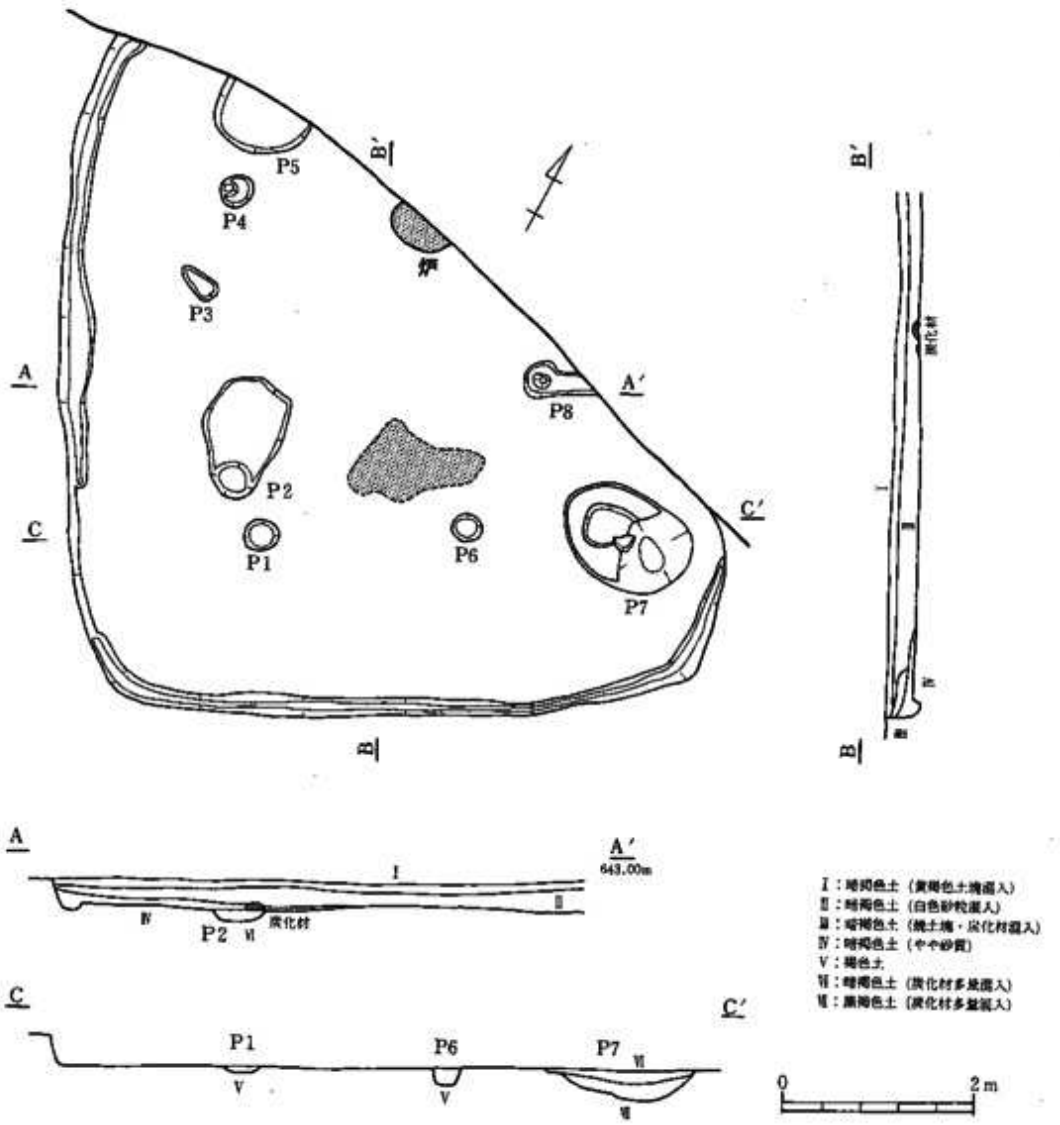
第11図　第９号住居址



第12図　第９号住居址遺物出土状態

を指す。壁は20～35 cm の高さを持ち、南西隅を除いて、深さ数cmの周溝が壁下に廻る。床面は礫の混じる黄色粘質土の地山を平坦にしたもので、硬さをもち識別しやすい。ただし西半分の床は、本址に切られる溝601の底部付近の覆土をそのまま固めたもので、そこに含まれる僅かな土器や礫が顔を出している。ピットは８基発見されているが、主柱穴はP_1・P_4およびP_7の西側の深い部分が相当し、区域外の一個と共に方形配列をなしていたと推定する。P_8には東に延びる間仕切り状の溝が付随している。

本址はいわゆる火災住居で、覆土中・下層から大量の炭化材・炭化物、土器が出土した。炭化材はほとんどが床面に密着し、住居中央部から北西部にかけての残りがよい。しかも梁・桁材らしき方形区画や、そこから放射状に延びる垂木材とみられる部分などが、かなりはっきり観察できた。材は、西側の桁が12～18 cm 径の丸太、北側の梁も直径10 cm 前後の丸太で、北西隅の壁では板材の存在も認められた。土器はおもに壁寄りから出土したが、特に西から南西隅と南東隅に集中がみられた。図化提示した土器はすべて焼失と共に廃棄されたもので、その点からみて良好な一括遺物であると言える。



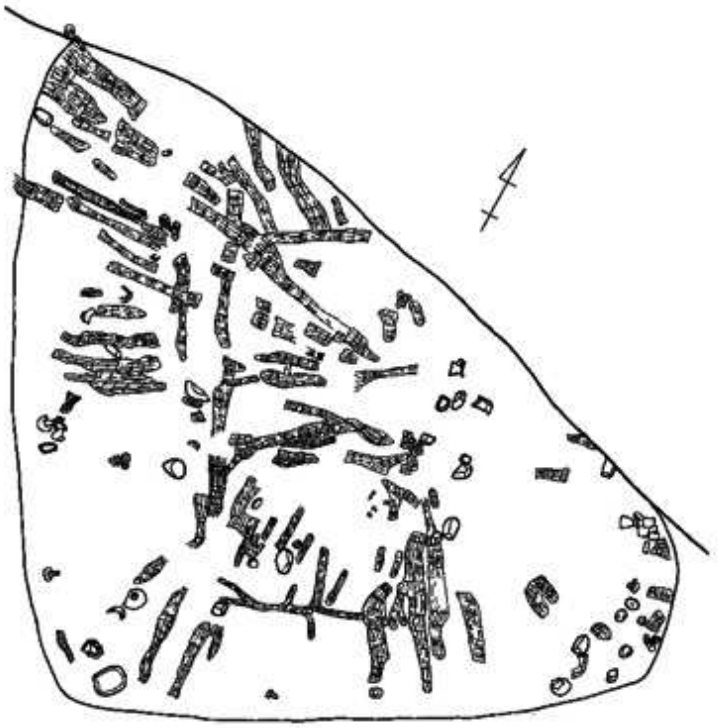
第13図　第81号住居址

出土土器からみて本址の時期は、5世紀の前半～中頃と考えたい。

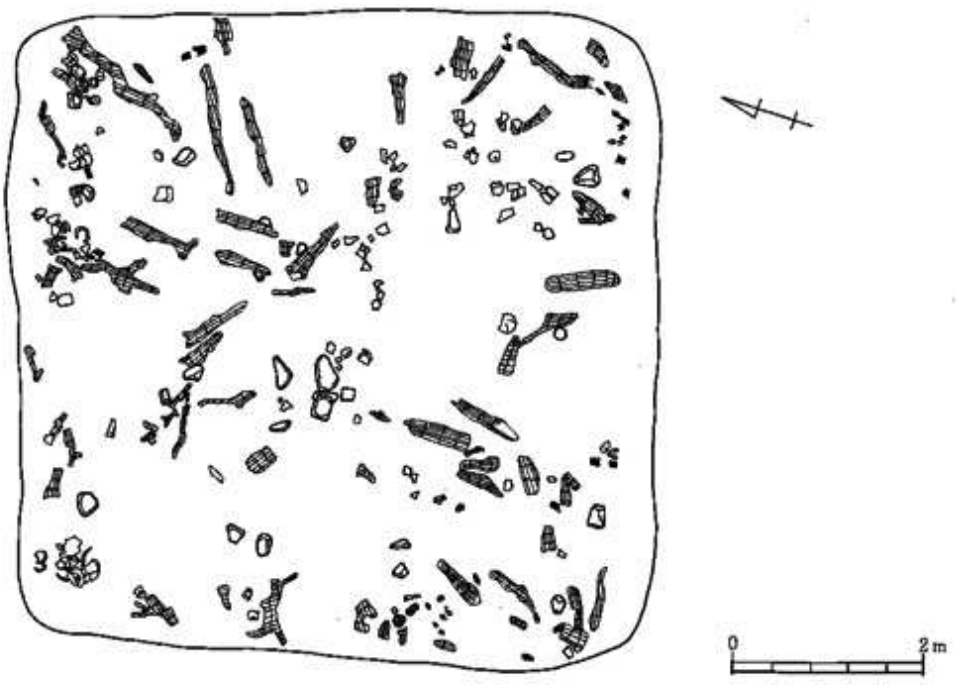
(4)　第101号住居址（第14・15図）

A地区中央やや西寄りに位置し、第100号住居址の北側大部分を破壊する。平面形は一辺6.6m前後の僅かに隅の丸い方形を呈し、床面積は41.0m²を測る。主軸はN－71°－Eを指し、この主軸線上

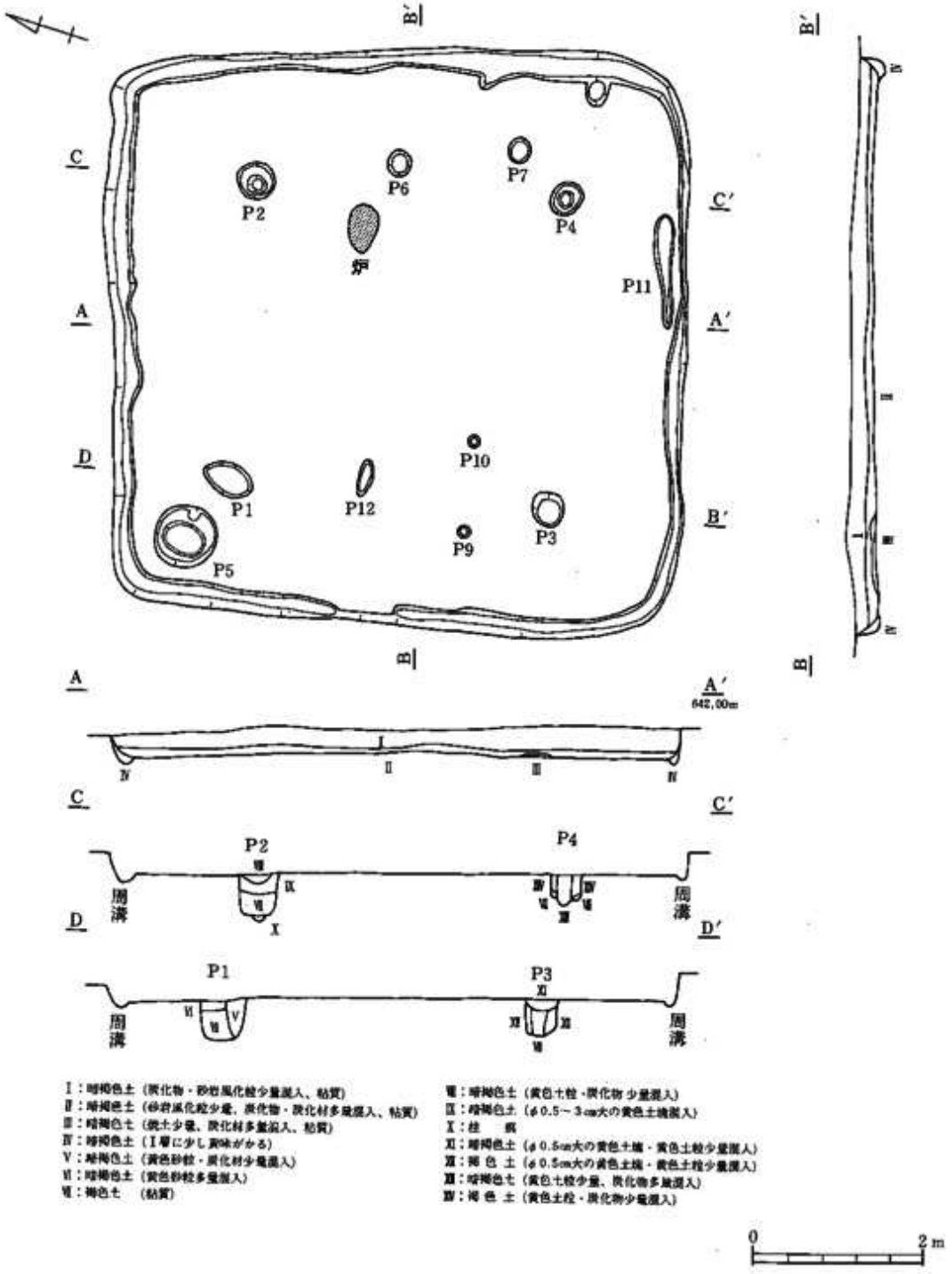
第81号住居址遺物出土



第101号住居址遺物出土



第14図　第81・101号住居址遺物出土状態

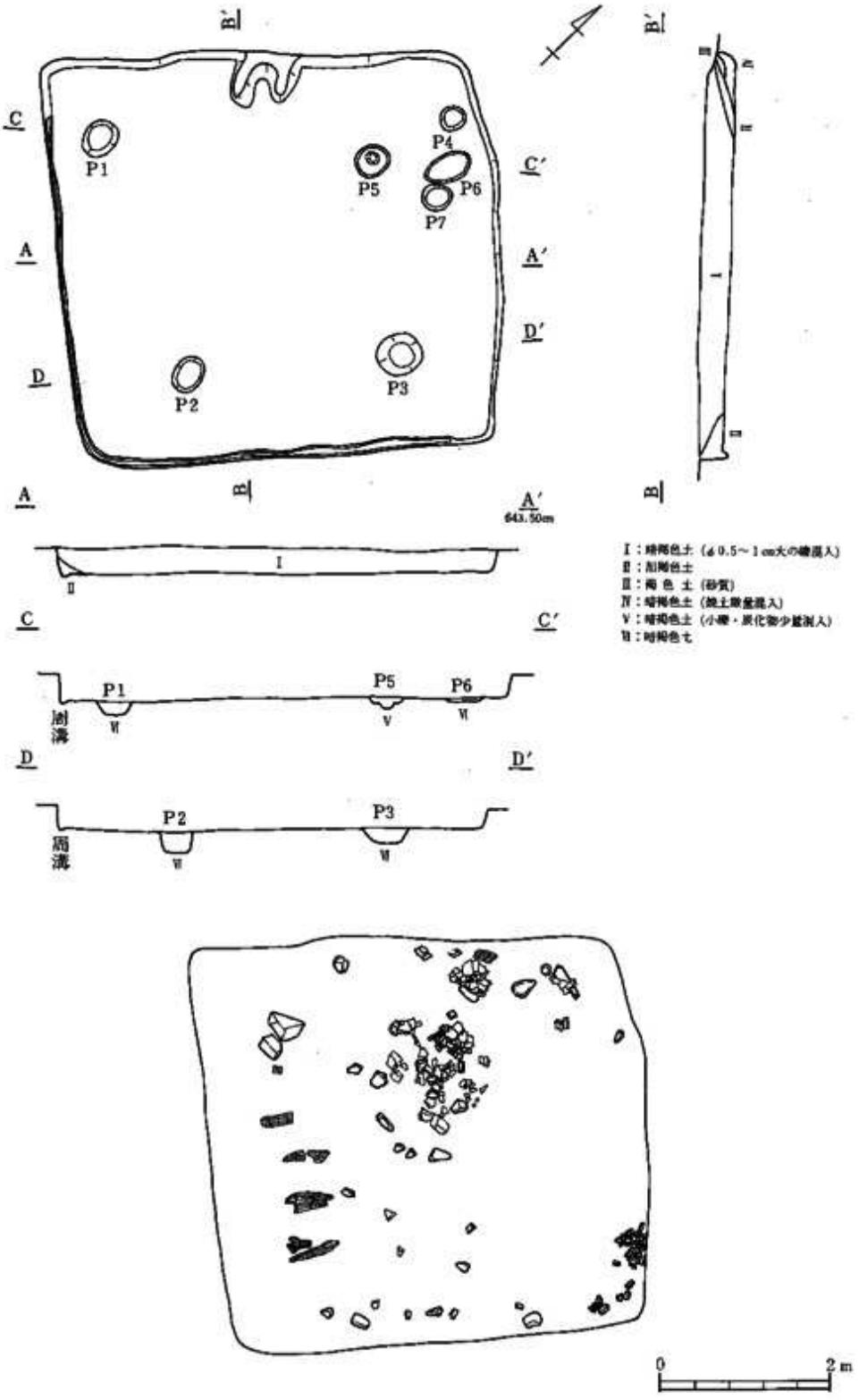


Ⅰ：暗褐色土（炭化物・砂岩風化粒少量混入、粘質）
Ⅱ：暗褐色土（砂岩風化粒少量、炭化物・炭化材多量混入、粘質）
Ⅲ：暗褐色土（焼土少量、炭化材多量混入、粘質）
Ⅳ：暗褐色土（Ⅰ層に少し黄味がかる）
Ⅴ：暗褐色土（黄色砂粒・炭化材少量混入）
Ⅵ：暗褐色土（黄色砂粒多量混入）
Ⅶ：褐色土　（粘質）

Ⅷ：暗褐色土（黄色土粒・炭化物少量混入）
Ⅸ：暗褐色土（φ0.5～3cm大の黄色土塊混入）
Ⅹ：柱　痕
Ⅺ：暗褐色土（φ0.5cm大の黄色土塊・黄色土粒少量混入）
Ⅻ：褐色土（φ0.5cm大の黄色土塊・黄色土粒少量混入）
ⅩⅢ：暗褐色土（黄色土粒少量、炭化物多量混入）
ⅩⅣ：褐色土（黄色土粒・炭化物少量混入）

0　2m

第15図　第101号住居址



第16図　第86号住居址・遺物出土状態

から僅かに北にずれた奥壁寄りに炉が位置している。炉は地床炉で、30×60 cm ほどの範囲に薄く焼土が残る。壁の掘り込みは垂直に近く、22～35 cm を測る。また西壁中央部で僅かに切れる他はすべての壁下に周溝が廻る。床面は一帯の地山である暗褐色土に、僅かに黄褐色土を貼って硬く構築しているが、貼り床を剝がすとすぐに硬さが失せてわかりにくくなる微妙なものであった。ピットは大小あわせて12基発見されたが、P_1～P_4が主柱穴、P_5は小形だが貯蔵穴になると考える。

本址はいわゆる火災住居で、覆土下層から床面上にかけて多量の炭化材・炭化物と土器が残されていた。炭化材は太さ5～20 cm、長さは最大1.2 m くらいまで見受けられたが、一方でかなり細かくなっているものもあり、配列状況に一定の傾向を読み取ることは難しかった。土器は住居内の各所に大形の破片となって散乱していたが、特に北壁沿いに集中が著しい。これらの土器はすべて火災に伴って廃棄されたもので、非常に良好な一括遺物である。

本址の所産時期は、出土土器からみて5世紀の前半～中頃と想定する。

(5) 第86号住居址（第16図）

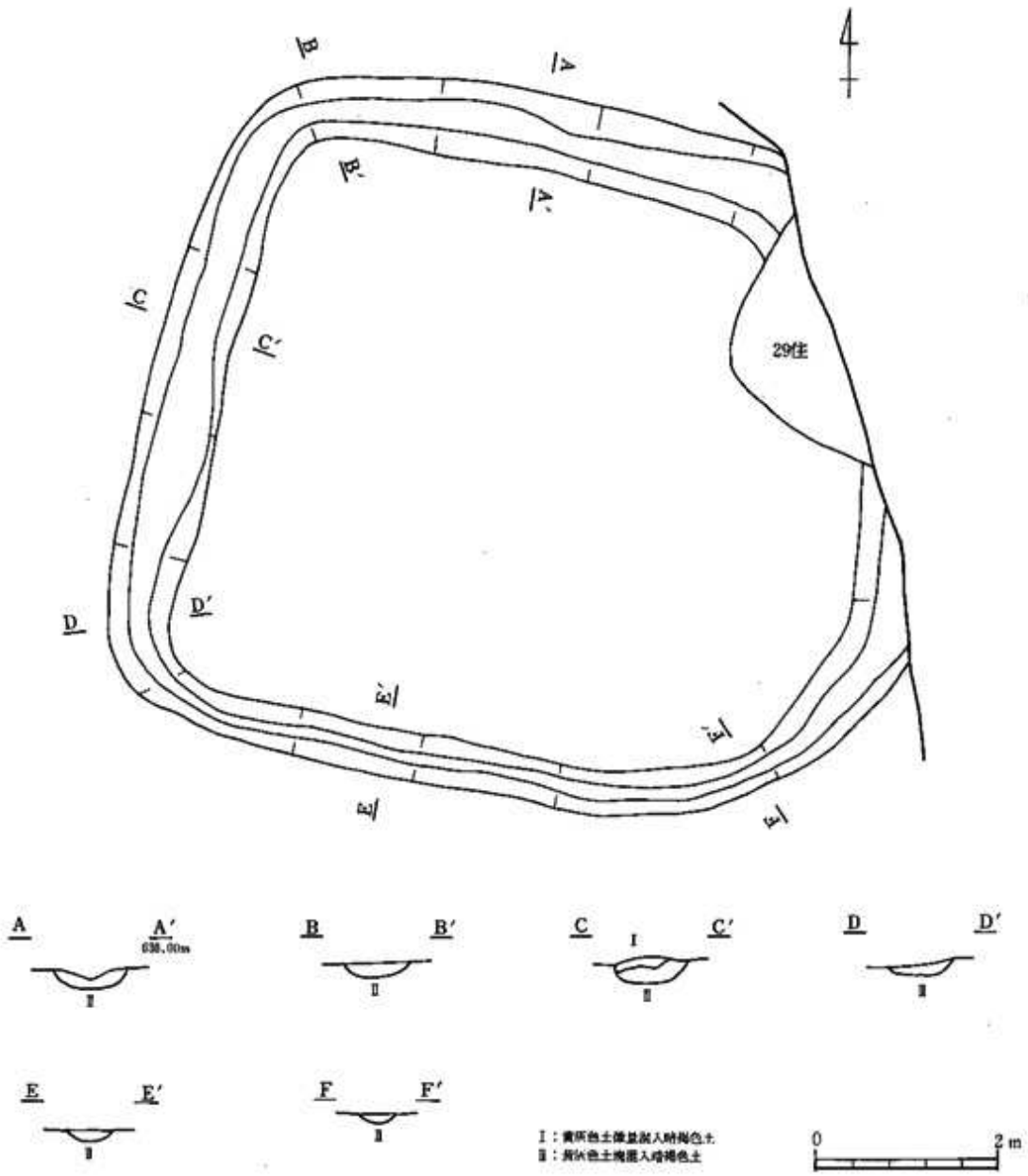
B地区北部に位置し、第91号住居址を切り、溝603に北西壁の上部を僅かに破壊される。北西壁の中央にカマドを持ち、これを通る主軸線はN－50°－Wを指す。平面形態は主軸方向4.64 m、直角方向5.04 m の僅かにつぶれた長方形を呈し、壁高は22～32 cm を測る。また南西壁から南東壁下には浅い周溝が掘られている。床面は黄色粘質土の地山で、硬く平坦だが、南西部は本址下に第91号住居址の覆土が残っており、それをそのまま床としている。ピットは7基発見され、主柱穴は方形配列をなすP_1・P_2・P_3およびP_5が相当すると考えるが、P_1の位置が若干はずれている。下部遺構との重複のため検出に問題があったのかもしれない。カマドは地山を掘り残した粘土カマドで、形がやや崩れている。

本址からの遺物出土量は余り多くないが、全形を知り得ることができるまとまった土器が出土している。特にカマド右脇と正面には甕と甑が集中して遺存していた。また東隅の壁直下には22個の礫石錘が床上にかたまっていた。さらに南西壁からやや離れた床上に、50 cm くらいの長さの炭化材が数点並ぶように残っていたが、どのような原因に由来するものかはわからない。本址覆土中には小破片の混入品土器がいくつか認められ、その点で出土品を一括遺物と認定するのは躊躇する。しかし第23図54を除く他の資料は、かなりまとまって一つの時期を示していると考える。

出土した土器からみて本址は6世紀に属する住居と推定する。

2 方形周溝墓（第17図）

D地区の北部に1基のみ発見された。第29号住居址とピット群に切られ、東部が一部区域外にかかる。幅50～85 cm、深さ10～20 cm の溝が全周する型で、東西8.8 m、南北7.6 m の規模を持つ。主体部は失われていて発見できなかった。周溝の掘り込み断面形は垂直というより船底形に近い。



第17図　方形周溝墓

遺物は南側周溝の下層より、古墳時代前期に属するとみられる中形の土器片が得られているのみである。これによって本址自体も古墳時代前期の所産遺構と推定される。

表1　住居址一覧表

（単位：cm・m²）

No.	地区	平面形	規模 南北・東西・深さ	規模 床面積	主軸方向	炉形態 種別	炉形態 位置	炉形態 備考	時期	重複関係 切る	重複関係 切られる
1	F	隅丸方形	340×288×39 (360)	8.5 (10.0)	N-73°-W	カマド	西壁南端		平安		2住 ピット
2	F	隅丸長方形	316×416× 8	10.6	N-73°-W	カマド	西壁北寄り		平安	1住	
3	F	方形	140×552×44 (568)	4.2 (25.2)	N-13°-E			破壊	平安		4住
4	F	隅丸長方形	548×656×40 (676)	32.1 (32.8)	N-14°-E	カマド	北壁東端		平安	3・5住	±105
5	F	不明	176×140×35	1.8	測定不能				平安		4住
6	F	隅丸長方形	438×494×43	18.3 (18.6)	S-77°-E	カマド	東壁南寄り	煙道24 cm	平安		ピット
7	F	方形	342×340×25	9.3 (11.3)	N-12°-E	カマド	北壁中央		平安	10住	±108
8	F	方形	464×116× 9 (460)	4.3 (19.0)	N-25°-E			破壊	平安		9住
9	F	隅丸長方形	556×624×10	38.2	N-33°-E	カマド	北壁東寄り		平安	±109・8住	
10	F	長方形	344×292×16	5.0 (8.8)	N-10°-E			破壊	平安		7住 ±108
11	E	方形	428×252×12 (428)	9.8 (16.5)	N- 8°-E			区域外	平安		±201
12	E	隅丸長方形	80×520×30 (420)	3.5 (17.0)	N-75°-W	カマド	西壁中央	煙道48 cm	平安	13住	14住
13	E	隅丸方形	100×372×11 (372)	3.3 (11.9)	N 10° E			破壊	平安		12・14住
14	E	隅丸方形	464×464×52	18.0	N-14°-E	カマド	北壁西寄り	煙道52 cm	平安	12・13住	
15	E	方形	292×292×20	7.0 (7.7)	N-74°-W	カマド	西壁南端	煙道36 cm	平安	16住	19住
16	E	隅丸長方形	484×368×20	14.0 (15.0)	S-72°-E	カマド	東壁中央		平安		15住
17	E	隅丸方形	492×472×65	18.8	S-78°-E	カマド	東壁中央		平安	19・26住	
18	E	隅丸方形	492×480×13	20.1	S-83°-E	カマド	東壁南端	煙道68 cm	平安	土214・20住	
19	E	方形	112×416×24 (488)(488)	3.7 (20.1)	N-20°-E			破壊	平安		17・26住
20	E	方形	456×276×19 (456)	10.1 (18.0)	N- 0°			区域外？	平安	土214	18住
21	E	方形	504×548×15	23.4	S-72°-E	カマド	東壁北端		平安	22・25住	
22	E	方形	180×412×20 (412)	4.8 (15.4)	N-30°-E			区域外？	平安		21・23住
23	E	隅丸方形	324×336×19	9.2	N 18°-E	カマド	北壁東端		平安	22住	
24	E	隅丸方形	588×260× 9 (588)	12.0 (29.0)	N-20°-E			区域外	平安		土203
25	E	方形	72×344× 9 (344)	1.9 (10.9)	N-20°-E			破壊	平安		21住
26	E	不明	110×240×	1.9	測定不能			区域外	平安	19住	17住
27	D	隅丸長方形	376×420×26	5.1 (14.1)	N-30°-E			破壊	平安		28住
28	D	隅丸方形	380×404×14	12.8	S-73°-E	カマド	東壁北端		平安	27住	
29	D	不明	120×150×20	1.7	測定不能			区域外	平安	方形周溝墓	
30	D	不明	388×400× 8	10.9	N-10°-E			区域外	平安	溝301	
31	C	楕円形	556×440× 6 (496)	27.8 (30.0)	N-37°-W	埋甕炉	中央		縄文中期	±492	
32	C	不整円形	376×304×44	7.0	N-53°-E			不明	縄文中期		
33	C	方形	452×448×10	18.8	N-38°-W			不明	平安	±513	
34	C	長方形	492×436×22	18.3	N-57°-E	カマド	東壁中央	煙道60 cm	平安	35住 ±515・517	
35	C	方形	104×420×20 (420)	3.5 (15.0)	N-33°-E			破壊	平安	±517	34住
36	C	不整円形	284×424×20 (424)	8.9 (11.8)		地床炉	住居中央		縄文中期		37住
37	C	長方形	492×468× 9	21.4	N-58°-W			不明	平安	36住	

No.	地区	平面形	規模 南北・東西・深さ	規模 床面積	主軸方向	炉形態 種別	炉形態 位置	炉形態 備考	時期	重複関係 切る	重複関係 切られる
38	C	隅丸方形	340×348×16	10.0	N-43°-E			不明	平安	土422	
40	C	長方形	316×404× 7	11.0	N 64° W			不明	平安	44住	
41	C	隅丸長方形	300×444× 5	12.9 (13.3)	N-37°-E			破壊?	平安		49住
42	C	方形	380×368×22	8.0 (10.2)	N-35°-E			破壊?	平安		43住・ピット 土522
43	C	方形	492×488×23	19.3	S-61°-E	カマド	東壁中央		平安	土423・424 土522・42住	
44	C	方形	416×440×10	6.4 (17.2)	N-34°-E			破壊?	平安		40住
45	C	方形	392×368× 8	11.0	N-35°-E			不明	平安		
48	C	方形	324×348× 9	9.4	S-71°-E	カマド	東壁中央		平安	土413	土412
49	C	方形	396×400× 4	13.8	N-37°-W			不明	平安	41住	
51	C	長方形	396×344×21	10.9	N-30°-E			不明	平安	土437・57住	
52	C	不整方形	320×344× 6	8.3 (9.0)	N 26° E			不明	平安	53住	土411
53	C	長方形	372×332×31 (452)	11.0 (13.8)	N-48°-W			不明	平安		52住
54	C	長方形	360×400× 6	12.3	S-51°-E	カマド	東壁中央南寄り		平安		
56	C	隅丸方形	424×436×30	14.0	S-75°-E	カマド	東壁中央南寄り		平安		土441
57	C	隅丸長方形	440×568×22	18.3 (23.0)	N-62°-W			不明	平安		51住 土401
58	C	隅丸方形	328×288× 4	6.0 (8.3)	N-38°-E			不明	平安		土446・515 519
59	C	長方形	312×392×12	10.0	S-50°-E	カマド	東壁中央南寄り		平安	土476	
60	C	長方形	432×376× 6	13.4	N-27°-E			不明	平安		
63	C	長方形	552×676×33	21.3 (25.7)	S-59°-E	カマド	東壁北端		平安	溝401	土551
65	C	隅丸方形	424×424×29	14.2	N-34°-E			不明	平安	溝401	
66	C	方形	440×436×20	14.4 (18.8)	S-72°-E	カマド	東壁南端		平安	79住	67住
67	C	隅丸長方形	296×312×15	7.0	N-53°-W			不明	平安	66・79住	
68	C	隅丸長方形	420×472×13	16.6	S-58°-E	カマド	東壁中央南寄り		平安	ピット	ピット
69	C	方形	416×392×42	12.3	N-45°-E			不明	平安		
70	C	隅丸方形	500×500×26	19.7	N 28° E	カマド	北壁東端		平安	73住	
71	C	長方形	308×236×15 (348)	6.2 (9.1)	N-48°-W			破壊?	平安		土483
72	C	方形	424×436× 8	16.7	N-28°-E			不明	平安		ピット
73	C	隅丸長方形	444×344×15	7.7 (12.9)	N 31° E			破壊?	平安		70住
75	C	不明	100×284×	3.0	測定不能			区域外?	平安		
76	C	隅丸長方形	372×408×20	12.0	N-37°-E	カマド	北壁中央東寄り		平安	77住	
77	C	長方形	372×476×23	10.6 (13.9)	N-27°-E	カマド	北壁中央		平安		76住
78	C	不明	316×340× 5	7.7	測定不能			破壊?	平安		
79	C	方形	580×560×25 (588)	11.4 (28.1)	S-50°-E	埋甕炉	住居中央東寄り		弥生後期	土452	66・67住
80	C	長方形	320×408×19	10.2 (10.8)	N-52°-W			不明	平安?		
81	B	方形	680×676×20 (744)(716)	31.6 (47.3)	N-28°-W	地床炉	住居中央北寄り		古墳中期	溝601	
82	B	隅丸方形	516×512×18	21.0	N-22°-W	地床炉	北壁直下		弥生後期		83住
83	B	方形	868×916×20	70.0	S-44°-W	地床炉	住居中央東寄り		古墳前期	82住	
84	B	隅丸長方形	424×360×14 (368)	12.4 (12.9)	N-36°-W	地床炉	住居中央北寄り		弥生後期		土606
85	B	方形	388×388×10	12.2	N-38°-E	地床炉	住居中央北寄り		古墳前期		溝603
86	B	方形	504×464×23	21.3 (21.8)	N-50°-W	カマド	西壁中央		古墳後期		溝603

No.	地区	平面形	規模 南北・東西・深さ	床面積	主軸方向	炉形態 種別	炉形態 位置	炉形態 備考	時期	重複関係 切る	重複関係 切られる
87	B	方形	488×496×20	20.9	S-72°-W	地床炉	住居中央西寄り		古墳前期		
88	B	方形	420×436× 6	16.3	N-83°-E	埋甕炉	住居中央東寄り		古墳前期		
89	B	方形	616×568×10	31.0	N-22°-W			不明	古墳前期		
90	B	方形	596×544× 7	27.2 (28.4)	N-52°-E	埋甕炉	住居中央東寄り		古墳前期		土611
91	B	方形	444×504×18	9.3 (20.8)	S-58°-W	地床炉	住居中央西寄り		古墳前期	溝601	86住 溝603
92	B	長方形	784×488× 4	(36.3)	N-7°-E	地床炉	住居中央北寄り		古墳前期		
93	B	長方形	424× ×13 (352)	(13.7)	N-56°-W			破壊?	古墳前期		
94	B	楕円形	988×636×29	42.5	N-78°-W			不明	縄文中期		
95	A	隅丸長方形	560×408× 9	20.9	N 12°-W			不明	弥生後期		
96	A	不明	212×160×36 ( )( )	3.1 ( )	測定不能				不明		
97	A	方形	488×668×10 (616)	29.2 (40.4)	S-67°-W	地床炉	住居中央西寄り		古墳前期		98住 土703・704
98	A	方形	352×536×25	26.2	N-0°			不明	古墳中期	97住	
99	A	長方形	328×412×17	11.5	N-26°-W			不明	不明	土703・705	
100	A	長方形	348×260×25 (388)(348)	4.0 (12.3)	N-38°-E			破壊	古墳前期		101住
101	A	方形	660×668×25	41.0	N-71°-E	地床炉	住居中央東寄り		古墳中期	100住	
102	A	隅丸長方形	424×544×37	7.6 (17.4)	N-74°-W			不明	弥生後期	土709	103住
103	A	方形	320×324× 6	9.2	N-37°-W	地床炉	住居中央北西寄り		古墳前期	102住 土709	
104	A	不明	220×292×20 ( )( )	4.6 ( )	測定不能			区域外	古墳前期		溝701
105	A	長方形	368×408×18 (448)	8.2 (13.6)	S-67°-W			破壊?	弥生後期		106・109住 溝701
106	A	長方形	296×412×13 (324)	4.5 (12.1)	S-58°-W			破壊?	古墳前期	105住	107住 溝701
107	A	方形	636×424×30 (544)	19.6 (22.8)	N-40°-W	カマド	北壁中央		古墳後期	106住	溝701
108	A	長方形	384×516×19	4.4 (18.1)	N-53°-E			破壊?	古墳前期		109住 溝701
109	A	隅丸方形	540×532×27	14.5 (26.0)	N-30°-E	カマド	北壁中央		古墳後期	105・108住	溝701
110	A	長方形	376×412×18	12.2 (13.7)	S-24°-E	地床炉	住居中央南寄り		古墳前期	119住	
111	A	楕円形	304×348×10	8.1	N-90°-W	地床炉	住居中央		弥生後期		
112	A	不整方形	240×444×20 (452)	7.3 (17.4)	N-25°-W			区域外	古墳中期		
113	A	隅丸長方形	532×468×20	10.6 (20.1)	N-18°-E			破壊?	古墳後期		溝701
114	A	長方形	404×488×25	16.4	N-48°-W	地床炉 埋甕炉	住居中央北寄り		弥生後期	土708	
115	A	隅丸長方形	372×544×25	17.1	N-90°-W			不明	弥生後期		
116	A	隅丸長方形	512×312×20 (408)	12.7 (17.4)	N-9°-W			区域外?	古墳前期		
117	A	長方形	772×500×12	23.6 (36.0)	N-49°-W			不明	弥生後期		溝701
118	A	不整楕円形	504×392×14 (432)	13.7 (15.6)	N 0°	地床炉	住居中央		縄文中期		溝702
119	A	円形	572×628×29 (700)	17.2 (33.7)	N-0°			不明	縄文中期		110住

第3節　主な遺物

1　土器・陶器

(1)　古墳時代の土器

古墳時代の遺構は前期から後期のものまであるが、良好な土器群を出土したものは少ない。ここでは第81号・第86号・第101号の3軒の住居址から出土した古墳時代中期（81・101号）、同後期（86号）の土器を取り上げる。この3軒の出土品は、前節で触れたように、一括遺物に準ずる出土状態を示し、数量的にもかなりまとまっている。

A．古墳時代中期の土器（第20～23図1～49）

①土器群

第81号住居址出土土器群は22点を図示できた（第20図1～22）。すべて土師器（第20図22の甑は弥生土器で、本址下の溝601からの混入品）で、器種組成は、坩・小型丸底坩・高杯・甕・壺からなる。ただし、この中で個体の全形がわかるのは小型丸底土器と高杯に限られる。高杯には、高杯Aと高杯Bの2器形がある。いずれの土器も遺存状態が悪く、表面が摩滅して器面調整がよくわからない。

第101号住居址出土土器群で図示できたのは27点にのぼる（第21～23図23～49）。すべて土師器で、器種組成は、鉢・小型丸底坩・小型丸底鉢・高杯・小形甕・甕・壺からなる。高杯には高杯Aと高杯Bの2器形がある。甕は一括品が6点出土していて非常に良好な資料となっている。壺は大形品が1点あるが、残念なことに口縁部形態がわからない。いずれの土器も器面の遺存状態が悪く、調整痕などが観察できないものがある。

以上の2つの土器群は、器種組成からみると、ほとんど時期差が感じられない。即ち、器種組成において、小型丸底坩と高杯A・Bの存在、杯と器台・台付甕の欠落が共通している。従って以下では両土器群を通してみていく。

②器種各説

小型丸底坩（1～5・24～30）

口縁部が長く伸びて口縁端部に最大径があるもの（1・3）、それに比べてやや口縁部が短く胴部に最大径がくるもの（2・24・28）の2形態がある。規格はほぼ似通っており、口径8.3～9.6 cm、胴部径7.3～9.2 cm の範囲に収まる。29は小型丸底の鉢で、他とは系統が異なるのであろう。製作技法の上からは、いずれも内面に指頭圧痕を残し、外面はミガキで仕上げられるが、器面の摩滅により観察が難しい。成形が雑なものが多く、一部には胴部のミガキが省略されているものもあるようだ。2の口縁部から胴上部の外面には、細線によって上下を画した中に斜の格子が描かれる。32は小型丸底坩を模したミニチュアである。

高杯（7～19・34～41）

筒状の脚部の下方に外反部を組み合わせた分離成形のものを高杯A（7～15・34～36）、脚部が杯部との境界から徐々に外開していく一体成形ものを高杯B（16～19・37～41）とする[1]。器面調整は、いずれも脚部外面、杯部内外面に放射状のミガキが施されているが、摩滅が進んで明瞭に確認できないものが多い。ミガキの地にハケメが観察できるものがある（10・13・41）。11は杯部内面が黒変しており黒色処理が施されているようにも見えるが、時期的に問題がある。

高杯Aと高杯Bの系統は、形態から判断して、高杯Aが畿内系、高杯Bが東海系と考えられる。東海系の高杯は、弥生後期末から古墳時代前期の古い段階に当地域にもたらされ、在地の組成に溶け込んでいくのに対し、高杯Aは布留式の影響を受け前期の新しい段階で出現してくる。本土器群の中で、高杯Aが比較的斉一な形態を揃えるのに対し、高杯Bがかなり雑多な形態を呈すのも、これらが在地における型式変化の最後に位置し、以後の消滅を物語っているからであろう。

甕（20・21・42～48）

中形（21・43・44）と大形（20・45～48）が出土していて、全形がわかるものが5点ある。いずれも球形からやや卵形の胴部と「く」の字にくびれて開く口縁部を持ち、ほとんどの個体に底部外面のケズリが施されている。このケズリがない21・43の底部も丸底で、甕は丸底基調に仕上げられる製作意図がすべてから窺える。成形は雑でかなり形に歪みがあり、粘土紐の接合痕も各所に残っている。器面調整はハケメと板状工具によるナデで行われているが、これも雑で、器壁の凹凸が目立つ。43の小形の甕は、底部外面にケズリがなく、同内面に多数の圧痕を持つことから、底部付近は型押しによって成形された可能性も認められる。

甕の底部をケズリによって丸底に見せる傾向は、既に松本市石行遺跡の古墳時代前期の土器の中に認められ、「布留形甕」に似せようとしたものとの評価を得ている[2]。本土器群の甕の丸底もこの傾向の延長線上にあるものと考える。当地域では古墳時代前期の新しい段階から「布留形甕」そのものに非常に似たものや、各部位の特徴を丁寧に模倣した甕が散見されるようになり[3]、高杯同様、布留式の影響下に入っていくのだが、本土器群の時期になると口縁部内湾、器壁の薄さ等の要素は全く感じられなくなる。古墳時代前期に定着し、在地の中で型式変化（技術的省略）を遂げた結果と理解しておきたい。

③類例と編年的位置

本土器群（第81・101号住居址出土土器群を総称する）の器種組成の特徴は、前述のように次の内容で象徴される。

ⓐ小型丸底坩の存在　　ⓒ杯の欠落

ⓑ高杯A・Bの存在　　ⓓ小形器台・台付甕の欠落

これらの事項は、ⓒが杯の発生以前であることを示し、一方でⓓは古墳時代前期的な色彩を失っていることを意味する。松本平での類例は少なく、比較に足るまとまった資料が出土しているのは、松本市白神場12号住居址[4]・同向畑15号住居址[5]・塩尻市竜神平C地区2号住居址[6]の出土土器群を

挙げ得る程度である。これらも厳密に見ると、高杯Bを確実に伴っているのは竜神平C2号住居址のみであり、他の土器群からの高杯Bの欠落が偶然の結果でないとしたら、ごく微妙な時期差を考える必要がある。筆者はかつて松本平の古墳時代中期から後期前半の土器群の、標式資料の変化を3段階に仮定したことがあるが[7]、先の3類例はいずれも第1段階にあたり、長野県史の編年(笹沢1988)の古墳時代Ⅲ期中段階に対応するとした[8]。本土器群も巨視的にはそこに含まれるが、先述の微妙な時期差は、古い要素と考えたい。

B．古墳時代後期の土器（第23・24図50～62）

第86号住居址出土土器13点を取り上げる。器種に杯・高杯・甕・小形甕・壺・甑がある。54の鉢は混入品で、古墳時代前期に属する。

杯は4点出土しているが、いずれも形態が異なり、この時期の杯の多様性をよく表わしている。53を除き、内外面ともにヘラミガキが密に施されて、50と52の内面は黒色処理が行われている。53は杯形を呈するがヘラミガキがない点から鉢として扱った方が良いかもしれない。

高杯は1点のみで、しかも杯部を失っている。古墳時代中期から残る高杯Aの器形を呈し、時期的に問題が生じる懸念もある。摩滅が進んで観察が困難だが、縦長の透かしが3単位で開けられているようだ。

小形甕は56～58の3点で、56・57は丸底状に底部が作られている。口縁部の「く」の字外反はかなり弱くなっている。器面調整は板状またはヘラ状の工具により行われているが概して雑で、起伏や粘土紐接合痕が残る。

甕は59・60の2点があって、いずれも全形がわからないが、合成して想定すると器高36cmほどの長胴甕になる。胴部は卵形をさらに引き伸した楕円体で、底部の周囲はケズリを行っているが丸底とはなっていない。器面調整は板状工具による縦の調整とナデで、粘土紐接合痕が各所に残る。この甕の器形の系譜は、前段で扱った中期の甕が型式変化を遂げたものか、その間に新たな器形の導入があってそれを模しているのか結論は出しにくいが、今のところ前者の可能性を採りたい。

61の壺は丸底で口縁部が直立し、壺というより大形の坩と見た方が適切かもしれない。形にやや歪みがあり、口縁部がまっすぐ上を向かない。器面がすっかり摩滅して調整は全く不明だが、類例からすると全面にミガキが施されていた可能性もある。

62は大形の甑で、全形がわかる珍しいものである。深い鉢形の体部の底がすっぽり抜けて孔をなし、体部中位には一対の太い把手がはめ込まれている。器面調整は、内面がナデ後ヘラミガキ、外面は縦方向のケズリの後ヘラミガキが施されているが、底部の孔周辺には内外に横のケズリがはいっている。器面はかなり平滑化されているが、各所に粘土紐接合痕が残る。

本土器群を全体的に見ると、この時期の資料は松本市内では皆無で、類例は大町市借馬[9]、塩尻市平出[10]まで離れて僅かに求められる程度である。時期は、長野県史の編年（笹沢1988）の古墳時代

IV期中段階、6世紀の前～中葉に位置付けられると考える。

註1　笹沢浩氏の定義した高杯A・Bに等しい。(笹沢1968「信濃における鬼高式土器の開始」『信濃』III20－3)
2　宇賀神誠司1987「古墳時代前期の土器について」『松本市赤木山遺跡群II』
3　石行遺跡1・2・4号住居址、向畑遺跡31号住居址、平出遺跡H94号住居址などの例を挙げることができる。文献は石行遺跡は前掲註2、向畑遺跡は松本市教育委員会1988『松本市向畑遺跡I』、平出遺跡は塩尻市教育委員会1987『史跡平出遺跡』。
4　松本市教育委員会1985『松本市赤木山遺跡群I』
5　松本山教育委員会1989『松本市向畑遺跡II』
6　長野県教育委員会1988『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』
7　森井貞雄1990「古墳時代の土器」『松本市県町遺跡』
8　笹沢浩1988「古代の土器」『長野県史考古資料編』1－4
9　大町山教育委員会1980『仁科遺跡II』
10　前掲註3

(2)　平安時代の土器・陶器

ここでは多量の遺物が出土した第4・9号住居址（以下、○住と省略）出土土器群を提示する。なお、土器の器種・年代観は文献1に従った。

①土器・陶器の種類

4・9住土器群にみられる土器の種類は、土師器・黒色土器A・黒色土器B・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器である。それらの食膳具の構成比率をみると表2のようになる。土師器・灰釉陶器が大半を占め、黒色土器A・黒色土器B・緑釉陶器が少量混じる。須恵器は、食膳具では認められず、貯蔵具で僅かにみられる。

表2　第4・9号住居址土器構成表

住居址 / 種別	4　住		9　住	
	個体数	個体数比(%)	個体数	個体数比(%)
土師器	49	38.9	77	77.8
黒色土器A	18	14.3	2	2.0
黒色土器B	5	4.0	0	0.0
灰釉陶器	43	34.1	13	13.1
緑釉陶器	9	7.1	5	5.1
須恵器	2	1.6	2	2.0
合計	126	100.0	99	100.0

②器種

4・9住土器群では、次の器種がみられる。

食膳具：杯・椀・皿・鉢　　煮炊具：甕・羽釜　　貯蔵具：瓶類・甕

各住居址の器種構成比をみると、食膳具が圧倒的に多く9割以上を占める。以下、土師器食膳具の各器種について述べる。

杯A　土師器のみにみられる器形である。ロクロ調整で底部回転糸切り未調整、内面はロクロナデの後、黒色処理等の調整を施さない無高台の杯である。口径が小さく、杯というよりは皿に近くなる。法量からAI（大）・AII（小）の2種に分けられる。9住では口径が9 cmを切るものもみられる。

表3　杯A法量分布表

住居址	器種	個体数	個体数比(%)	口径 (cm)	器高(cm)	図　No
4　住	AI	3	7.5	13.4～13.6	3.4～4.1	2～36・42
	AII	37	92.5	9.4～11.0	2.4～3.0	37～39
9　住	AI	21	37.5	13.8～14.8	3.5～5.0	172～189・194～209
	AII	35	62.5	9.0～11.2	2.1～3.4	137～170・177

椀　土師器・黒色土器A・黒色土器B・灰釉陶器・緑釉陶器など多種の焼物によってつくられる。形態は、やや内湾気味に腰が張って立ち上がるものが多い。

土師器椀……4住、9住ともに大小2法量みられる。

表4　土師器椀法量分布表

住居址	器種	個体数	個体数比(%)	口径 (cm)	器高(cm)	図　No
4　住	椀(大)	1	50.0	14.0	5.9	56
	椀(小)	1	50.0	9.5	2.9	42
9　住	椀(大)	2	50.0	14.0～16.3	3.8～6.0	192～193
	椀(小)	2	50.0	9.8～12.3	3.0～4.0	190～191

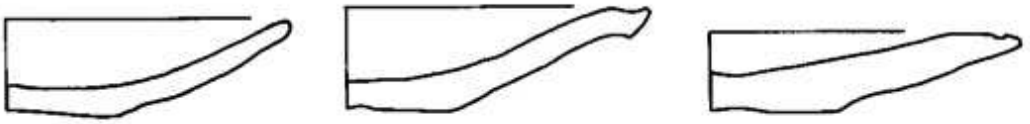
黒色土器A椀……4、9住ともに小椀が欠落し大椀のみがみられる。4住は口径13.0～15.2 cm・器高5.4～5.9 cm、9住は口径14.4～14.6 cm・器高6.2 cm を測る。

表5　黒色土器A椀法量分布表

住居址	器種	個体数	個体数比(%)	口径 (cm)	器高(cm)	図　No
4　住	椀(大)	18	100.0	13.0～15.2	5.4～5.9	50～55・57・59～67
9　住	椀(大)	2	100.0	14.4～14.6	6.2	195・196

黒色土器B椀……出土量が4・9住ともに少ない。4住では実測個体数は5点であるが、すべて小椀である。口径10.3 cm・器高4.1 cm を測る。9住は実測可能なものはない。

皿A　4住では小形の皿AII（口径10.0～12.7 cm・器高1.2～2.0 cm）のみ認められる。9住では小形品AII（口径9.8～12.3 cm・器高1.1～2.3 cm）と大形品AI（口径15.7～18.3 cm・器高3.4～3.6 cm）の2法量認められる。この皿は、杯を偏平にしたような形態のもの（198、200、202、203、208ほか）と、口縁に強いロクロナデを施して面取りするように折り返しているもの（201、206、207、209、210、211ほか）の2種類見られる。それらの中には、口縁内面に一条の沈線が入るものがある（43～46、204）（18図）。折り返して面を取っている形態の出現については平安京の「土師器皿C」との関連も指摘されている（文献2：原　1988）。各住居址をみると、4住は、口縁内面に沈線を施すものしかみられない。9住では口縁部を折り曲げて面を取るものと、ヨコナデ調整のみ施



第18図　皿Aの口縁形態

されるものが両方ある。特異な例では、口縁部に面を取り、さらに内面に沈線を入れるもの（205）がある。

表6　皿A法量分布表

住居址	器種	個体数	個体数比(%)	口径（cm）	器高(cm)	図　No
4　住	AII	4	100.0	10.0～12.7	1.2～2.0	43～46
9　住	AI	2	15.4	15.7～18.3	3.4～3.6	208～210
	AII	11	84.6	9.8～12.3	1.1～2.3	197～207

鉢A　口径20 cmを越える大形のものである。器形は杯Aの相似形をしている。4住で2点(47、48）出土している。

③施釉陶器の検討

灰釉陶器　今回の調査では灰釉陶器が数多く出土している。このうち56点を図化提示している。灰釉陶器にみられる器種は、椀、皿、耳皿、長頸瓶、広口瓶に限られている。椀は、4住出土品のなかに外面下半から底部にかけてヘラケズリ調整を施すものとともに、糸切り無調整・ナデ調整のものがみられる。9住では外面下半のヘラケズリ調整が省略され、底部に糸切り痕を残すものが多くなる。皿類は、皿（112、116、118、231）、段皿（115、117、229、230）、稜皿（111）がみられる。出土量は、段皿が一番多い。各住居址の生産地との対応を試みれば、4住が丸石2号窯式主体に虎渓山1号窯式もみられる段階、9住が丸石2号窯式・大原10号窯式が主体となる。

緑釉陶器　図化・提示できたのは4住で合計8点（椀4点、段皿3点、耳皿1点）、9住は合計5点（椀4点、段皿1点）である。以下、住居址ごとに記述する。

4住……計16点出土している。小破片が多く、8点のみ図化している。すべてロクロナデ成形で、ヘラミガキされていない。胎土は灰白色または白色でやや硬質である。調整は器面が粗く、ロクロ痕や調整痕の凹凸が顕著にみられる。釉は濃淡の強いやや濁りのある緑色を呈する。底裏、内面見込み部にはトチン痕がみられる。椀は4点出土しているが、法量でみると大小2形態みられる。大形品（121、122、123）は、口径14.4～15.0 cm・器高6.2～7.6 cm、小形品は口径11 cm程度のもの

(120) がみられる。皿は4点（輪花皿3、耳皿1）出土している。調整は椀と同様に粗く、底部に糸切り痕を残すもの（125、127）もみられる。

9住……18点出土している。ほとんどが小破片で図化できたのは5点のみである。4住出土品と同じくロクロナデ成形で、調整は粗い。胎土、調整も4住出土品とほぼ共通している。226は、胎土が他と違い硬質で暗灰色を呈している。調整は、器面全体をヘラミガキによって仕上げている。底裏・内面見込み部にはトチン痕がある。釉は、濃緑色で全体に施釉されている。

④各土器群の様相

4住土器群

土器全体の中で食膳具が占める割合が高く、煮炊具・貯蔵具の占める割合が低い。食膳具においては、土師器が4割弱を占め、残りを灰釉陶器と黒色土器A・黒色土器Bが分ける比率である。構成は、土師器：杯・椀・皿・鉢、黒色土器Aと黒色土器B：椀、灰釉陶器と緑釉陶器：椀・皿と単純ではあるが、ほとんどの器種に大小2法量みとめられる(第19図)。例外としては、黒色土器Aの椀は大形品のみで黒色土器B椀は小形品しかみられない。煮炊具は土師器小形甕、貯蔵具では灰釉陶器の広口瓶と須恵器の四耳壺がみられる。本址の時期は、丸石2号窯・虎渓山1号窯段階とみられ、文献1の長野県埋文センター編年の13期（11世紀中頃）と考えられる。

9住土器群

土器の構成は4住とほぼ同一である。食膳具のなかに、あらたに口縁端部を折り返す土師器皿があらわれ大小2法量を有する。煮炊具では、土師器羽釜・小形甕、貯蔵具では、灰釉陶器広口瓶・須恵器四耳壺がみられる。灰釉陶器からの時期の対応から、丸石2号窯・大原10号窯段階とみられ、県埋文センター編年の14期（11世紀後半～末）とみられる。

引用文献

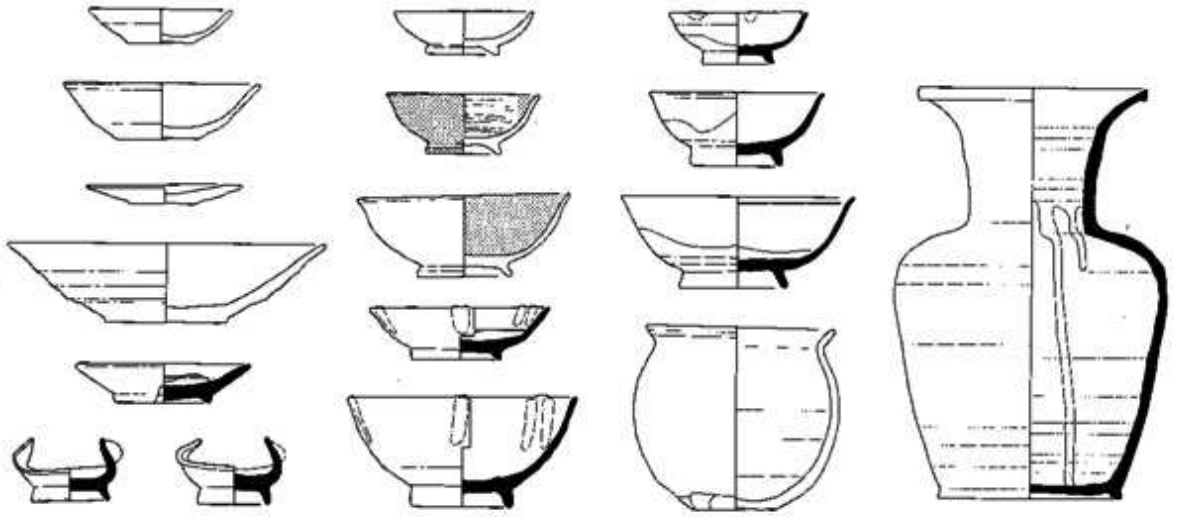
註1　小平和丈　1990「第3章　第5節　古代の土器」『中央自動車道長野線所蔵文化財発掘報告書4』㈶長野県埋蔵文化財センター

2　原　明芳　1988「第19節　吉田向井遺跡　5成果と課題　(1)古代末期の挽物」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘報告書2』㈶長野県埋蔵文化財センター

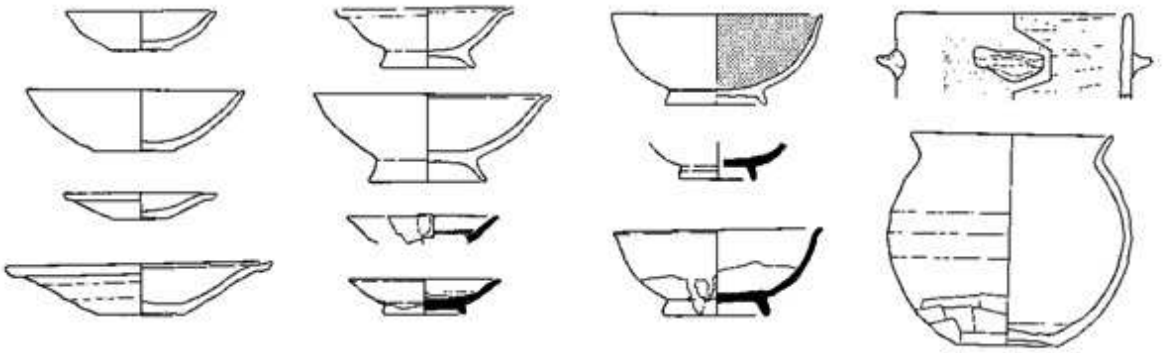
参考文献

恵那市教育委員会　1983「VII. 考察」『正家1号窯発掘調査報告書』

㈶長岡京市埋蔵文化財センター　1985「長岡京跡右京第130次調査概要」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書　第2集』



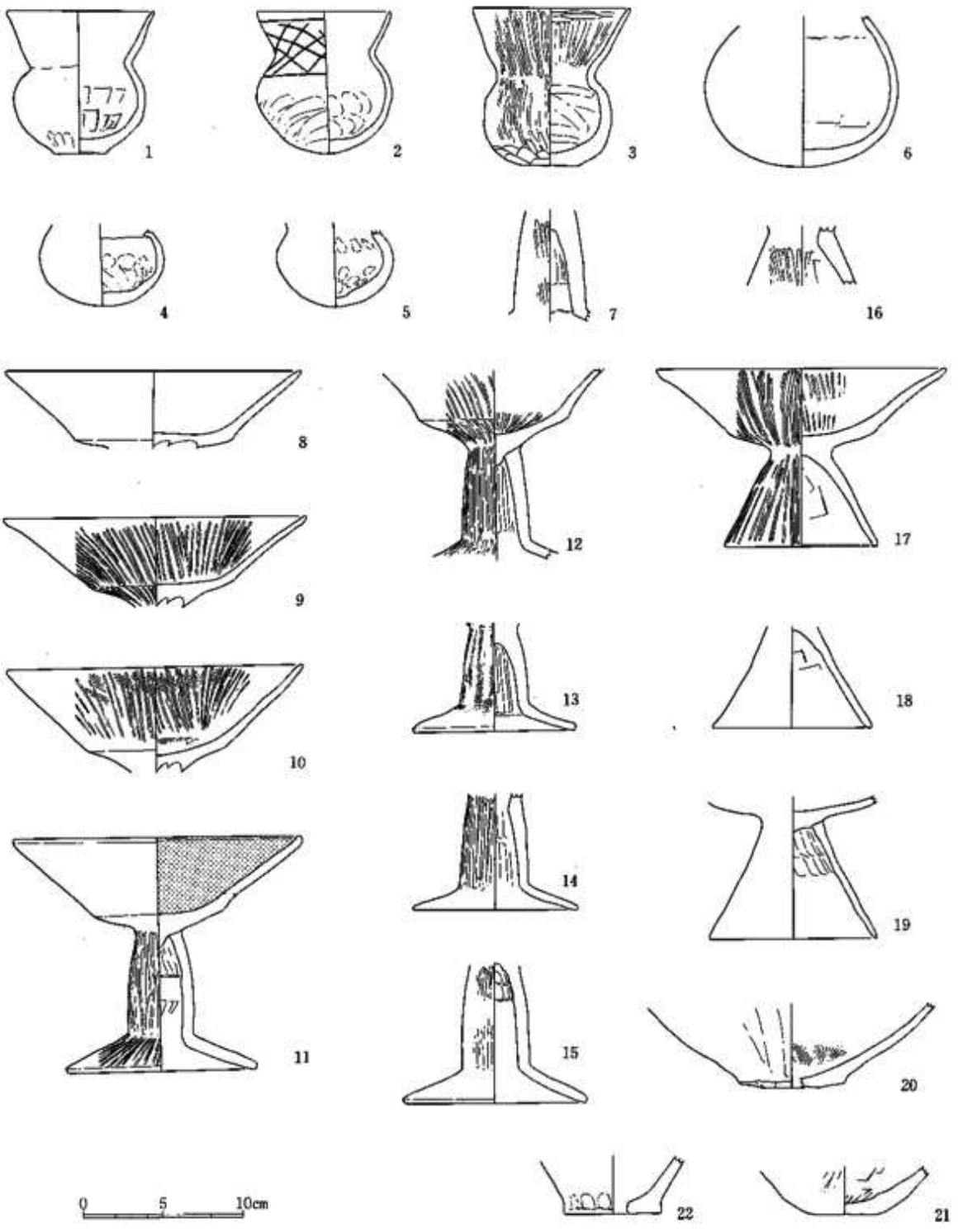
第４号住居址



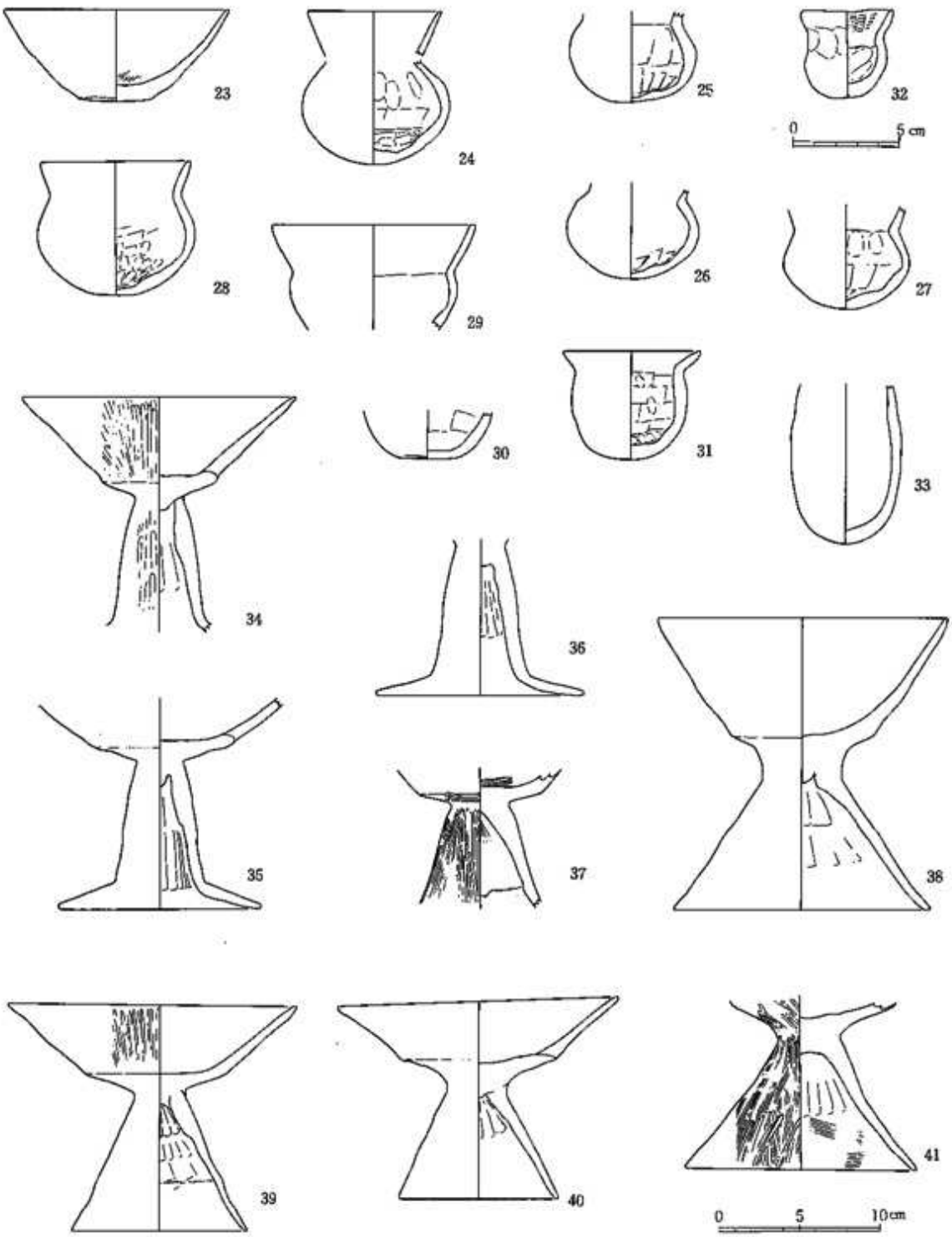
第９号住居址

第19図　第４・９号住居址の土器組成

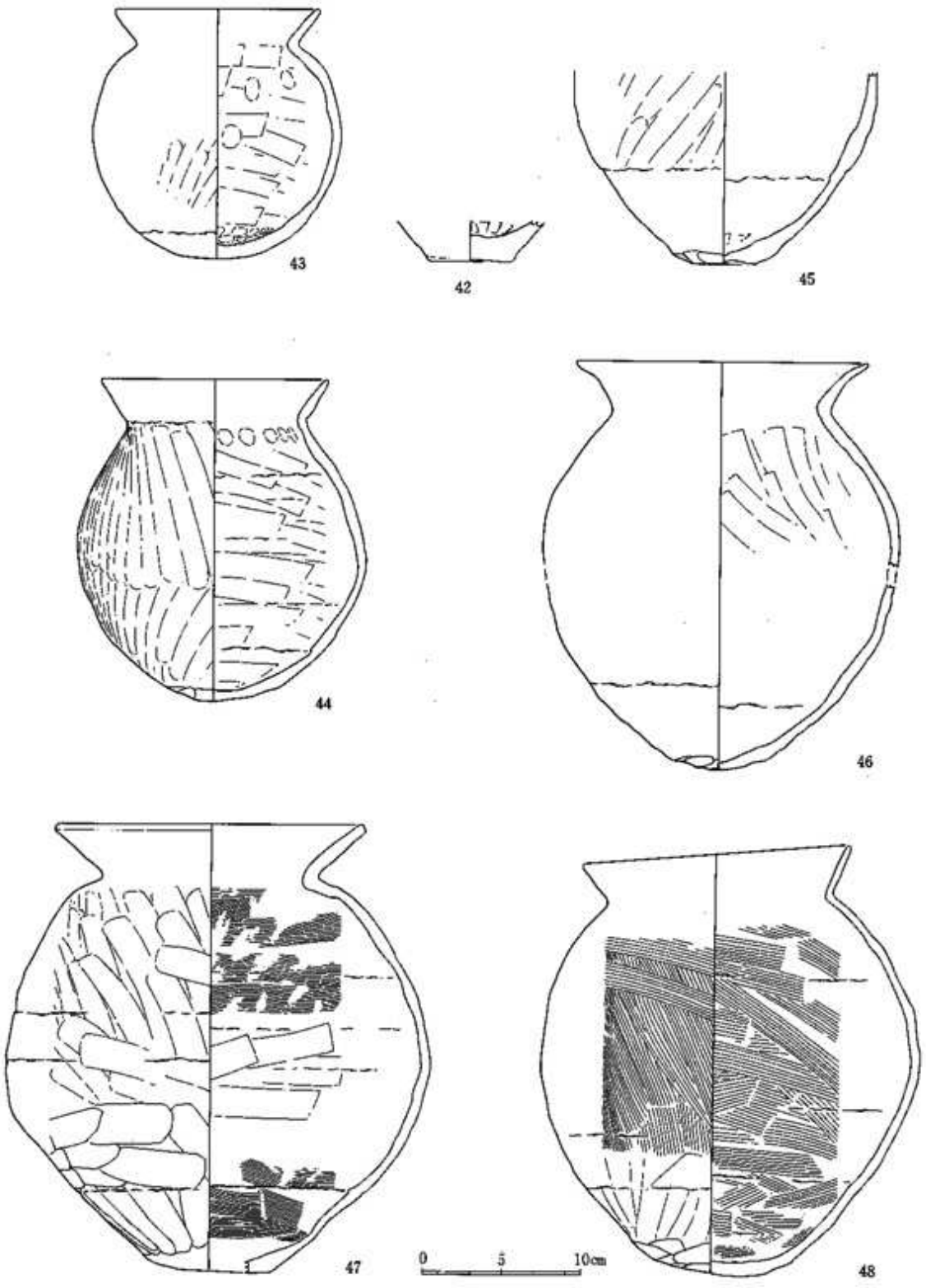
第81号住居址



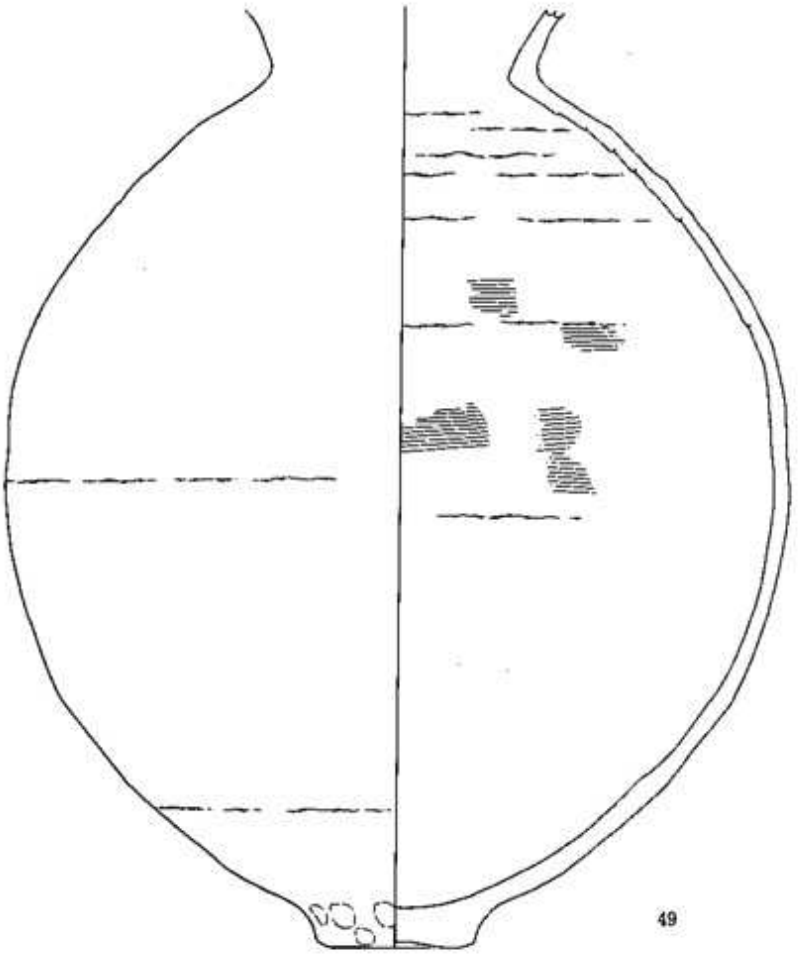
第20図　古墳時代土器実測図(1)



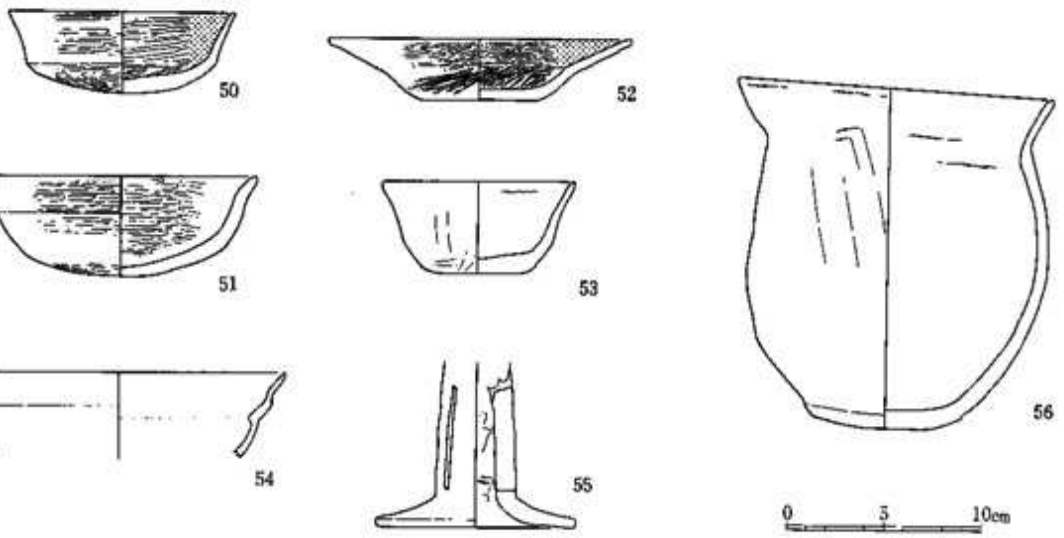
第21図　古墳時代土器実測図(2)



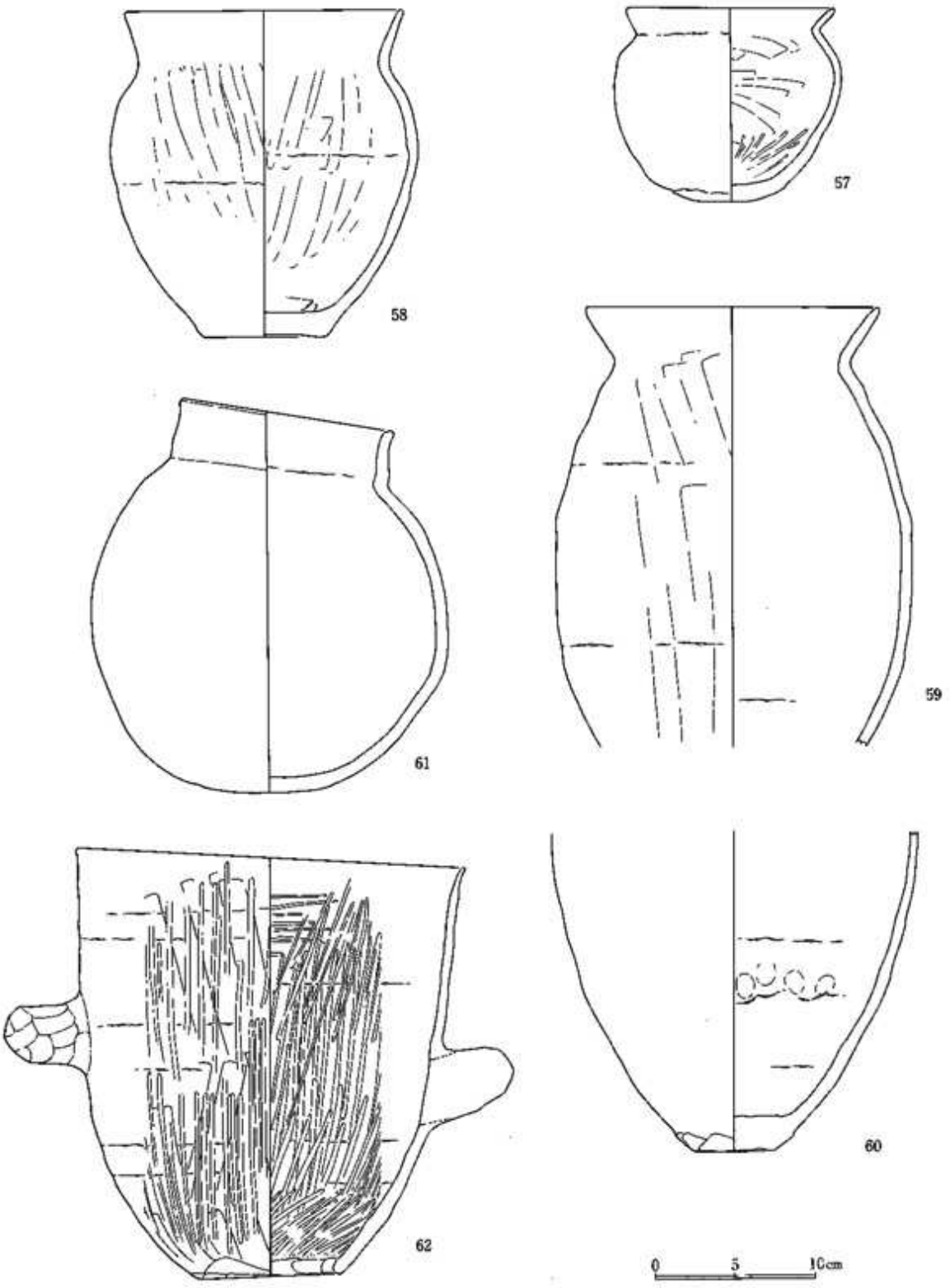
第22図　古墳時代土器実測図(3)



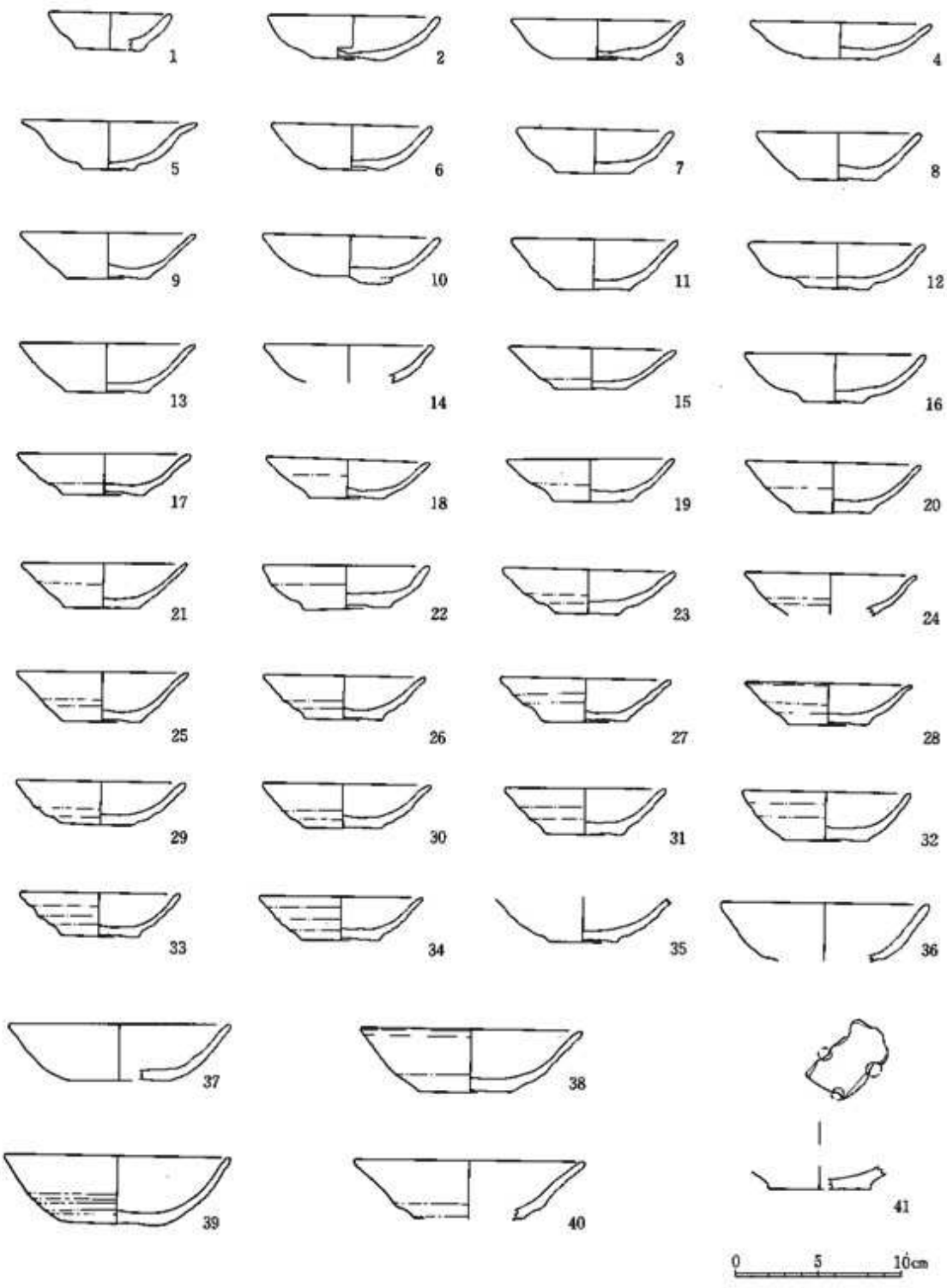
第86号住居址



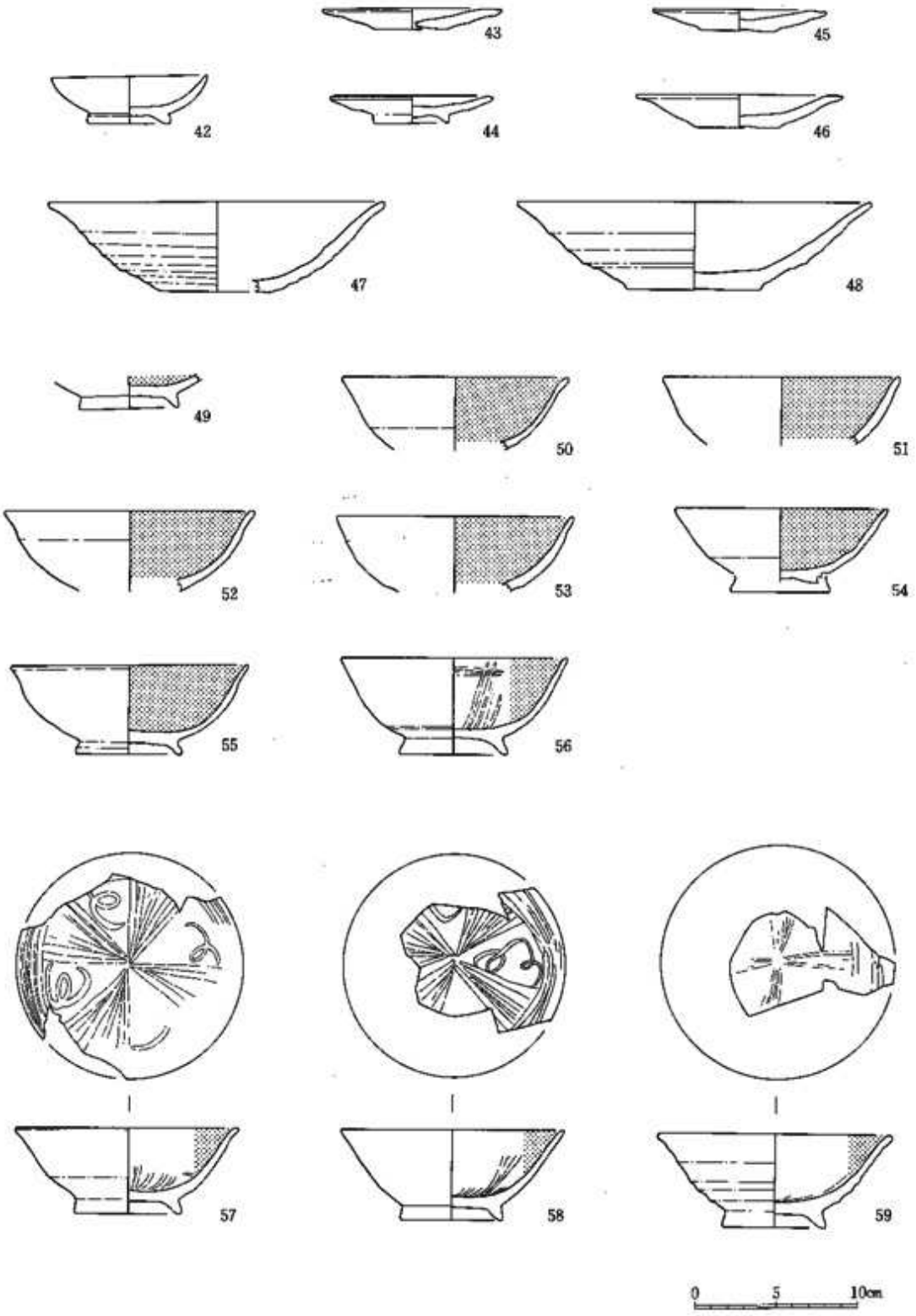
第23図　古墳時代土器実測図(4)



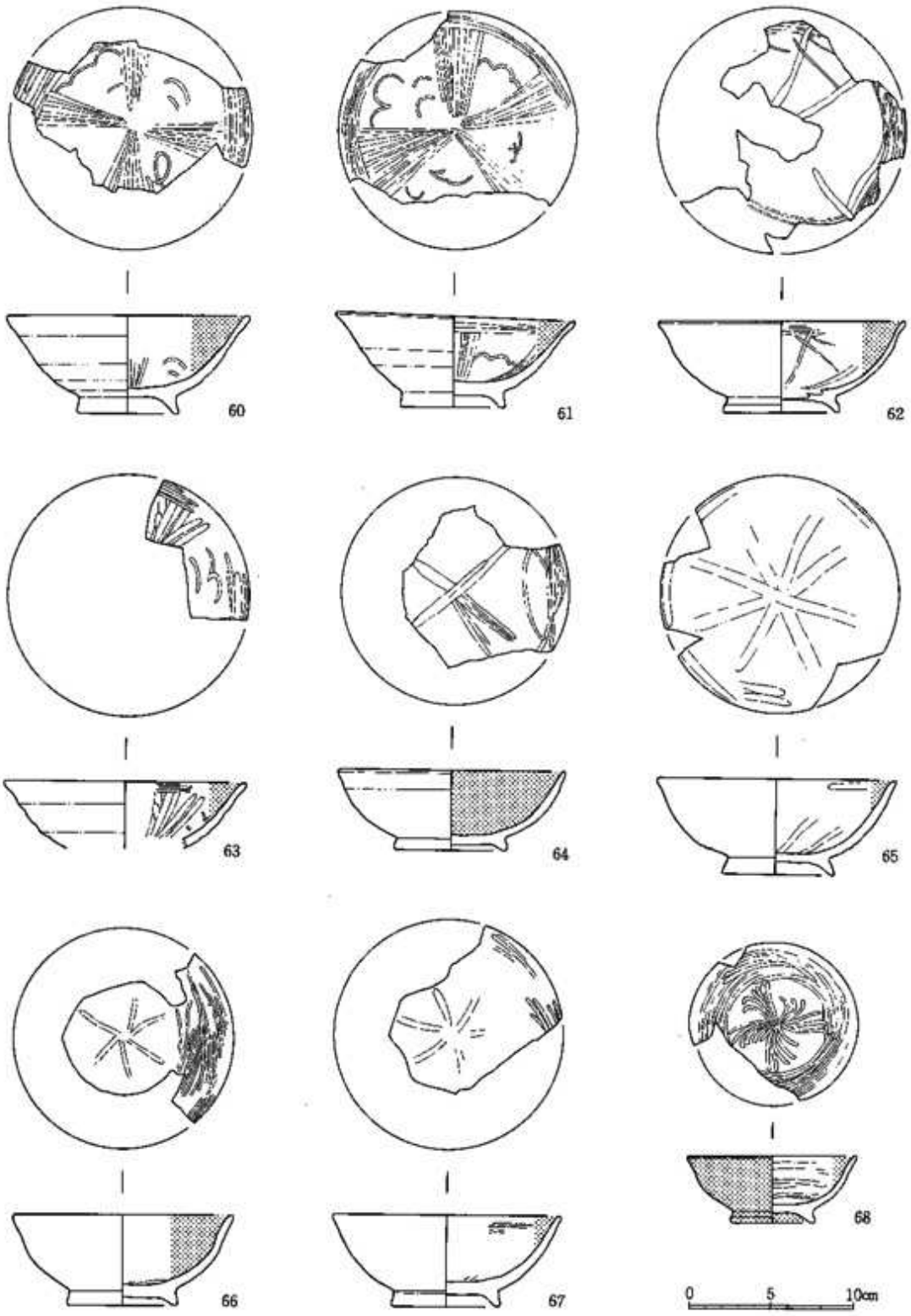
第24図　古墳時代土器実測図(5)



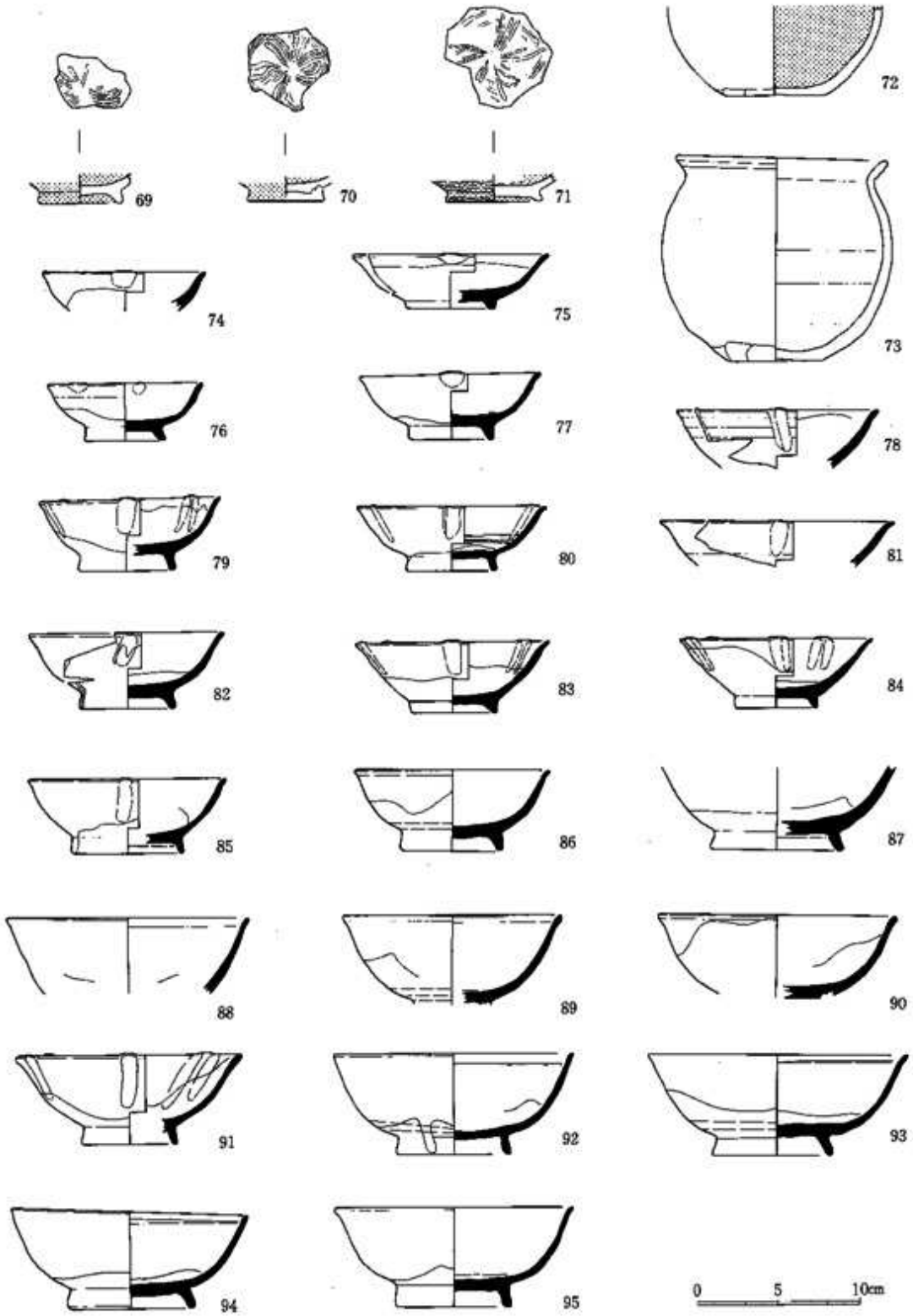
第25図　平安時代土器・陶器実測図(1)



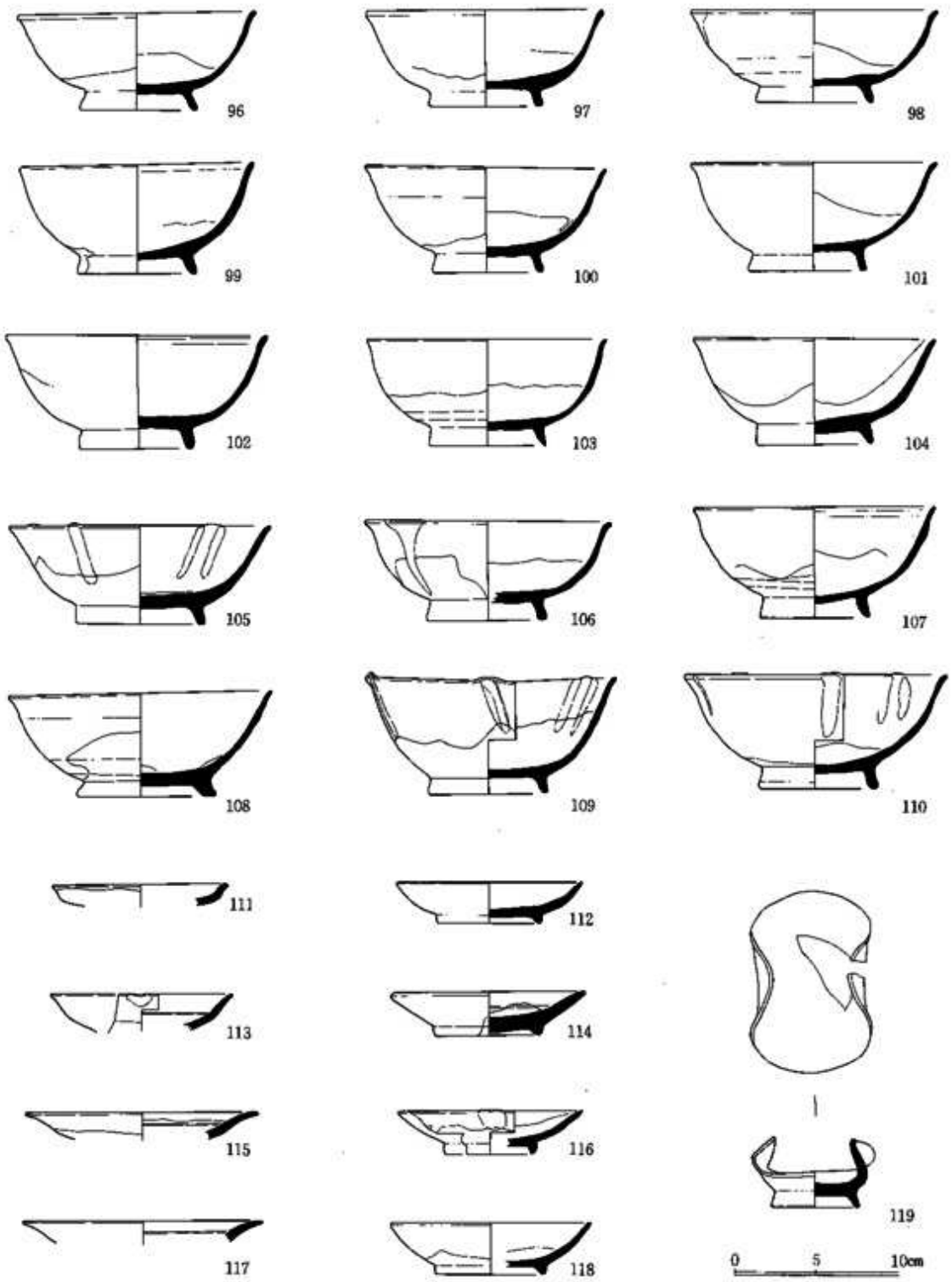
第26図　平安時代土器・陶器実測図(2)



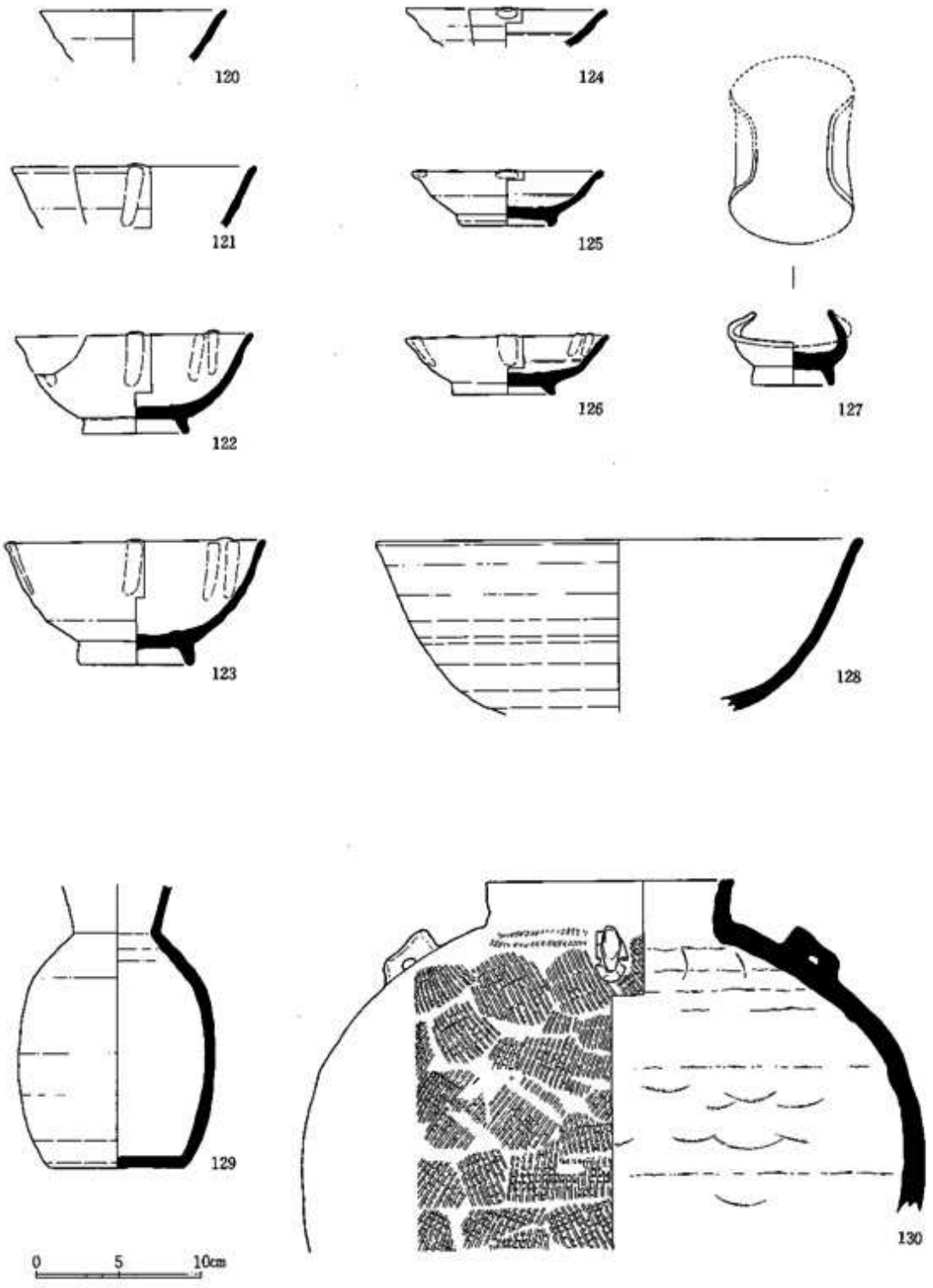
第27図　平安時代土器・陶器実測図(3)



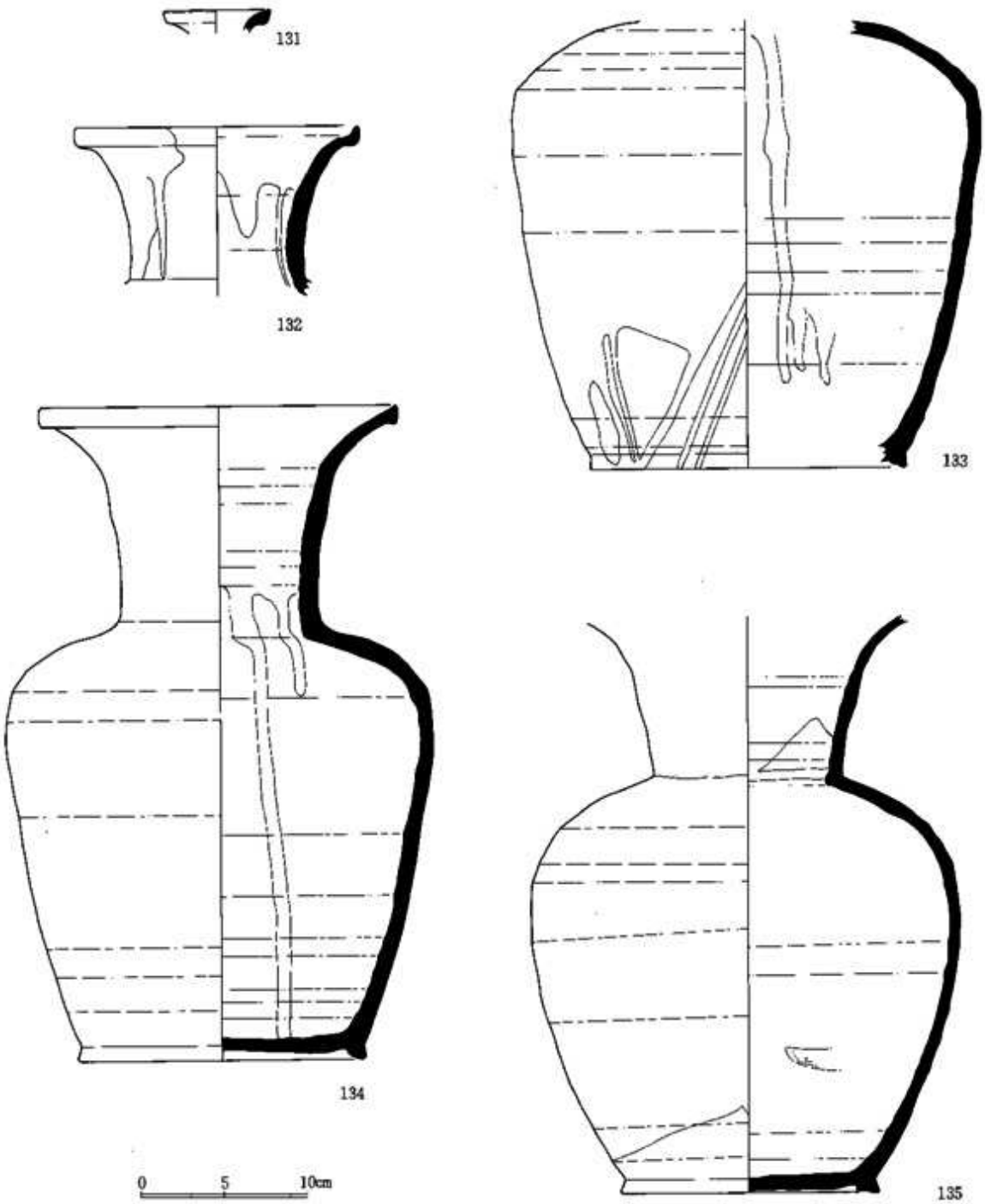
第28図　平安時代土器・陶器実測図(4)



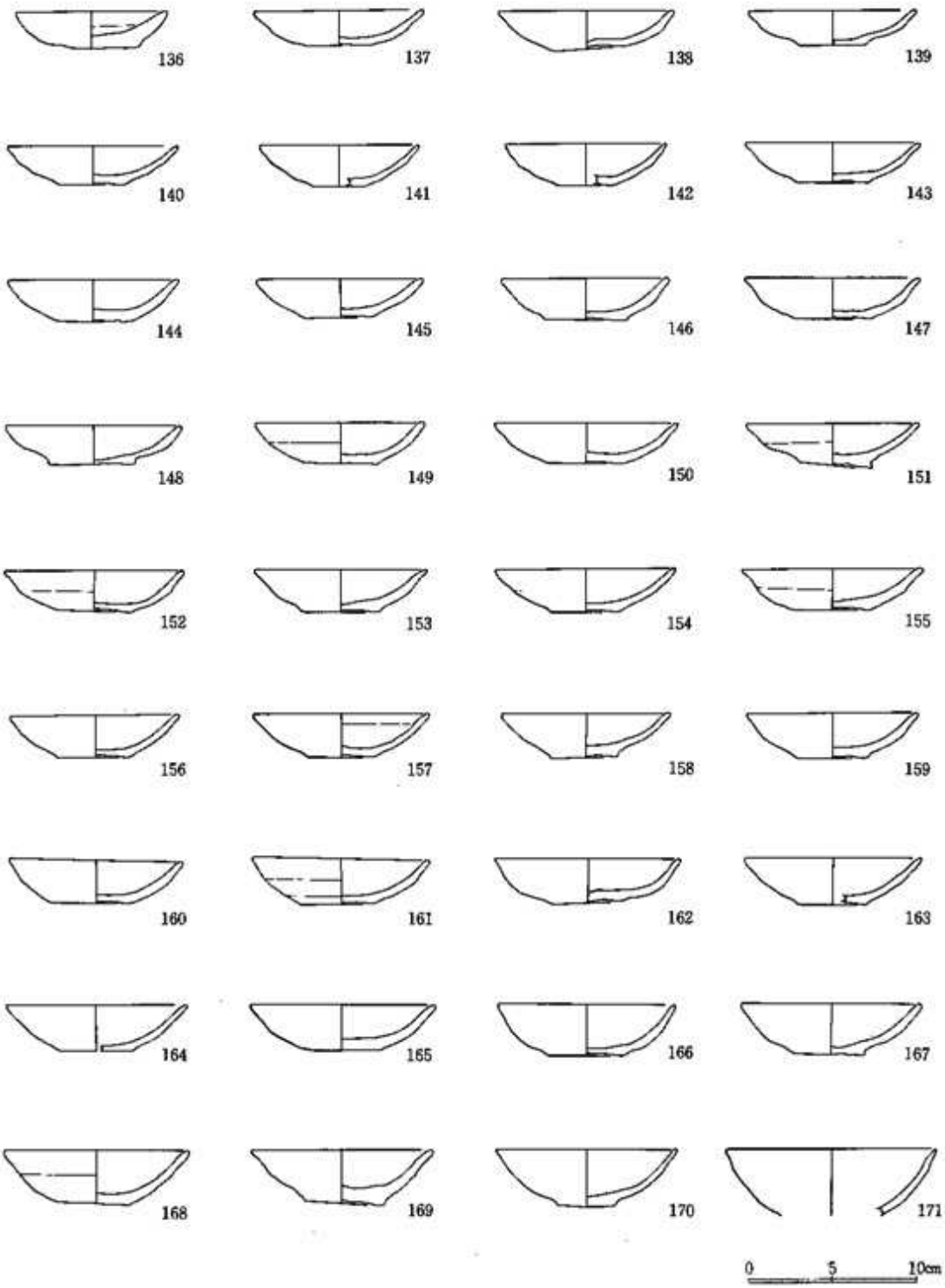
第29図　平安時代土器・陶器実測図(5)



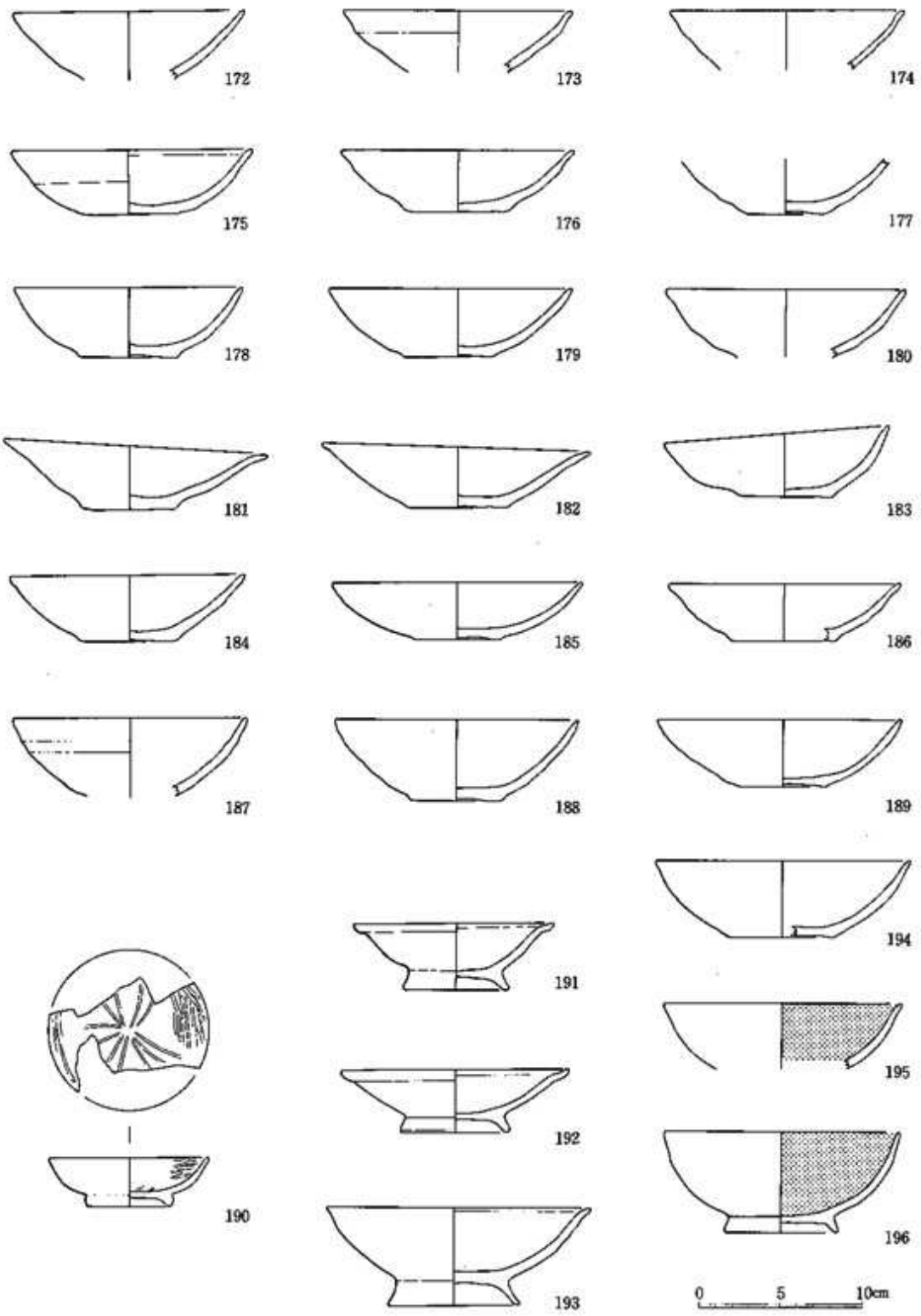
第30図　平安時代土器・陶器実測図(6)



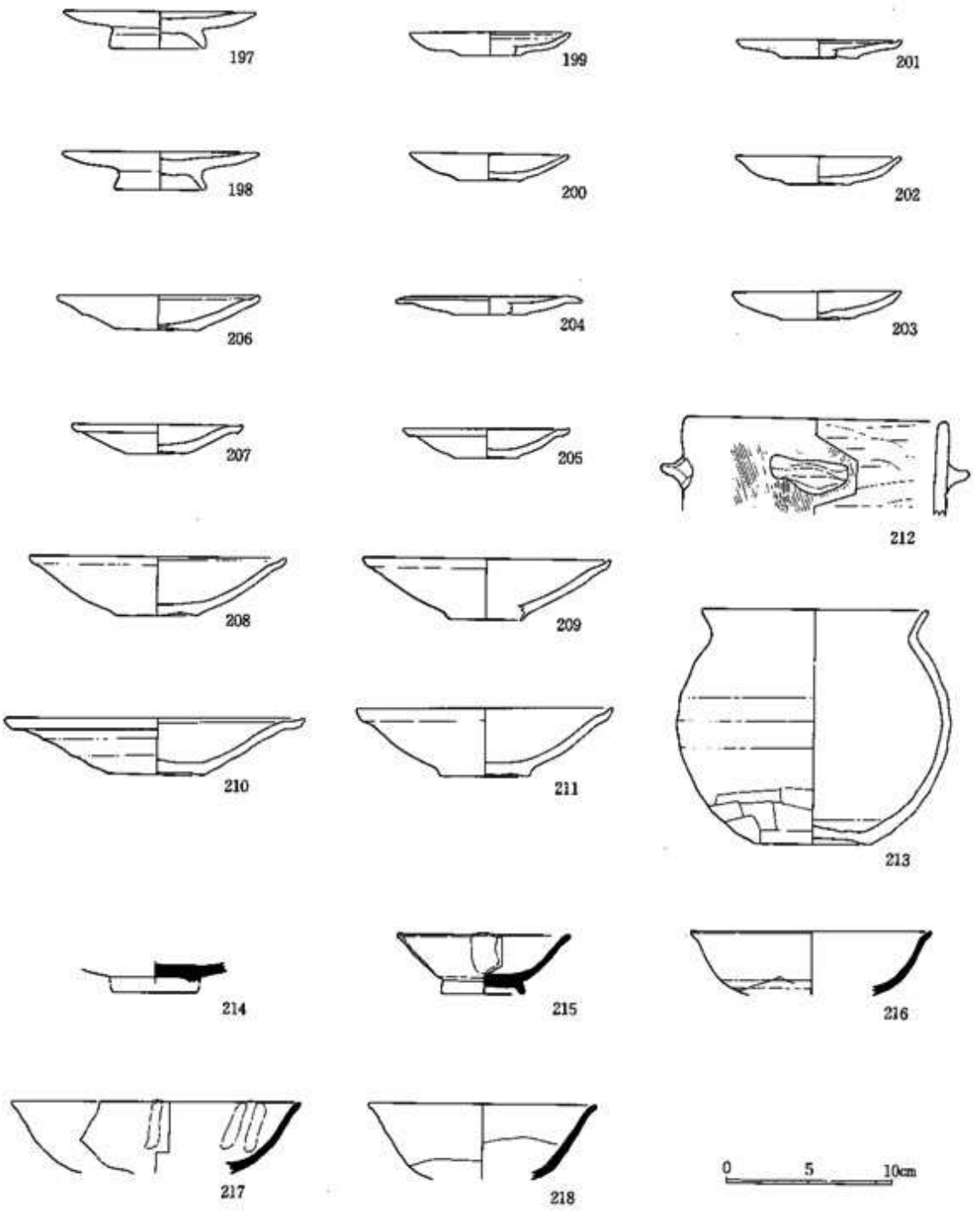
第31図　平安時代土器・陶器実測図(7)



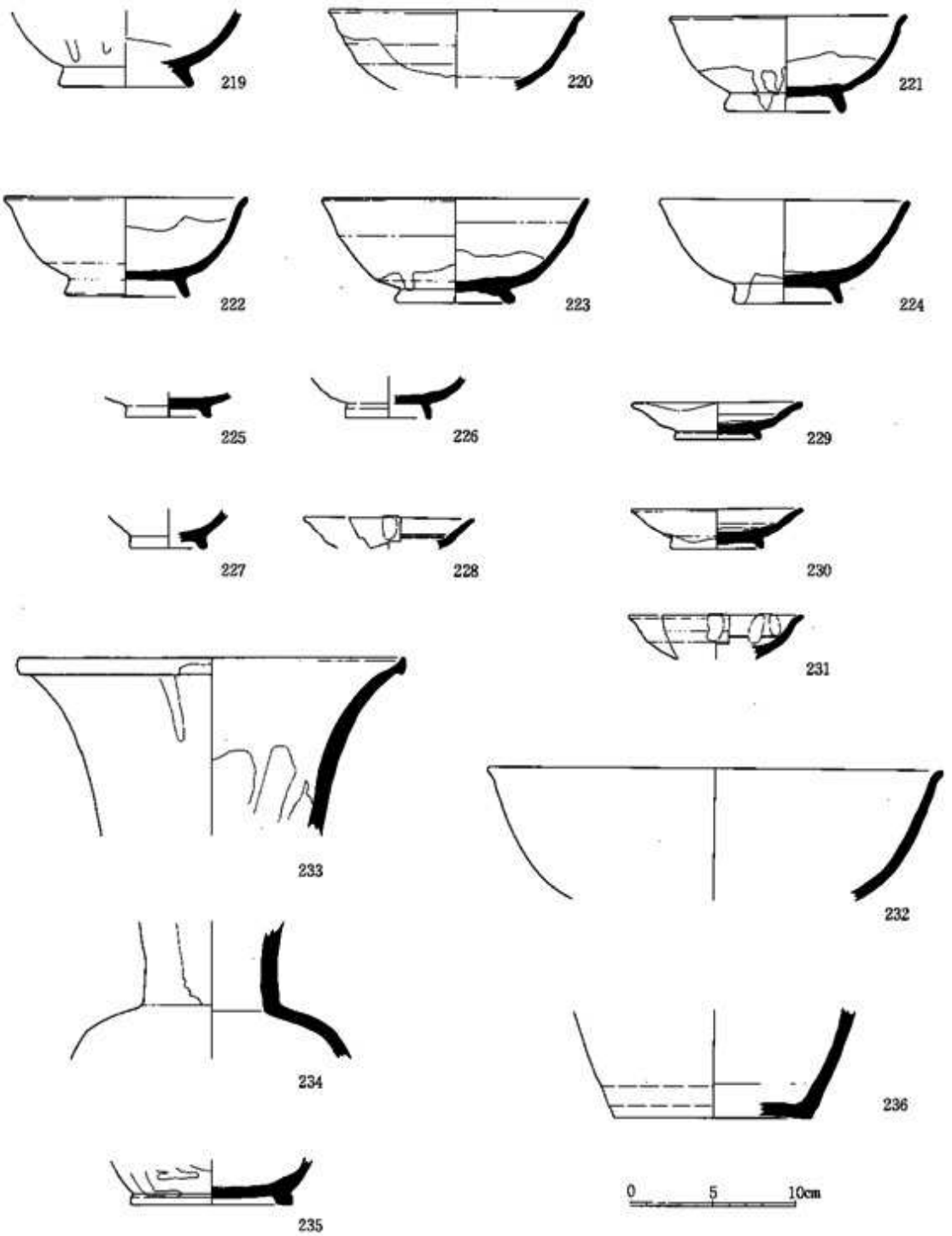
第32図　平安時代土器・陶器実測図(8)



第33図　平安時代土器・陶器実測図(9)



第34図　平安時代土器・陶器実測図(10)



第35図　平安時代土器・陶器実測図(11)

表7　古墳時代土器観察表

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
地点			器高	色調		外面	
土器			口径				
図			底径	焼成		内面	
81住	小型丸底坩	口縁部1/2底部完	9.0	黒褐	淡灰色微～砂粒	口縁ヨコナデ、体部ケズリ→ナデ、底部ナデ	口縁部摩滅著しい
1			9.25	良			
20			3.4			口縁ヨコナデ、工具ナデ	81－12
81住	小型丸底坩	口縁部一部欠底部完	8.95	暗褐	灰色細粒	口縁ヨコナデ、体部ナデ、底部弱いハケか繊維状のものによるナデ	底面黒変、頸部線刻による文様
2			8.4	良			
20			5.15			口縁ヨコナデ、指ナデ	81－13
81住	小型丸底坩	口縁部一部欠	9.9	黒～橙褐	淡褐・灰色微～細粒	口縁ヨコナデ→ミガキ、体部工具ナデ→ミガキ、底部ヘラケズリ	全体に摩滅
3			9.9	良			
20			3.7			口縁ヨコナデ→ミガキ、指ナデ	81－23
81住	小型丸底坩	底部完		暗橙褐	灰・褐色微～細粒	摩滅不明ケズリのちナデ or ミガキか？	
4				良			
20			3.0			指ナデ	81－11
81住	小型丸底坩	底部完		橙褐	白・灰・褐色微～細粒	摩滅不明ケズリのちナデか？	
5				良			
20			4.8			指オサエ、ナデ	81－10
81住	坩	底部完		黒～橙褐	雲母粉、淡褐・褐色微～細粒	ミガキ	全体に摩滅
6				良			
20			5.0			指ナデ→工具ナデ	81-14
81住	高杯	脚柱部完		黒～暗褐	淡褐色微～細粒	脚部：柱部ミガキ	全体に摩滅
7				良			
20						脚部：柱部工具ナデ	81－7
81住	高杯	杯部2/3		黄橙褐	淡褐・褐色細～砂粒	口縁ヨコナデ、摩滅不明	
8			18.6	良			
20						口縁ヨコナデ、摩滅不明	81－3
81住	高杯	杯部4/5		黒～暗橙褐	雲母粉、灰色微粒	杯部：口縁ヨコナデ→ミガキ	全体に摩滅
9			19.0	良			
20						杯部：口縁ヨコナデ→ミガキ	81－2
81住	高杯	杯部2/3		黄～赤橙褐	淡褐色微粒	杯部：口縁ヨコナデ→ミガキ	全体に摩滅
10			18.7	良		杯部：口縁ヨコナデ→ハケメ→ミガキ、底部ミガキ	81－1
20							
81住	高杯	完形	14.7	赤橙褐～黒褐	淡褐色微粒灰色細粒	杯部：口縁ヨコナデ、摩滅不明ミガキか？脚部：柱部ミガキ、端部ヨコナデ	杯部内外面摩滅杯部燃色処理？
11			18.1	良			
20			12.0			杯部：口縁ヨコナデ→ミガキ摩滅脚部：柱部工具ナデ、端部ヨコナデ	81－15
81住	高杯	杯底部1/2脚柱部完		黒褐	灰色微～細粒	杯部：ミガキ脚部：柱部ミガキ	杯部内外面摩滅
12				良			
20						杯部：ミガキ脚部：柱部工具ナデ	81－18
81住	高杯	脚部完		灰褐	石英・長石細粒、灰色微～細粒	脚部：柱部ハケメ→ミガキ、端部ヨコナデ	外面摩滅
13				良			
20			10.3			脚部：柱部指ナデ、端部ヨコナデ	81－20
81住	高杯	脚柱部完脚裾部4/5		暗橙褐	灰・褐色微～細粒	脚部：柱部ミガキ、端部ヨコナデ	外面摩滅
14				良			
20			10.4			脚部：柱部指ナデ、端部ヨコナデ	81－22
81住	高杯	脚柱部完脚裾部一部欠		暗橙褐	白・淡褐色微～細粒	脚部：柱部ミガキ摩滅、端部ヨコナデ	
15				良			
20			11.9			脚部：柱部上部指オサエ、ナデ、端部ヨコナデ	81－21

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
地点			器高	色調		外面	
土器			口径				
図			底径	焼成		内面	
81住	高杯	脚部1/3		暗褐	雲母粉、灰色微粒	脚部：柱部ミガキ	
16							
20				良		脚部：柱部工具ナデ	81—6
81住	高杯	杯部3/5 脚部一部欠	11.2	黒～暗橙褐	淡褐色微粒 灰色微～細粒	杯部：口縁ヨコナデ、ミガキ 脚部：柱部ミガキ、端部ヨコナデ	全体に摩滅
17			18.2	良		杯部：口縁ヨコナデ、ミガキ 脚部：柱部工具ナデ、端部ヨコナデ	81—16
20			9.6				
81住	高杯	脚部一部欠		黒～暗橙褐	雲母粉、淡褐・灰色微～細粒	脚部：ミガキ摩滅、端部ヨコナデ	全体に摩滅 外面一部黒変
18							
20			10.0	良		脚部：工具ナデ、端部ヨコナデ	81—17
81住	高杯	杯底部2/3 脚部3/4		淡橙褐	灰色微～細粒 雲母少量	杯部：ミガキ摩滅 脚部：ミガキ摩滅、端部ヨコナデ	
19							
20			10.4	やや軟質		杯部：ミガキ摩滅 脚部：柱部しぼり痕・工具ナデ、端部ヨコナデ	81—19
81住	壺	底部1/2		黒褐	石英・灰色細粒	工具ナデ、底部ヘラケズリ	全体に摩滅
20							
20			6.6	良		工具ナデ、底部ハケメ	81—9
81住	小形甕	底部完		黒赤褐	石英細粒、灰色微～細粒	工具ナデ	外面摩滅
21							
20			4.6	良		工具ナデ	81—8
81住	甕	底部完		暗黄褐	石英・灰色細粒多混	ナデ、指オサエ、孔部ヨコナデ	内面被熱黒変 弥生土器
22							
20			6.2	良		ナデ摩滅、孔部ヨコナデ	81—4
101住	鉢	口縁部一部残、底部完	5.7	茶褐黒茶褐	白・白灰色微細粒	口縁ヨコナデ、工具ナデ摩滅、底部ナデ	
23			13.8				
21			4.6	良		口縁ヨコナデ、ナデ摩滅、底部ハケメ	101—15
101住	小型丸底壺	口縁部2/3体～底部図化部完	合成不明	橙茶褐、黒	白・白灰・灰色微～細粒	口縁ヨコナデ、摩滅不明	合成実測 内外面摩滅
24			8.3				
21			3.9	良		口縁ヨコナデ、工具ナデ→指ナデ	101—13
101住	小型丸底壺	底部完		茶褐～淡橙茶褐	白色微～粗粒、白灰色微～細粒	摩滅不明	
25							
21			3.2	良		工具ナデ	101—9
101住	小型丸底壺	底部完		茶褐～暗茶褐	白色微～粗粒、白灰色微～細粒	摩滅不明	
26							
21			2.8	良		摩滅不明、底部工具ナデ	101—8
101住	小型丸底壺	底部1/4		橙茶褐	白・白灰色微～細粒	摩滅不明	
27							
21			4.0	良		体部上半指圧痕、下半工具ナデ	101—10
101住	小型丸底壺	口縁部1/2 底部2/3	8.3	茶褐～橙茶褐	白色微～粗粒	口縁ヨコナデ→摩滅不明	
28			9.2				
21			4.0	良		口縁ヨコナデ→摩滅不明、体部下半工具ナデ→指オサエ	101—11
101住	小型丸底鉢	口縁部1/8		橙茶褐	白・白灰色微細粒	口縁ヨコナデ→摩滅不明	
29			12.6				
21				良		口縁ヨコナデ→摩滅不明	101—16
101住	小型丸底壺	底部完		茶褐～暗茶褐	白・灰色微細粒	摩滅不明、底部工具ナデ	
30							
21			4.0	良		工具ナデ	101—17

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
地点			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
101住	小形壺	口縁部1/2 底部完	6.8	茶～橙茶褐	白・白灰色徴～細粒	口縁ヨコナデ、胴部ハケメか？底部摩滅不明	
31			8.5	良		口縁ヨコナデ、胴部・底部指オサエ→工具ナデ	101—12
21			3.6				
101住	ミニチュア	完形	4.0	黒～暗褐	灰・褐色徴～細粒	口縁ヨコナデ、胴部・底部指ナデ	
32			4.3	良		口縁ヨコナデ、口縁内面指ナデ→ハケメ、胴部・底部指ナデ	101—25
21			1.5				
101住	不明	胴部1/2		茶～橙茶褐	白・白灰色徴～細粒	摩滅不明	
33				良		摩滅不明	101—18
21							
101住	高杯	杯部2/3 脚柱部完		橙茶褐	白・白灰色徴～細粒	杯部：口縁ヨコナデ、ミガキ 脚部：柱部ミガキ	全体に摩滅
34			17.0	良		杯部：口縁ヨコナデ、ミガキ 脚部：柱部工具ナデ	101—4
21							
101住	高杯	杯底部完 脚部1/2		橙茶褐	白・白灰色徴～細粒	杯部：ミガキ摩滅 脚部：柱部ミガキ摩滅、端部ヨコナデ	
35				良		杯部：ミガキ摩滅 脚部：柱部工具ナデ、端部ヨコナデ	101—2
21			12.6				
101住	高杯	脚柱部完 脚端部1/3		橙茶褐	白色徴～粗粒、白灰色徴～細粒	柱部ミガキ、端部ヨコナデ	全体に摩滅
36				良		柱部工具ナデ、端部ヨコナデ	101—5
21			13.0				
101住	高杯	杯底部1/2 脚柱部1/2		茶褐	白・灰・白灰色徴～細粒	杯部：ミガキ 脚部：柱部ミガキ	全体に摩滅
37				良		杯部：ミガキ 脚部：柱部シボリ、ナデ	101—3
21							
101住	高杯	杯部2/3 脚部1/2	18.2	橙茶褐	白色徴～粗粒白灰・灰色徴～細粒	杯部：口縁ヨコナデ、ミガキ摩滅 脚部：柱部ミガキ摩滅、端部ヨコナデ	
38			18.0	良		杯部：口縁ヨコナデ、ミガキ摩滅 脚部：柱部工具ナデ、裾部ミガキ摩滅、端部ヨコナデ	101—6
21			16.0				
101住	高杯	杯部4/5 脚部4/5	14.1	暗茶～橙茶褐	白色徴～細粒灰・白灰色徴～細粒	杯部：口縁ヨコナデ、ミガキ摩滅 脚部：柱部ミガキ摩滅、端部ヨコナデ	
39			18.0	良		杯部：口縁ヨコナデ、ミガキ摩滅 脚部：柱部工具ナデ、端部ヨコナデ	101—22
21			10.9				
101住	高杯	杯部一部欠 脚部3/4	12.3	橙茶褐～赤橙	白・白灰・灰色徴～細粒	杯部：口縁ヨコナデ、ミガキ摩滅 脚部：柱部ミガキ摩滅、端部ヨコナデ	内外面2次被熱
40			17.5	良		杯部：口縁ヨコナデ、ミガキ摩滅 脚部：柱部工具ナデ、端部ヨコナデ	101—21
21			10.0				
101住	高杯	杯底部完 脚部完		橙茶褐	白色徴～細粒、白灰色徴～粗粒	杯部：ミガキ摩滅 脚部：柱部ハケメ→ミガキ、端部ヨコナデ	
41				良		杯部：ミガキ摩滅 脚部：柱部工具ナデ、裾部ハケメ、端部ヨコナデ	101—1
21			14.4				
101住	甕	底部完		暗茶褐	白・白灰色徴～細粒黒色徴粒	ナデか？底部ナデ	あげ底
42				良		工具ナデ	101—14
22			5.0				
101住	甕	口縁部1/2 底部完	15.8	暗茶～橙茶褐	白・白灰色徴～粗粒	口縁ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部ナデか？	底部型押し作りをしている可能性有り 101—23
43			12.8	良		口縁ヨコナデ、胴部工具ナデ、胴部上半及び底面指圧痕	
22			9.7				
101住	甕	口縁部2/3 底部完	20.4	暗～黒茶褐	白色徴～細粒、白灰色徴～粗粒	口縁ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部ヘラケズリ	
44			14.2	良		口縁ヨコナデ、口縁下指オサエ、胴部工具ナデ	101—20
22			7.6				
101住	甕	底部完		茶褐	白・白灰色徴～細粒	胴部工具ナデ、胴部下端ケズリ、底部ナデ	
45				良		胴部調整摩滅、底面板ナデ	101—19
22			4.0				
101住	甕	底部完	合或不明	茶褐～暗茶褐	白・灰色徴粒、白灰色徴～細粒	口縁ヨコナデ、胴部ナデ摩滅、底部ヘラケズリ	
46			18.2	良		口縁ヨコナデ、胴部上半工具ナデ・下半ナデ摩滅	101—7
22			6.6				

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
地点			器高	色調		外面	
土器			口径				
図			底径	焼成		内面	
101住	甕	口縁部1/3 底部一部欠	28.4	茶褐～黒茶褐	白・灰色微～粗粒	口縁ヨコナデ、胴部上半工具ナデ、下半ヘラケズリ、底部ナデか?	
47			19.2	良		口縁ヨコナデ、胴部中央工具ナデ、他ハケメ	101—24
22			7.4				
101住	甕	口縁部4/5 底部完	26.6	黒～暗黄褐	灰色微～細粒	口縁ヨコナデ、胴部上半ハケメ、下半工具ナデ底部ケズリ→ナデ	
48			17.0	良		口縁ヨコナデ、胴部・底部ハケメ	101—27
22			7.2				
101住	壺	底部完		黒～暗褐	石英微～細粒、灰色微～砂粒	胴部ミガキか?（摩滅）、胴部下端指圧痕、底部木葉痕	
49				良		胴部上半ハケメ下半摩滅、底部摩滅	101—26
23			8.2				
86住	杯	口縁部2/3 底部完	4.2	黒～褐	淡褐・褐色微～粗粒	口縁ヨコナデ、体部ミガキ、底部ヘラケズリ→ミガキ	内黒の可能性有り
50			11.8	良		口縁ヨコナデ、体部ミガキ	86—4
23			8.4				
86住	杯	口縁部1/3 底部3/4	5.2	黒～褐	雲母・灰・褐色微～砂粒	口縁ヨコナデ→ミガキ、底部ヘラケズリ→ミガキ	内外面摩滅
51			14.2	良		口縁ヨコナデ→ミガキ	86—3
23			9.3				
86住	杯	口縁部1/3 底部完	3.2	黒～褐	石英細粒、淡褐・褐色微～砂粒	口縁ヨコナデ→ミガキ、底部ナデ	外面摩滅 内面黒色処理
52			15.8	良		口縁ヨコナデ→ミガキ	86—2
23			6.6				
86住	杯	口縁部1/3 底部完	4.8	暗～橙褐	淡褐・褐色微～砂粒 雲母粉	口縁ヨコナデ、ナデ	
53			10.0	良		口縁ヨコナデ、ナデ	86—1
23			6.0				
86住	鉢	口縁部1/12		橙茶褐	白・白灰色微～細粒	口縁ヨコナデ、ナデ	
54			17.4	良		口縁ヨコナデ、ナデ	86—8
23							
86住	高杯	脚柱部完 脚端部1/3		暗黄灰褐	灰・褐色微～細粒	柱部ミガキ摩滅、端部ヨコナデ	縦長3対の透かしがあった可能性大
55				良		柱部工具ナデ、裾部ミガキ、端部ヨコナデ	86—5
23			10.5				
86住	小形甕	口縁部1/2 底部完	17.75	暗～暗褐褐	灰・褐色砂粒	口縁ヨコナデ、胴部工具ナデ摩滅	
56			16.4	良		口縁ヨコナデ、胴部・底部摩滅不明	86—10
23			6.6				
86住	小形甕	口縁部2/3 底部2/3	12.2	黒～褐	灰・褐色微～砂粒 一部粗粒	口縁ヨコナデ、胴部・底部ナデ	
57			13.0	良		口縁ヨコナデ、胴部上半工具ナデ・下半ミガキ	86—7
24			7.0				
86住	小形甕	口縁部1/3 底部完	15.6	暗赤～暗褐	灰・褐色細粒	口縁ヨコナデ、胴部工具ナデ、底部ナデ	
58			19.6	良		口縁ヨコナデ、胴部・底部工具ナデ	86—6
24			7.8				
86住	甕	口縁部完		黒～暗橙褐	淡褐・褐・灰色微～砂粒	口縁ヨコナデ、胴部工具ナデ摩滅	
59			18.4	良		口縁ヨコナデ、胴部摩滅不明	86—13
24							
86住	甕	底部完		暗橙褐	淡褐・褐色微～細粒	胴部摩滅不明、胴部下端・底部ヘラケズリ	
60				良		胴部指圧痕	86—11
24			7.4				
86住	壺	口縁部完 底部完	24.1	淡～赤橙褐	白・灰・褐色微～砂粒	口縁ヨコナデ、胴部・底部摩滅不明	
61			13.5	良		口縁ヨコナデ、胴部・底部摩滅不明	86—9
24			8.3				
101住	甕	口縁部3/4 底部完	26.5	黒～橙褐	黒・灰色微～砂粒	口縁ヨコナデ、胴部ケズリ→ミガキ、把手部接合→ヘラケズリ、孔部ヨコナデ	
62			24.5	良		口縁ヨコナデ、胴部ミガキ、孔部ヨコナデ→ヘラケズリ	86—12
24			9.6				

表8　平安時代土器・陶器観察表

第4号住居址土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
1	土師器	杯AII	7.2	4.0	2.2	(1／4)	橙茶褐	橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		122
2	〃	〃	10.4	4.3	2.6	完	赤褐	赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		61
3	〃	〃	10.4	5.4	2.4	一部欠	橙茶褐	橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		89
4	〃	〃	11.0	4.4	2.2	(完)	茶褐	茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		107
5	〃	〃	10.6	3.2	2.9	2／3	赤茶褐	赤茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		95
6	〃	〃	9.6	4.2	2.7	(2／3)	淡橙茶褐	淡橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		98
7	〃	〃	9.4	4.6	2.6	(一部欠)	暗～淡茶褐	暗橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		90
8	〃	〃	10.0	4.6	2.8	(完)	淡橙茶褐	淡橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		97
9	〃	〃	10.6	5.0	2.7	(完)	赤褐	赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		55
10	〃	〃	10.8	4.5	2.5	完	黄褐	黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		65
11	〃	〃	10.0	4.4	3.0	1／2	暗茶褐	暗茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		99
12	〃	〃	10.6	4.0	2.8	(完)	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		94
13	〃	〃	10.7	5.0	2.9	(完)	赤褐	赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		54
14	〃	〃	10.2			1／3	暗茶褐	暗茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、	内面タール状の付着物	108
15	〃	〃	10.2	4.3	2.5	完	黒～黄赤褐	黒～黄赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み大	59
16	〃	〃	11.0	3.7	2.9	完	黄褐	黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	内面タール状の付着物	62
17	〃	〃	10.5	5.0	2.5	完	暗～黄褐	暗～黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	見込にスス付着	66
18	〃	〃	10.0	4.6	2.4	完	赤褐	赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		63
19	〃	〃	10.2	5.1	2.6	(完)	赤褐	赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		56
20	〃	〃	10.6	4.6	3.0	完	暗～赤褐	暗～赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		57
21	〃	〃	10.1	4.6	2.7	完	赤褐	赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		60
22	〃	〃	10.0	5.3	2.7	(完)	淡橙茶褐	橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		91
23	〃	〃	10.5	4.0	2.7	(1／3)	橙茶褐	橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		85
24	〃	〃	10.5			1／2	灰～灰褐	灰～灰褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、		47
25	〃	〃	10.3	4.7	3.0	(完)	黒褐～赤褐	黒褐～赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		46
26	〃	〃	9.8	4.6	2.6	(完)	暗茶褐	暗茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		96
27	〃	〃	10.4	5.0	2.6	(4／5)	暗茶～橙茶褐	橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		92
28	〃	〃	10.2	4.8	2.5	完	黒～暗褐	黒～暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	内面タール状の付着物	64
29	〃	〃	10.2	4.3	2.6	(完)	橙褐～暗灰	暗～赤橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		88
30	〃	〃	10.2	4.8	2.6	(完)	淡橙茶褐	橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		93
31	〃	〃	9.8	4.8	2.8	(2／3)	暗～橙茶褐	暗～茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		84
32	〃	〃	10.2	5.0	2.9	(2／3)	淡橙茶褐	橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		83
33	〃	〃	9.6	4.7	2.6	(完)	暗～橙茶褐	暗～橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		86

No.	種別	器形	寸法(cm)			残存度 口縁(底部)	色調		成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
			口径	底径	器高		外面	内面			
34	土師器	杯AII	10.0	4.6	2.6	(完)	暗～橙茶褐	暗橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		87
35	〃	〃		4.2		(完)	橙茶褐	橙茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切り		106
36	〃	杯or椀	12.6			1／2	茶褐	茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		115
37	〃	杯AI	13.4	6.0	3.4	(1／3)	橙～茶褐	茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		105
38	〃	〃	13.5	5.5	3.8	完	赤褐～黒灰	赤褐～黒灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		45
39	〃	〃	13.6	6.0	4.1	(完)	橙茶褐	赤橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		110
40	〃	杯or椀	14.0			1／2	橙茶褐	橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		103
41	〃	杯or皿		6.4		(1／4)	茶褐	茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切り	底部に3箇所穿孔	118
42	〃	椀	9.5	5.1	2.9	完	黄褐	黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		58
43	〃	皿AII	11.0	4.4	1.2	完	黄褐	黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、口縁内部1条の沈線、底部回転糸切り	歪み大	52
44	〃	〃	10.0	4.1	1.7	完	黄～灰褐	黄～灰褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、口縁内部1条の沈線、付高台のちナデ		51
45	〃	〃	10.6	4.5	1.3	完	赤～灰褐	赤～灰褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、口縁内部1条の沈線、底部回転糸切り	歪みあり	50
46	〃	〃	12.7	5.1	2.0	完	黒灰～黄褐	黒灰～黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、口縁内部1条の沈線、底部回転糸切り		53
47	〃	鉢A	20.6	7.0	5.5	4／5	淡橙茶褐	淡橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		111
48	〃	〃	21.6	8.2	5.4	(一部欠)	暗～茶褐	黒～暗茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		109
49	黒色土器B	椀		6.0		(一部欠)	黒	黒	体部内外面ヘラミガキ(摩滅)、底部ヘラミガキ、付高台のちナデ		119
50	黒色土器A	〃	14.0			2／3	灰～黄褐	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ヘラミガキ		48
51	〃	〃	14.4			1／2	茶褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ヘラミガキ(摩滅)		104
52	〃	〃	15.2			1／3	茶褐	黒～灰茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文か?		102
53	〃	〃	14.6			1／2	暗橙茶褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文か?		100
54	〃	〃	13.05			1／2	黒～赤褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ヘラミガキ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		39
55	〃	〃	13.6	6.6	5.4	完	暗赤褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ヘラミガキ(摩滅)、底部回転糸切り、付高台のちナデ		132
56	〃	〃	14.0	6.8	5.9	(完)	赤～灰褐	黒～赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		40
57	〃	〃	13.8	6.6	5.3	完	黒～赤褐	黒～黒灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転糸切り、付高台のちナデ		36
58	〃	〃	13.8	6.35	5.5	(完)	黒～赤褐	黒～黒灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転糸切り、付高台のちナデ		37
59	〃	〃	14.4	6.4	5.8	(完)	暗茶褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文(摩滅)、底部回転糸切り、付高台のちナデ		113
60	〃	〃	14.9	6.2	6.0	(完)	赤褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転糸切り、付高台のちナデ		42
61	〃	〃	14.7	6.45	6.6	完	黒～赤褐	黒～灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転糸切り、付高台のちナデ	歪みあり	43
62	〃	〃	15.1	7.1	5.6	(1／2)	赤褐	黒～赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転糸切り、付高台のちナデ		44
63	〃	〃	14.8			1／4	暗茶褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文		101
64	〃	〃	13.95	7.0	4.9	(完)	黒～赤褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転糸切り、付高台のちナデ		41

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
65	黒色土器A	椀	14.6	6.8	5.9	一部欠	橙茶褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転糸切り、付高台のちナデ		112
66	〃	〃	13.6	6.8	(5.5)	(完)	茶褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転糸切り、付高台のちナデ		116
67	〃	〃	14.0	6.6	5.7	(一部欠)	橙茶褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転糸切り、付高台のちナデ		117
68	黒色土器B	〃	10.3	5.2	4.1	完	黒	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、体部外面ヘラミガキ、底部ヘラミガキ、付高台のちナデ		49
69	〃	〃		5.0		(1／2)	黒	黒	内面暗文(摩滅)、底部ヘラミガキ(摩滅)、付高台のちナデ		120
70	〃	〃				(一部残)	黒	黒	内面暗文(摩滅)、体部外面ヘラミガキ(摩滅)、底部ヘラミガキ、付高台のちナデ		121
71	〃	〃		5.8		(2／3)	黒	黒	内面暗文、体部外面ヘラミガキ、底部回転糸切りのちヘラミガキ、付高台のちナデ		114
72	土師器	小形甕		6.0		(完)	黒褐～赤褐	黒	ロクロナデ、胴部内面ヘラミガキ、胴部外面下端手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り、内面黒色処理		38
73	〃	〃	12.9	5.9	12.5	完	黒～黄褐	黒灰～黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、胴部外面下端手持ちヘラケズリ、内面板状工具によるロクロナデ、底部回転糸切り		82
74	灰釉陶器	輪花椀	10.0			1／3	白灰	緑白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	漬け掛け	27
75	〃	〃	11.95	5.5	3.35	1／2	黒灰～白灰	黒灰～白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け	26
76	〃	〃	9.6	5.0	4.5	完	白灰	白～緑白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	輪花4単位、漬け掛け	20
77	〃	〃	11.0	5.3	4.65	1／2	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け	12
78	〃	〃	12.4			1／3	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	漬け掛け	34
79	〃	〃	11.1	6.1	4.3	2／3	黒～灰	黒～灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、歪み大	29
80	〃	〃	11.6	5.6	4.0	(1／2)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内外面沈線、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け	25
81	〃	〃	14.4			1／3	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、		17
82	〃	〃	14.4	5.9	4.7	(完)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛けか？重ね焼き痕	18
83	〃	〃	11.9	5.2	4.5	(完)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け	10
84	〃	〃	11.4	5.05	4.3	完	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け	11
85	〃	〃	12.2	6.9	4.6	(1／2)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け	23
86	〃	椀	11.9	6.3	5.0	(完)	白灰	緑白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕、内面スス付着	19
87	〃	〃		8.2		(1／2)	灰～淡赤褐	灰～淡赤褐	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリのちナデか？付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	32
88	〃	〃	14.9			1／2	白灰	黄白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	漬け掛けか？内面スス付着	1
89	〃	〃	13.5	4.9		1／6	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	漬け掛け	30
90	〃	〃	14.6			1／3	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	33
91	〃	輪花椀	14.0	5.9	5.5	完	灰褐	灰褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、付高台のちナデ	漬け掛け	9
92	〃	椀	16.4	7.1	6.2	(完)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	7

No.	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
93	灰釉陶器	椀	16.0	7.4	6.2	完	白灰	淡緑白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	70
94	〃	〃	14.6	7.9	6.0	(完)	白灰～黄褐	白灰～黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部ロクロナデ、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	8
95	〃	〃	14.8	7.2	6.2	完	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	69
96	〃	〃	14.6	7.2	6.0	完	白灰～灰	白灰～灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	68
97	〃	〃	14.5	7.1	5.9	(完)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	3
98	〃	〃	15.0	7.2	5.7	完	白灰～灰	白灰～灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	77
99	〃	〃	14.3	7.3	7.7	完	白～灰褐	白灰～淡黄	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け	75
100	〃	〃	14.8	6.7	6.5	完	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	74
101	〃	〃	15.0	6.5	7.2	(完)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	5
102	〃	〃	16.0	7.1	7.0	完	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	71
103	〃	〃	14.7	7.2	6.5	(完)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け	6
104	〃	〃	14.8	7.1	6.5	完	黒灰～白灰	黒灰～白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	67
105	〃	輪花椀	16.0	7.9	6.0	完	白灰～灰	淡緑灰～灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	輪花4単位、漬け掛け、重ね焼き痕	72
106	〃	椀	15.7	7.5	6.1	完	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	78
107	〃	〃	14.7	6.8	6.8	(1／2)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け	2
108	〃	〃	16.2	8.5	6.3	完	白灰	白灰～灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕、歪みあり	76
109	〃	輪花椀	15.4	7.4	7.4	完	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	4
110	〃	〃	16.0	7.3	7.0	完	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリのちナデ、付高台のちナデ	輪花5単位、漬け掛け	73
111	〃	鉢皿	10.8			1／16	白灰	緑白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、	漬け掛け	15
112	〃	皿	11.5	6.5	2.5	(完)	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	重ね焼き痕	28
113	〃	輪花段皿	11.2			1／8	黒灰～白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、	漬け掛け	16
114	〃	段皿	15.4	6.8	2.6	完	黄白灰～白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	22
115	〃	〃	14.3			1／8	黄白灰	黄白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、	漬け掛け	13
116	〃	輪花皿	11.4	5.8	2.7	1／3	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け	24
117	〃	段皿	14.8			1／8	緑白灰	緑白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、		14
118	〃	皿	12.3	6.9	3.2	(1／3)	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	31
119	〃	耳皿	11.95	5.0	4.3	完	白灰	緑白灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		35
120	緑釉陶器	椀	11.2			一部残	暗緑	暗緑	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、		124

No.	種別	器形	寸法(cm)			残存度 口縁(底部)	色調		成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
			口径	底径	器高		外面	内面			
121	緑釉陶器	輪花椀	14.8			1／5	暗緑	暗緑	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		125
122	〃	〃	14.4	6.4	6.2	(3／4)	暗緑	暗緑	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	輪花5単位か？内面トチン痕	123
123	〃	〃	15.8	6.7	7.6	(完)	暗緑	暗緑	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部ロクロナデ、付高台のちナデ	内面トチン痕	130
124	〃	輪花段皿	12.2			1／5	暗緑	暗緑	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		126
125	〃	〃	11.6	5.6	3.4	1／2	暗緑	暗緑	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	内面トチン痕	128
126	〃	〃	12.2	6.1	3.1	完	暗緑	暗緑	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部ロクロナデ、付高台のちナデ	内面トチン痕	129
127	〃	耳皿	(11.35)	4.8	4.6	(一部欠)	暗緑	暗緑	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	高台内面トチン痕か？	127
128	灰釉陶器	鉢 or 盤	29.8			1／8	淡緑白灰	淡緑白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部下半回転ヘラケズリ	重ね焼き痕	79
129	須恵器	長頸瓶		8.1		(完)	黒灰	黒灰	ロクロナデ、胴部下端回転ヘラケズリ	外面自然釉付着	81
130	〃	四耳壺	15.0			3／4	暗灰～灰	暗灰～灰	胴部外面タタキ目、口縁ヨコナデ、内面当て具痕	内面輪積痕	131
131	灰釉陶器	長頸瓶	6.4			1／3	黒灰～白灰	黒灰～白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		21
132	〃	広口瓶	17.3			1／2	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		80
133	〃	〃		19.6		(1／2)	灰	灰	ロクロナデ、胴部外面回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	内外面付着物(鉄分か？)	134
134	〃	〃	21.8	17.5	39.5	1／2	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、胴部外面及び底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		135
135	〃	〃		15.8		(完)	灰	灰	ロクロナデ、胴部外面回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		133

第9号住居址土器観察表

No.	種別	器形	寸法(cm)			残存度 口縁(底部)	色調		成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
			口径	底径	器高		外面	内面			
136	土師器	杯AII	9.0	5.7	2.2	3／4	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		23
137	〃	〃	10.2	3.9	2.1	1／3	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		80
138	〃	〃	10.5	4.4	2.3	完	暗～橙褐	暗～橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		8
139	〃	〃	10.0	4.0	2.1	(1／2)	赤橙褐	赤橙～黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		81
140	〃	〃	10.2	4.0	2.3	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		79
141	〃	〃	9.6	3.4	2.5	1／4	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		87
142	〃	〃	9.6	3.4	2.5	1／3	黄褐	黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		98
143	〃	〃	10.4	4.4	2.4	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		102
144	〃	〃	10.2	4.55	2.5	完	暗橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		7
145	〃	〃	10.0	4.1	2.3	完	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		20
146	〃	〃	10.05	4.9	2.5	完	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		10
147	〃	〃	10.4	4.6	2.4	(1／3)	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		82
148	〃	〃	10.5	5.15	2.3	完	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	調整雑、歪み大	12

No.	種別	器形	寸法(cm)			残存度	色調		成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
			口径	底径	器高	口(底部)	外面	内面			
149	土師器	坏AII	10.2	4.6	2.45	完	暗～橙褐	暗～橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	口縁歪み有り	17
150	〃	〃	11.0	4.6	2.4	(完)	黄褐	黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		100
151	〃	〃	10.3	4.2	2.45	完	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み大	9
152	〃	〃	10.7	4.45	2.4	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み大	6
153	〃	〃	10.4	4.8	2.55	(1／2)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		104
154	〃	〃	10.8	4.2	2.6	(3／4)	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		45
155	〃	〃	10.75	4.3	2.45	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み有り	19
156	〃	〃	10.1	4.2	2.5	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み大	21
157	〃	〃	10.6	4.0	2.6	1／2	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	やや歪み有り	103
158	〃	〃	10.1	4.0	2.65	(完)	明橙褐	明橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み有り	2
159	〃	〃	10.2	4.2	2.7	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		4
160	〃	〃	10.4	4.8	2.6	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み有り	16
161	〃	〃	10.65	4.55	2.7	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み大	11
162	〃	〃	11.1	4.4	2.65	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み有り	5
163	〃	〃	10.6	4.2	2.8	(1／2)	黄褐	黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		99
164	〃	〃	10.8	4.4	2.75	1／4	赤橙褐	赤橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		84
165	〃	坏AI	11.2	4.8	2.7	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	外面調整雑	48
166	〃	坏AII	10.6	4.4	3.1	(完)	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		73
167	〃	〃	10.8	4.3	3.05	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み有り	18
168	〃	〃	11.2	4.25	3.2	(完)	明橙褐	明橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み有り	3
169	〃	〃	11.0	4.8	3.2	(完)	橙茶褐	橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	口縁歪み有り	74
170	〃	〃	10.8	3.5	3.45	(一部欠)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	口縁歪み有り	13
171	〃	坏AI	12.6			1／4	暗赤褐	黒～暗赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		97
172	〃	〃	14.2			1／3	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		77
173	〃	〃	14.0			1／4	暗～黄褐	黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		47
174	〃	〃	14.2			1／4	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		46
175	〃	〃	14.75	6.1	3.95	(完)	暗黄褐	暗黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		53
176	〃	〃	14.3	6.4	3.8	(完)	暗橙褐	暗橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		54
177	〃	〃		4.8		(3／4)	暗褐	暗褐	ロクロナデ、底部回転糸切り		83
178	〃	〃	14.0	6.0	4.3	(3／4)	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		93
179	〃	〃	14.95	5.6	4.2	(完)	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	内面摩滅	58
180	〃	〃	14.6			1／2	暗褐	黒～暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	口縁にタール状付着物	44
181	〃	〃	16.2	5.7	3.9	(完)	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	口縁歪み有り	89

No.	種別	器形	寸法(cm)			残存度	色調		成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
			口縁	底径	器高	口縁(底部)	外面	内面			
182	土師器	杯AI	16.45	6.3	3.7	(完)	黒～褐	黒～褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		59
183	〃	〃	14.7	5.8	3.9	(完)	暗～橙褐	暗～橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み大	49
184	〃	〃	14.4	6.2	4.05	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	口縁一部タール状付着物	55
185	〃	〃	15.4	5.4	3.5	(完)	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み有り	94
186	〃	〃	14.2	6.4	3.5	(1／5)	暗橙褐	暗橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		40
187	〃	〃	14.4			3／4	黒～暗赤褐	黒～暗赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	内面スス付着	95
188	〃	〃	15.0	5.8	5.0	(完)	暗黄褐	暗黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		96
189	〃	〃	14.9	5.25	4.1	一部欠	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	隋円に歪む	25
190	〃	椀	9.8	5.2	3.0	(完)	暗黄褐	暗黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、付高台のちナデ	黒色処理なし	50
191	〃	〃	12.3	3.5	4.05	(完)	褐	黒～褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	タール状付着物有り	57
192	〃	〃	14.0	6.8	3.85	(一部欠)	暗～橙褐	暗～橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	歪み大	22
193	〃	〃	16.3	8.15	6.0	3／4	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		88
194	〃	杯AI	15.8	6.6	4.7	3／4	暗橙褐	暗橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		91
195	黒色土器A	椀	14.6			1／6	黒～暗褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ヘラミガキ		78
196	〃	〃	14.4	7.0	6.2	(1／2)	暗褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ヘラミガキ(摩滅)、底部回転糸切り、付高台のちナデ		76
197	土師器	皿AII	11.7	5.85	2.3	(完)	明橙褐	明橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	口縁歪み有り	24
198	〃	〃	12.0	5.6	2.3	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、付高台のちナデ		90
199	〃	〃	9.8	3.8	1.4	1／4	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		41
200	〃	〃	9.65	3.9	1.65	(完)	淡褐	淡褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		51
201	〃	〃	10.0	4.6	1.1	(1／4)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		43
202	〃	〃	10.0	3.8	1.7	(完)	淡褐	淡褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	底部調整雑	52
203	〃	〃	10.2	4.45	1.7	(3／4)	明橙褐	明橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み有り	1
204	〃	〃	11.4	4.6	1.1	1／4	橙褐	赤橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、口縁内面1条の沈線、底部回転糸切り		42
205	〃	〃	10.2	4.0	1.8	(1／2)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、口縁内面1条の沈線、底部回転糸切り		101
206	〃	〃	12.3	5.1	2.1	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み大	14
207	〃	〃	10.4	3.9	1.8	完	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	歪み大	15
208	〃	皿AI	15.7	4.2	3.6	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		75
209	〃	〃	15.2	4.6	3.7	1／6	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		86
210	〃	〃	18.3	6.0	3.4	(完)	橙茶褐	橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		72
211	〃	〃	15.7	5.6	4.15	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	口縁歪み有り	92
212	〃	羽釜	16.2			1／8	黒～暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、外面ハケ目、内面板状工具によるナデ、鍔部貼り付けのちナデ		85
213	〃	小型甕	13.8	7.2	14.3	(完)	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、胴部下半手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り		56
214	緑釉陶器	椀				(一部残)	暗緑	暗緑	ロクロナデ、底部回転糸切りのちナデ、付高台のちナデ	内底面トチン痕有り	70

No	種別	器形	寸法(cm)			残存度 口縁	色調		成形・調整・形態の特徴	備考	実測No
			口径	底径	器高	(底部)	外面	内面			
215	灰釉陶器	輪花椀	10.6	5.15	3.7	(完)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	重ね焼き痕	65
216	〃	椀	14.7			1／4	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリか?	漬け掛け	27
217	〃	輪花椀	17.7			1／8	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	漬け掛け、炭化物か漆付着	36
218	〃	椀	14.0			1／6	淡灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	漬け掛け、口縁歪み有り	29
219	〃	〃		8.1		(1／3)	白灰	白灰	ロクロナデ、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	32
220	〃	〃	15.6			3／4	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	漬け掛け、口縁歪み有り	26
221	〃	〃	14.4	7.4	5.8	(完)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、口縁歪み大	63
222	〃	〃	14.8	7.55	6.0	(完)	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	漬け掛け	64
223	〃	〃	16.2	7.3	6.3	(完)	淡橙灰	淡橙灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け	61
224	〃	〃	15.2	6.6	6.3	(完)	淡橙灰	淡橙灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、口縁歪み有り	62
225	緑釉陶器	〃		5.2		(一部欠)	暗緑	暗緑	ロクロナデ、底部回転糸切りのちナデ、付高台のちナデ	底面トチン痕有り	68
226	〃	〃		5.2		(1／2)	濃暗緑	濃暗緑	ロクロナデ、底部回転糸切りのちナデ、付高台のちナデ	底面トチン痕有り	69
227	〃	〃		4.4		(1／4)	暗緑	暗緑	ロクロナデ、付高台のちナデ		67
228	〃	輪花段皿	10.4			一部残	暗緑	暗緑	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		66
229	灰釉陶器	段皿	10.4	5.3	2.2	2／3	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	31
230	〃	〃	10.5	5.7	2.4	(完)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	漬け掛け、重ね焼き痕	30
231	〃	輪花皿	10.6			1／4	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	漬け掛け	37
232	〃	鉢or盤	27.8			1／12	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		28
233	〃	広口瓶	23.7			1／5	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		38
234	〃	〃					白灰	淡灰	ロクロナデ		39
235	〃	瓶		9.8		(1／5)	灰	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	内外面一部炭化物付着	33
236	須恵器	甕		12.05		(1／5)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、胴部外面下端回転ヘラケズリ、底部ナデ		34

2　金属製品（第36・37図）

①第４号住居址の金属製品（１～33）

総計35点の鉄製品が出土し、このうち33点を図示することができた。他に鉄滓が出土している。

鏃（１～８）　９点が出土し、８点を図示している。いずれも短頸式で、鏃身部の形状から２種類に区分できる。１～３は長三角形鏃である。１は全長15.3 cm の完形品である。鏃身部長5.4 cm、幅1.9 cm で刃部は両丸である。逆刺はなく、鏃身部から篦被部にかけて関は120°の鈍角をなしている。関篦被は長2.8 cm ある。茎部は7.2 cm あり、矢柄の木質部を良く残している。また、最上部では矢柄と茎部を固定するために巻いた帯状の植物質が認められる。２は現存長14.2 cm、茎部の先端をわずかに欠いている。鏃身部長は6.5 cm、幅2.0 cm で、刃部は両丸である。篦被から茎部の形状は１と同じであるが、篦被部長が2.0 cm でやや短い。３は鏃身部である。両端を欠くが、現存長6.9 cm、最大幅1.9 cm で、両丸の刃部が認められる。

５～８は雁又鏃である。いずれも刃部が長い大型品である。５は刃部長8.8 cm で、刃部間の最大幅7.9 cm である。刃部は内湾しながら立ち上がり、先端付近で外湾する。基部から篦被部はしだいに幅を狭めていくが、関篦被の部分で再び幅広になる。篦被部は長2.2 cm である。茎部は先端を欠いていて、現存長4.5 cm である。６は刃部の先端を欠いているが、刃部長8.5 cm である。刃部は内湾しながら立ち上がっている。篦被部と茎部の形状は５と同様で、篦被部長2.3 cm、茎部現存長5.4 cm が認められる。また、茎部には矢柄の木質部が良く残っていて、さらにその一部では黒漆を塗布した痕跡が認められる（漆付着部分はスクリーントーンで表示）。７は片側の刃部先端と茎部の一部を欠いているが、刃部長7.3 cm、篦被部長2.5 cm、茎部現存長5.2 cm である。刃部は直線的に立ち上がり、先端付近で外湾している。また、矢柄の木質部、黒漆が部分的に認められる。８は雁又鏃の刃部、基部、茎部の破片である。同じ場所から出土したもので、同一個体と考えられる。

４は篦被から茎部にかけての破損品である。篦被の上部断面が、上記の２種類の鏃に比べて幅狭まで、厚みのある点が異なっている。他に、茎部の破損品１点が出土している。

刀子（９）　全長16.4 cm（身部長9.8 cm、茎部長6.6 cm）の完形品。身部は棟側・刃側から徐々に幅を減じながら、鋭利な先端を構成している。刃部最大幅1.9 cm、同厚さ0.5 cm である。

鉇（10）　端部をわずかに欠くだけの、残存長25.0 cm のほぼ完形品である。刃部は長6.1 cm、最大幅1.5 cm で、研ぎ出しによる鎬が認められる。刃部の裏面はやや内湾している。茎部は刃部から徐々に幅と厚さを減じていくが、下端寄りで段をなしてさらに薄くなる部分がある。着柄に関わる部分と考えられる。

鎌（11～13）　３点が出土している。11は大型の完形品である。基部は柄を固定するための折り返し部から徐々に幅を広くしながら、刃部へと移行する。刃部断面はわずかに片刃状を呈する。刃部最大幅は4.0 cm である。12は先端と基部をわずかに破損している、小型の鎌である。基部から刃部への形状は11と同様である。刃部最大幅は2.7 cm である。なお、刃部周辺は炭化した植物質の破

片が付着しているのが認められる。13は基部の破片である。折り返し部や幅から、大型の鎌に属するものと考えられる。

苧引鉄（14）　現存長9.0 cm、最大幅3.9 cm で、片側の突起部をわずかに破損している。刃部は最大幅1.5 cm で、鋭利さに欠けている。刃部の一部に炭化植物の付着が認められる。

紡錘車（15～17）　3点が出土している。いずれも軸部の両端を破損している。15は輪部の推定径4.5 cm、軸の孔径4.5 mm、残存長11.2 cm である。16は輪部の径4.9 cm、軸の孔径5.5 mm、残存長14.3 cm である。15・16の輪部が偏平な円盤状を呈するのに対し、17は輪部の径5.4 cm で、上面の軸孔の周囲が凸状に厚さを増す形状を呈している。軸の孔径6.8 mm、残存長15.7 cm で、他に接合しないが同一個体の軸部9.6 cm が認められる。

帯金具（18～20）　3点が出土している。いずれもT字形の刺金をもつ長方形の銙具で、構造的に同じものである。18・19はまとまって出土したもので、大きさもほぼ同じである。18は長6.0 cm、幅3.6 cm、厚さ1.0 cm。19は長5.7 cm、幅3.7 cm、厚さ0.9 cm である。側面は刺金の横軸をはめ込む部分から先端へ向けて幅を減じている。18は長側辺が先端寄りでわずかに内湾する形態をとる。20は長6.5 cm、幅4.5 cm、厚さ0.9 cm で、18・19よりもひとまわり大きい。

釘（21～28）　9点が出土し、8点を図示している。21～24は2寸前後の釘で、すべて先端を破損している。頭部は叩き延ばした端部を90°前後に折り曲げたもの（21・23・24）と丸く折り曲げたもの（22）がある。21は（現存長）2.6×（最大幅）0.6×（最大厚）0.4 cm。22は6.2×0.8×0.5 cm、23は5.1×0.8×0.4 cm、24は4.0×0.6×0.8 cm。25は2.5寸前後の釘で、5.8×0.9×0.6 cm。先端を破損している。頭部は叩き延ばされた端部を折り曲げたものである。26・27は3寸前後の釘である。26は9.0×0.9×0.7 cm の完形品である。27は6.0×0.9×0.7 cm で、先端を破損している。頭部はいずれも叩き延ばした端部を90°前後に曲げたものである。28は4.0×0.6×0.4 cm で、頭部を破損している。

不明鉄器（29～33）　器種不明の鉄製品が5点出土している。29は大型の釘（8.4×1.3×1.0 cm）の可能性があるが、明瞭な頭部は認められない。先端を破損している。30は断面が長方形の棒状を呈するもので、上方で折れ曲がっている。破片が2つあり、両端を破損しているが、同一個体と考えられる。31は断面が円形の棒状を呈し、直角に折れ曲がっている。現存長4.5 cm、直径0.4 cm である。32は楔の可能性がある。頭部は斜めに叩かれており、縦断面はV字状を呈す。4.8×2.4×1.5 cm の完形品である。33は環状（長径4.1×短径3.2 cm、厚さ0.7 cm）を呈するものである。

鉄滓　14点（総重量814.37 g）出土している。椀形滓1点を除いて、すべて不定形な塊状を呈している。最大長3.2～7.9 cm、重量15.34～135.90 g で、鉄滓の大きさには大小が認められる。

②第9号住居址の金属製品（34～40）

総計10点が出土し、7点を図化している。他に、鉄滓・鞴の羽口が出土している。

鏃（34）　2点が出土している。34は茎部で、両端が破損している。現存長5.9 cm、最大幅0.9 cm

である。他に、茎部の先端の小破片１点が出土している。

鏃（35）　U字形の鏃先である。端部をわずかに欠くだけで、ほぼ完形品である。全長21.0 cm、最大幅16.7 cm、刃部幅12.1 cm である。木部をはめ込む部分はY字状を呈している。刃部は最大高7.6 cm、厚さ4 mm で、端部はやや片側に反っている。他に、図示できないが別個体の小破片１点がある。

毛抜き型鉄器（36）　逆U字形を呈するピンセット状の鉄製品である(1)。全長8.2 cm、最大幅1.1 cm、厚さ0.5 cm の完形品である。脚部は断面が台形状を呈し、先端でわずかに内側に曲がっている。

釘（37）　２点が出土している。37は不規則なねじれが認められるが、完形品である。断面は長方形を呈する。頭部はコ字状に折り曲げられている。先端部は幅が先細にならずに厚さだけが減じているため、釘でない可能性もある。全長12.2 cm、最大幅0.6 cm、厚さ0.5 cm である。他に両端を欠いた小破片１点がある。

不明鉄器（38）　38は楔の可能性がある。頭部は斜めに叩かれているが、偏平な直方体を呈する。縦断面はU字状を呈し、先鋭ではない。全長3.8 cm、幅2.3 cm、厚さ1.0 cm の完形品である。

鉄滓　４点(総重量860.11 g)出土している。すべて不定形な塊状を呈している。最大長3.8～10.1 cm、重量25.19～319.31 g と大きさには大小が認められる。なお、住居址内からは他に鞴の羽口の破片１点が出土している。

銅碗（39・40）　口縁部付近の破片が２個体分出土している。39は推定径17.2 cm、残存高3.4 cm である。口縁端部は内側で肥厚しているため、内面に稜線１本が認められる。40は口径が推定できないが、残存高1.4 cm が認められる。口縁部内側の肥厚部が39よりも幅広であり、薄い。

③まとめ

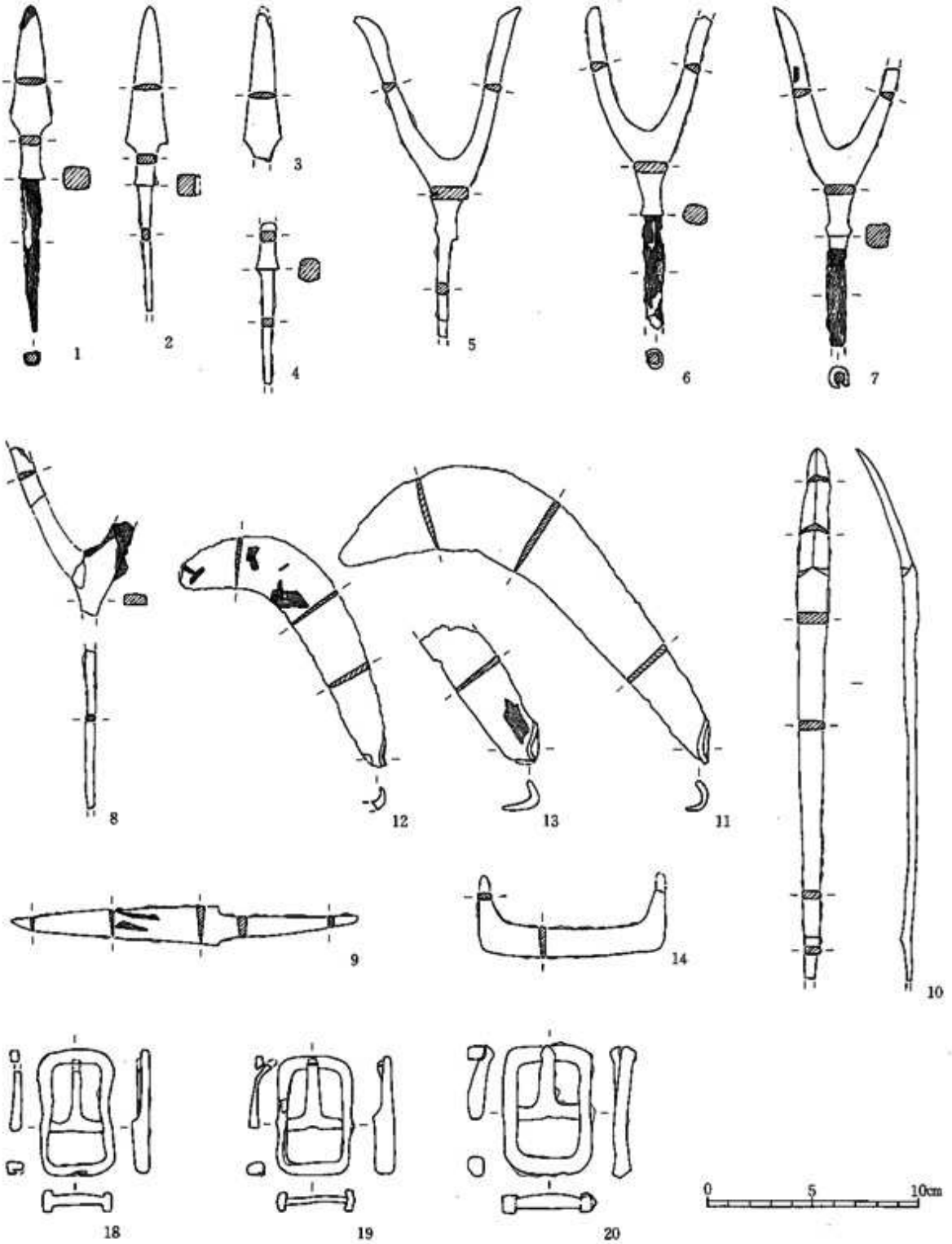
第４・９号住居址から出土した多種多様な金属製品は武器（鏃）、工具（刀子・鉇・釘）、農具（鍬・鎌・苧引鉄・紡錘車）・その他（帯金具・毛抜き型鉄器・銅碗等）に大別できる。特に、４住（焼失住居）の金属製品は１軒の住居が保有していた（あるいは保有できた）道具の組成をある程度反映していると考えられるものである(2)。松本平では時期が若干遡るが、同様な金属製品出土例として、内田原遺跡・第１号住居址（塩尻市）(3)がある。内田原例も焼失住居からの出土で、鏃・刀子・紡錘車・苧引鉄・帯金具・馬具・砥石が出土している。なお、このうち帯金具は馬具の可能性があり、４住出土の同形式の帯金具も馬具の可能性があることを付記しておく。

松本平のわずか２例の焼失住居の出土例ではあるが、平安時代後期の竪穴住居内で武器（鏃）と農具が共伴している点、複数の紡錘車（４住―３本、内田原１住―５本）と苧引鉄が出土している点が共通する。こうした金属製品の保有は該期の一般的なあり方だったのだろうか。竪穴住居の居住者の性格や生業に関わる問題でもあり、資料の増加を期待して今後の検討課題としておきたい。

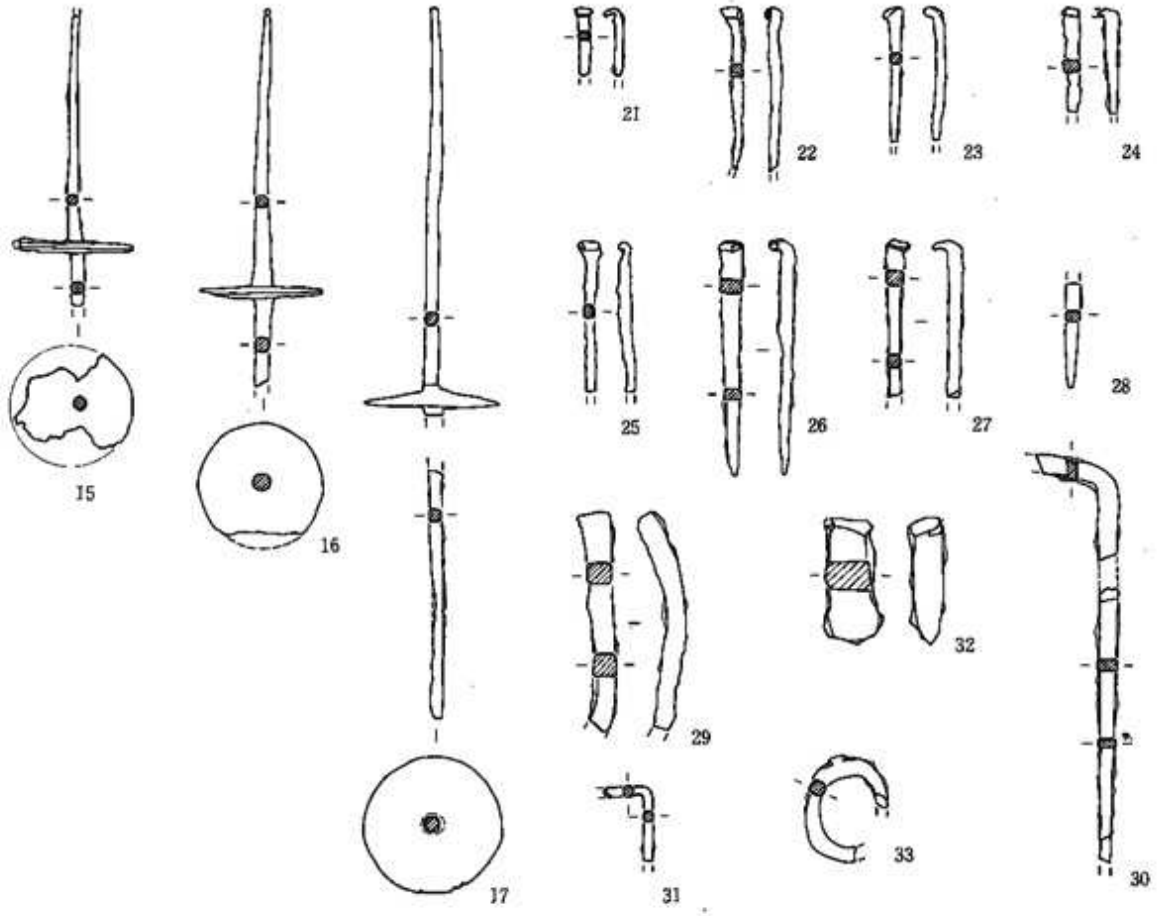
註１　「毛抜き型鉄器」の名称は、吉田川西遺跡（塩尻市）の報告書に従った。
財長野県埋蔵文化財センター　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３　吉田川西遺跡』1989

２　第４・９号住居址からは鉄滓・羽口などの鍛冶関係の遺物も出土しているので、鉄製品の生産に関わっていた住居址の可能性もある。その場合は、後述する内田原遺跡例と同一には論じられない。

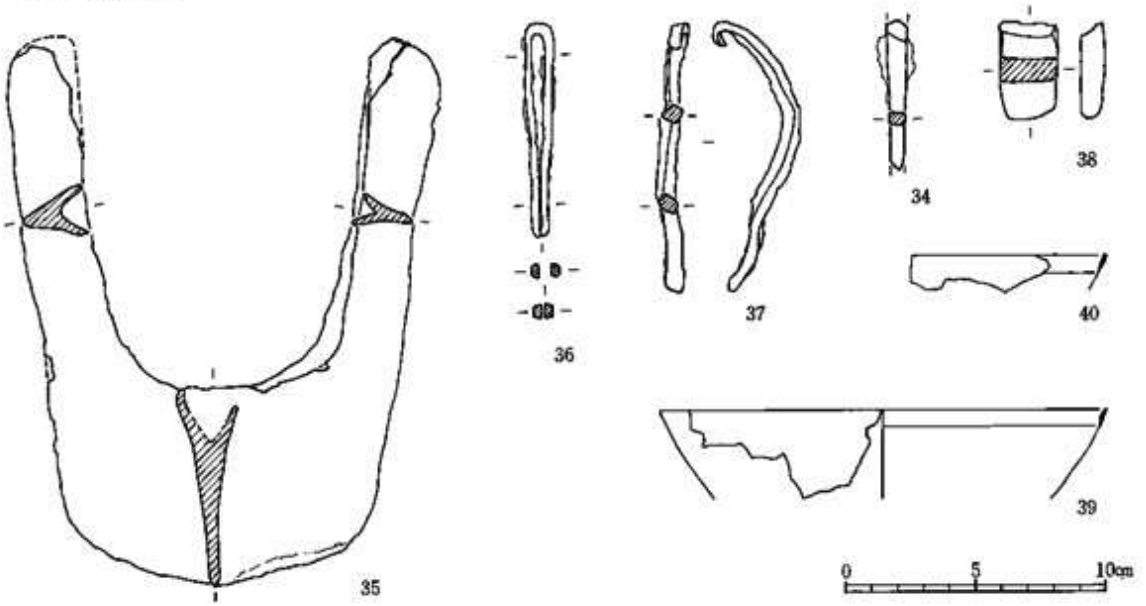
３　原嘉藤・山田瑞雄　「長野県塩尻市内田原遺跡調査概報」　『信濃』第21巻第６号　1969



第36図　金属製品実測図(1)



第９号住居址



第37図　金属製品実測図(2)

第4章　調査のまとめ

1　集落の変遷とその背景

堀の内遺跡における各時期の遺構の変遷（集落の変遷）とその背景について、まず考えたい。今回調査では、縄文時代中期初頭・弥生時代後期・古墳時代前期・同中期・同後期・平安時代の住居址が発見されたのだが、第38～40図にその分布の変遷を示す。黒塗りが当該時期の遺構、網かけの部分は当該時期の住居分布の推定範囲で、各調査地区の発掘内容と、本調査の前段に広範囲におこなったトレンチによる確認調査の結果から想定した。

これらの図から見ると、縄文～古墳時代までと平安時代で分布の傾向に大きな違いが表れる。即ち調査地区のA・B地区とC～F地区をほぼ東西に隔てる大堰付近を境界にして、東側が縄文～古墳時代、西側が平安時代となっている。ただし西端のD地区に古墳時代前期とみられる方形周溝墓が1基発見されており(1)、その周辺が同期の墓域となっていた可能性は充分に考えられる。それにしても、これだけ厳然と住居の分布域が分かれるということは、単なる偶然ではなく、当時の自然環境や生産活動が深く影響するはずであろう。

考えられる第一の原因は、今回の調査地内で何本も観察できた溝（流路：河床礫層）の存在である。これらはほとんどが古墳時代までの遺構を破壊し、平安時代の遺構に切られるという状況を呈した。中には奈良時代の土器を出土した溝（溝701）もあり、その時期がこれらの流路の活動の最盛期であって、遺跡一帯に大きく広がっていたのだろう。それ以外の各時期にも規模の小さな流路が存在し、その位置が集落の分布域をある程度、規定していた可能性がある。また、C地区以西では下層に古墳時代末～奈良時代の河床礫層が大きく広がって、A・B地区に比べてかなり水はけの良い土地となっていたので、平安時代の居住地に選ばれたのかもしれない。

次に生産地との関連についてである。A地区の北～北東を流れる追倉沢の対岸の一帯は現状では山際まで湿田地帯となり、山田・藤井遺跡の調査によって1～2mの粘質土層の形成が認められた。弥生～古墳時代の集落がこの湿田地帯を生産地として立地したことは想像に難くない。この生産地の周縁部が該期集落の分布域と捉えることができよう。ところが平安時代になると、A・B地区に全く遺構が検出されなくなるのは、集落は西に移り、先の湿田地帯の周縁部であった両地区一帯まで生産地の範囲に含まれてしまったのではないか。あるいは、松本市域においては古墳時代の末期から奈良時代にかけて、大規模な導水や河川管理の組織的な対応が飛躍的に発達し、新しい集落が次々に生れるという歴史的な背景(2)を踏まえると、本遺跡の平安時代集落も、既に追倉沢の北の湿田地帯にのみ全面的に依拠してはいなかったのかもしれない。その点では、遺跡の北部から西部にかけては注目して良いと考える。

2　時代の画期

時代の大きな画期は、縄文と弥生、古墳と平安の各時代間に認めてよい。弥生時代後期から古墳時代後期にかけては、厳密に見るといくつかの断絶はあるものの、同一立地条件、背景の下に集落は継続したという理解で間違いはないと考える。即ち前段で述べたとおり、遺跡北東部の湿田地帯に生産地を求めていたということである。

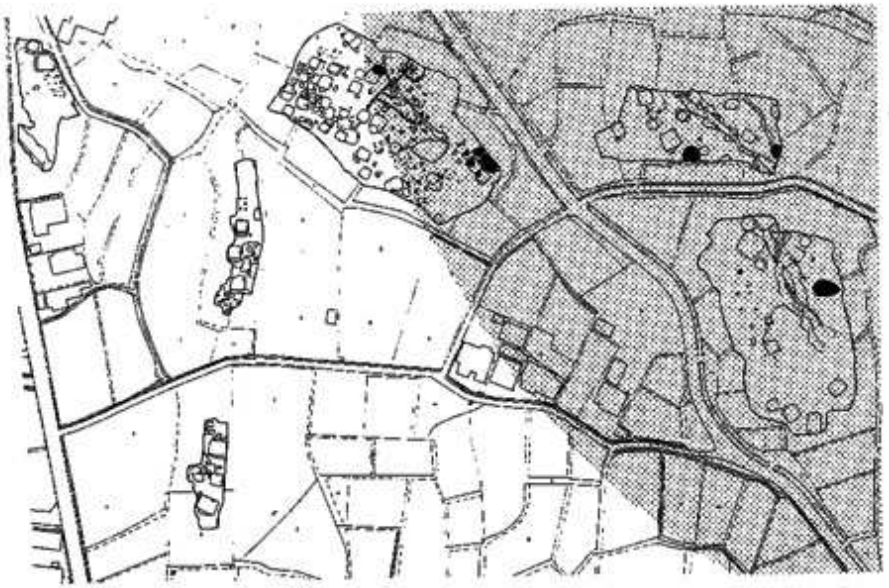
弥生時代中期後半に薄川扇状地扇端部の湧水帯周辺にまとまっていた集落は[3]、後期後半に至って各地の小湿地性地帯の周縁に進出を開始し、本遺跡でも縄文時代中期初頭以降、途絶えていた集落を形成した。この集落が、湿田地帯周縁部という大きな領域の中で、時期により中心部を移動させながら古墳時代後期まで持続したとみたい。

平安時代の集落は、古墳時代後期までのそれとの直接的な系譜性を認めることは難しい。占地範囲の厳然たる違いは、先述のように、おそらく流路や生産地との関係で起こったのであり、むしろ弥生以来の集落は一旦途絶え、新たに平安集落が営まれたと考えた方が、7～8世紀という200年間の断絶は説明がつく。では、本遺跡に再び平安集落が成立した理由と背景は何であろう。ひとつの要因は、前段でも若干触れたが、松本市域レベルでの開発の盛行が挙げられよう。これが9世紀代の開発の再開につながっている。また、本遺跡が含まれる里山辺や東山麓地帯の当時の政治的動向は、触れるには研究段階が尚早だが、当然その動きの中にも関連性があろう。

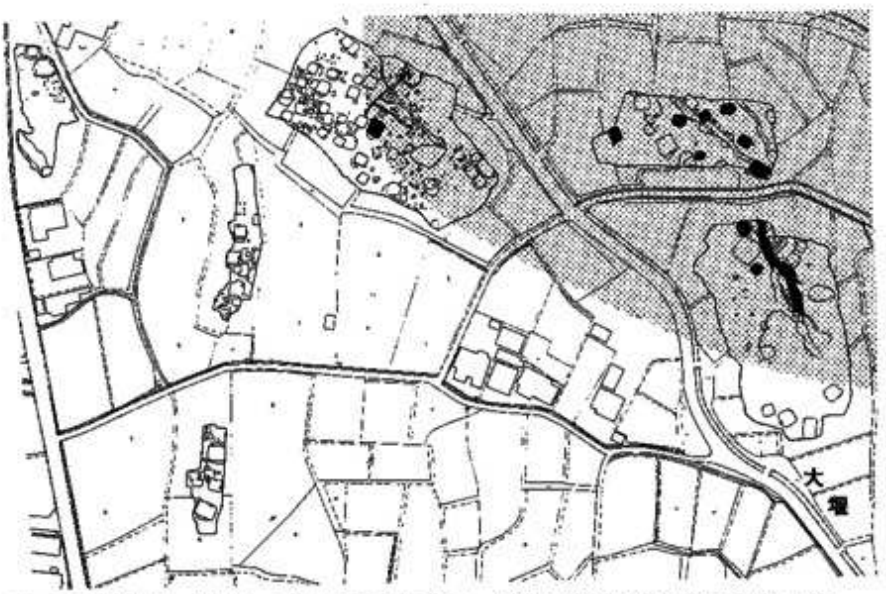
一方、本書で詳述した第4・9号住居址のような11世紀後半という平安時代も後期の、しかも大形で大量の遺物を出土した遺構の存在は、9世紀代の集落の成立とはまた違う意味を持つ。この時期の集落の検出例は以外と少なく、その点で第4・9号住居址の発見は、該期集落の核的な部分に肉薄したと評価できよう。当地域において、10世紀代を通して奈良時代・平安時代前期から継続する集落が、一部を除いて解体・再編されるという見解[4]は支持できるが、本遺跡の平安時代後期の集落が再編されたものか継続していたかについては、もう少し詳細な分析と検討を経なければわからない。

縄文時代中期初頭に関しては、近年、里山辺地区でも発見が相次いだ[5]。いずれも住居が多数密集して大集落を形成するのではなく、点在する数軒以内の住居と土坑という構成をとる点が共通しているが、これは里山辺に限らず、全県的に同じ傾向にある。ただし、松本市域では縄文時代中期中葉あるいは後葉といった、いかにも縄文時代を代表する時期の遺跡より、むしろ本時期の方が遺跡が多い[6]。この現象の要因についての納得できる定見はなく、今後の課題であろう。

註1　方形周溝墓は薄川水系においては初の発見である。
2　市内の島立・岡田・笹賀などの地区で、この状況は顕著である。
3　県町遺跡・元屋敷遺跡などを想定する。
4　原明芳1989「吉田川西遺跡の歴史的特質」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3　―塩尻市内その2―」
5　林山腰（1987年調査）、石上（1989年調査）等。
6　主な遺跡は、白神楊（寿）・木下（寿）・向畑（中山）・岡田西裏（岡田：未報告）。



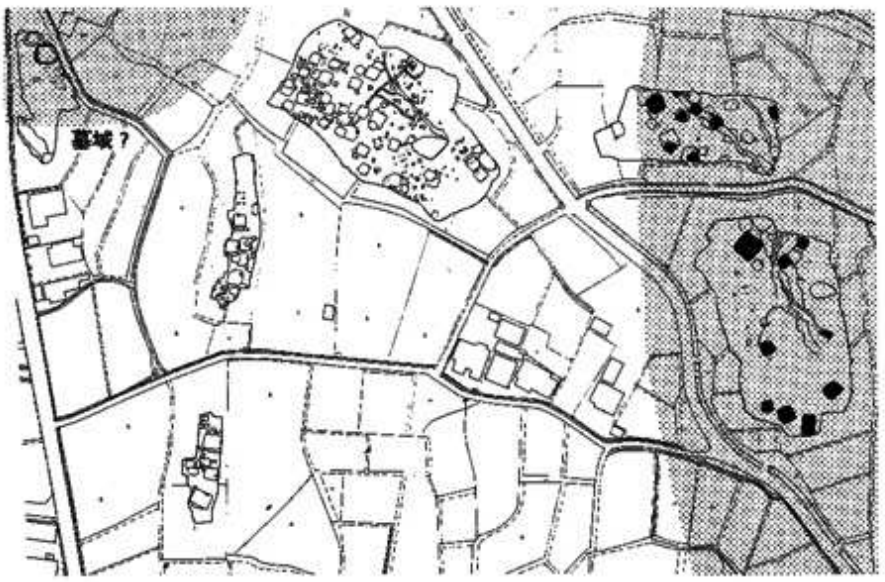
縄文時代中期初頭　点在する住居址と土坑、集石からなり、大堰の両側に広がる。



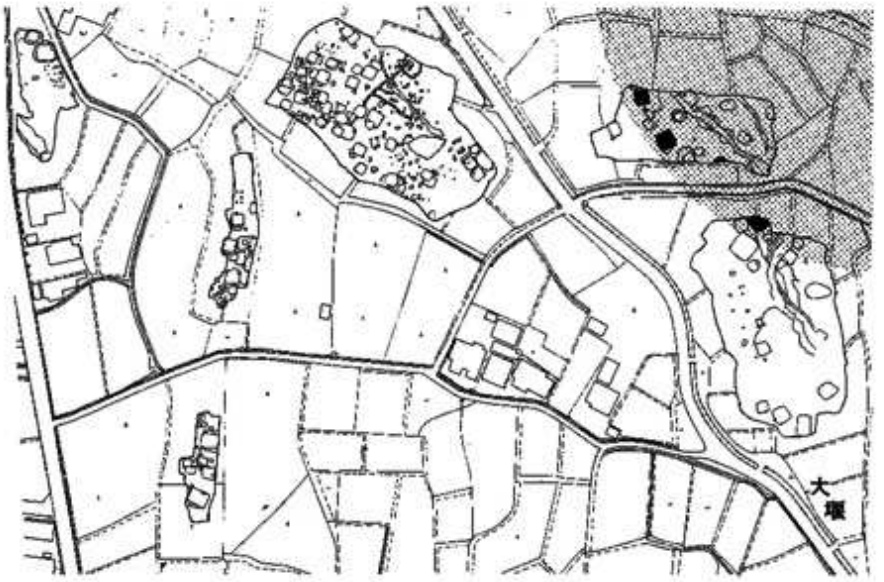
弥生時代後期　集落中心は大堰の東に移る。遺物を伴う溝601がB地区を北流。

0　50m

第38図　集落の変遷（縄文・弥生）



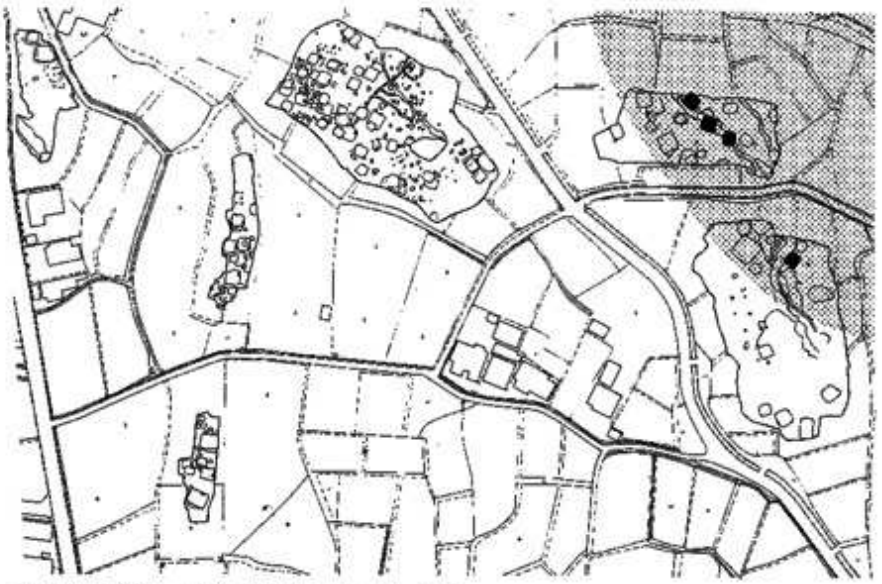
古墳時代前期　完全に大堰の東に移る。大形住居（83住）を中心に展開。西端D地区に方形周溝墓があり、付近に墓域を形成するか？



古墳時代中期　集落の中心はさらに東へ移ったらしく、軒数が減る。

0　50m

第39図　集落の変遷（古墳前・中期）



古墳時代後期　前代（中期）と同様の傾向。

平安時代　大堰の東側から全く遺構が消える。A・B地区の溝は奈良時代の流路。

0　50m

第40図　集落の変遷（古墳後期・平安）

表 9　住居址番号新旧对比表

地区	旧番号	新番号
A	1	95
	2	96
	3	97
	4	98
	5	99
	6	100
	7	101
	8	102
	9	103
	10	104
	11	105
	12	106
	13	107
	14	108
	15	109
	16	110
	17	111
	18	112
	19	113
	20	114
	21	115
	22	116
	23	117
	24	欠　番
	25	欠　番
	26	118
	27	119
B	1	81
	2	82
	3	83
	4	84
	5	85
	6	86
	7	欠　番
	8	87
	9	88
	10	89
	11	90
	12	91
	13	92
	14	93
	15	94
C	1	31
	2	32
	3	33
	4	欠　番

地区	旧番号	新番号
C	5	34
	6	35
	7	36
	8	37
	9	38
	10	欠　番
	11	欠　番
	12	40
	13	41
	14	欠　番
	15	42
	16	欠　番
	17	43
	18	44
	19	45
	20	欠　番
	21	欠　番
	22	48
	23	49
	24	欠　番
	25	51
	26	52
	27	53
	28	欠　番
	29	54
	30	欠　番
	31	56
	32	57
	33	58
	34	59
	35	60
	36	欠　番
	37	欠　番
	38	欠　番
	39	欠　番
	40	63
	41	欠　番
	42	欠　番
	43	65
	44	欠　番
	45	66
	46	67
	47	68
	48	欠　番
	49	69
	50	70

地区	旧番号	新番号
C	51	71
	52	72
	53	73
	54	欠　番
	55	欠　番
	56	75
	57	76
	58	77
	59	78
	60	欠　番
	61	欠　番
	62	79
	63	80
D	1	27
	2	28
	3	29
	4	30
E	1	11
	2	12
	3	13
	4	14
	5	15
	6	16
	7	17
	8	18
	9	19
	10	20
	11	21
	12	22
	13	23
	14	24
	15	25
	16	26
F	1	1
	2	2
	3	3
	4	4
	5	5
	6	6
	7	欠　番
	8	8
	9	9
	10	10
	11	7

調査前の状況
（A地区一帯）

調査前の状況
（C地区一帯）

調査前の状況
（F地区一帯）

第1図版　調査前の状況

A地区全景

A地区全景（中央は溝701）

第2図版　A　地　区

B地区全景（中央の大形住居は第83号住居址）

C地区全景

第3図版　B ・ C 地 区

E地区全景

F地区全景

第4図版　E ・ F 地 区

第4号住居址

第4号住居址　遺物出土状況

第5図版　第4号住居址(1)

第４号住居址カマド

同　左

第４号住居址遺物出土状態（鍬）

同左（鎌）

同上（鎌）

同上（灰釉陶器・須恵器）

同上（鉄具・紡錘車）

同上（紡錘車）

第６図版　第４号住居址(2)

第9号住居址

第81号住居址

第7図版　第9・81号住居址(1)

第81号住居址

第81号住居址　遺物・炭化材出土状態

第 8 図版　第81号住居址(2)

第81号住居址
遺物・炭化材出土状態

同上

同上

第 9 図版　第81号住居址(3)

第81号住居址
遺物・炭化材出土状態

同上

第86号住居址

第10図版　第81・86号住居址(4)

第101号住居址

第101号住居址　遺物・炭化材出土状態

第11図版　第101号住居址(1)

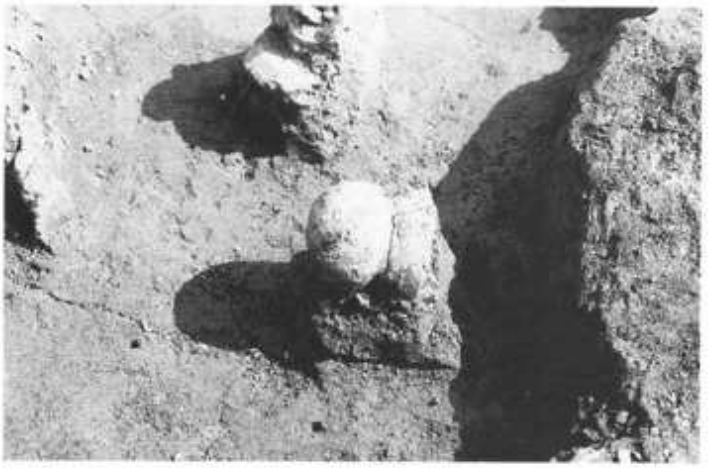
第101号住居址
遺物・炭化材出土状態

同上

同上
遺物出土状態

第12図版　第101号住居址(2)

第101号住居址
遺物出土状態（P_a）



同上（小型丸底坩）

第99号住居址
（時期不明）

第13図版　第99・101号住居址(3)

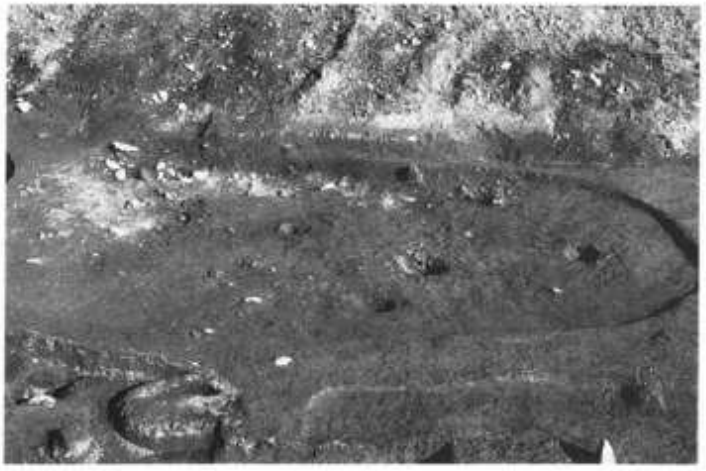
第119号住居址
(縄文中期初頭)

第118号住居址
(縄文中期初頭)

同上
(遺物出土状態)

第14図版　その他の住居址(1)

第94号住居址
(縄文中期初頭)



第31号住居址
(縄文中期初頭)

第36号住居址
(縄文中期初頭)

第15図版　その他の住居址(2)

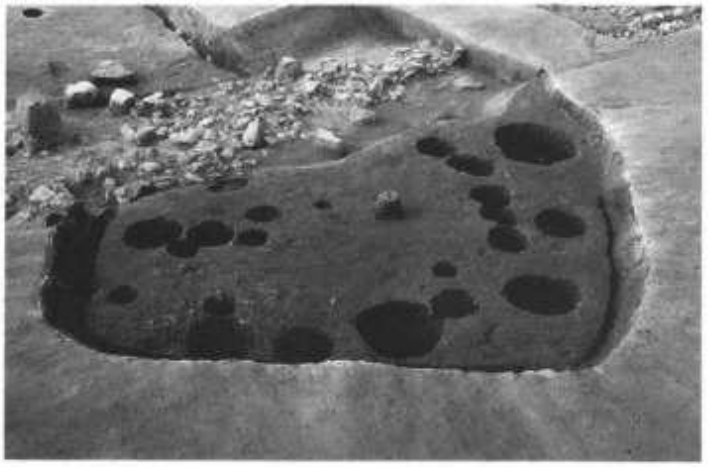
第82号住居址
(弥生後期)

第84号住居址
(弥生後期)

第93号住居址
(弥生後期)

第16図版　その他の住居址(3)

第102号住居址
（弥生後期）



第105号住居址
（弥生後期）

同上
遺物・炭化材出土状態

第17図版　その他の住居址(4)

第111号住居址
（弥生後期）

第114号住居址
（弥生後期）

第115号住居址
（弥生後期）

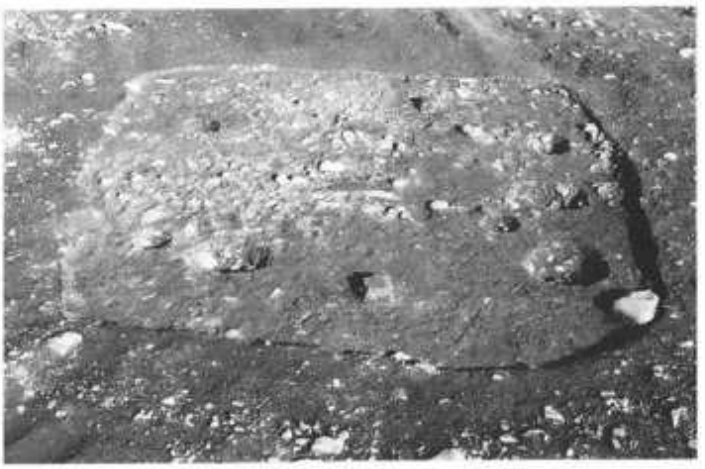
第18図版　その他の住居址(5)

第117号住居址
（弥生後期）

第83号住居址
（古墳前期）

第87号住居址
（古墳前期）

第19図版　その他の住居址(6)



第88号住居址
（古墳前期）

第90号住居址
（古墳前期）

第100号住居址
（古墳前期）

第20図版　その他の住居址(7)

第103号住居址
（古墳前期）

第110号住居址
（古墳前期）

第116号住居址
（古墳前期）

第21図版　その他の住居址(8)

第98号住居址
（古墳中期）

第112号住居址
（古墳中期）

第107号住居址
（古墳後期）

第22図版　その他の住居址(9)

第109号住居址
（古墳後期）

第113号住居址
（古墳後期）

第７・10号住居址
（平安）

第23図版　その他の住居址(00)

第8号住居址
(平安)

第11号住居址
(平安)

第12・14号住居址
(平安)

第24図版　その他の住居址(11)

第18号住居址
(平安)

第23号住居址
(平安)

第34号住居址
(平安)

第25図版　その他の住居址(12)

第33号住居址
(平安)

第34号住居址
(平安)

第35号住居址
(平安)

第26図版　その他の住居址(13)

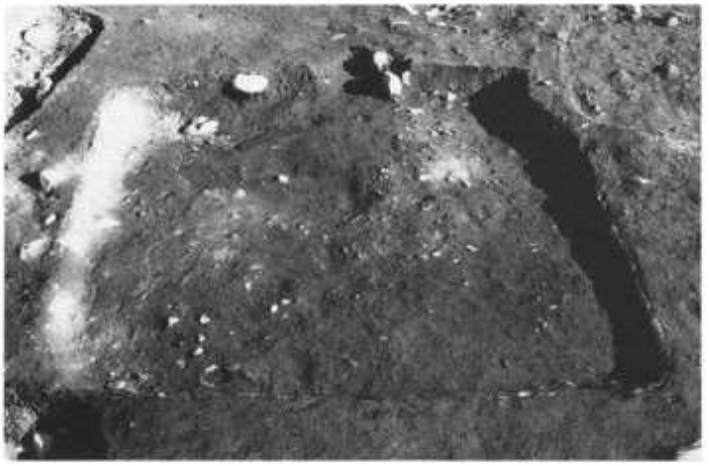
第36号住居址
（平安）

第38号住居址
（平安）

第39号住居址
（平安）

第27図版　その他の住居址(4)

第43号住居址
（平安）



第48号住居址
（平安）

第51号住居址
（平安）

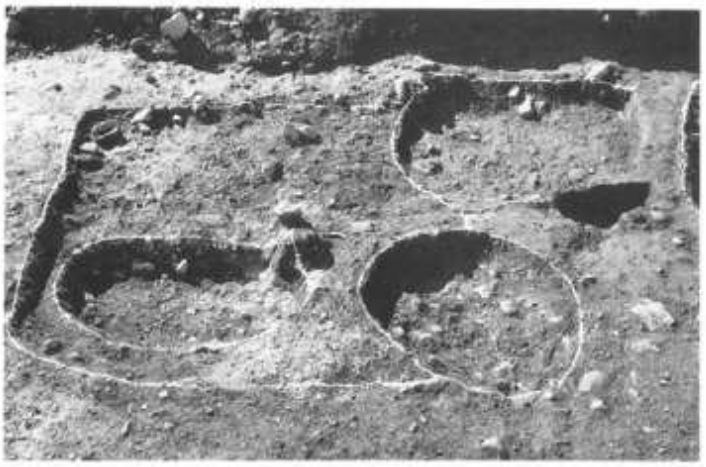
第28図版　その他の住居址(5)

第54号住居址
（平安）

第55・58号住居址
（平安）

第57号住居址
（平安）

第29図版　その他の住居址(16)

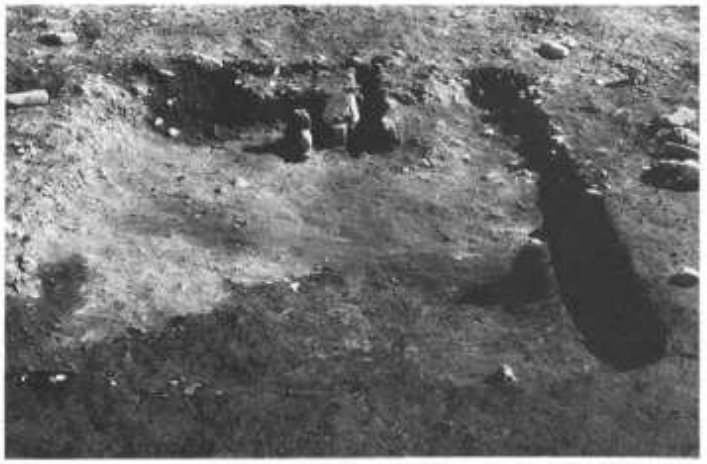


第58号住居址
(平安)

第59号住居址
(平安)

第63号住居址
(平安)

第30図版　その他の住居址(17)



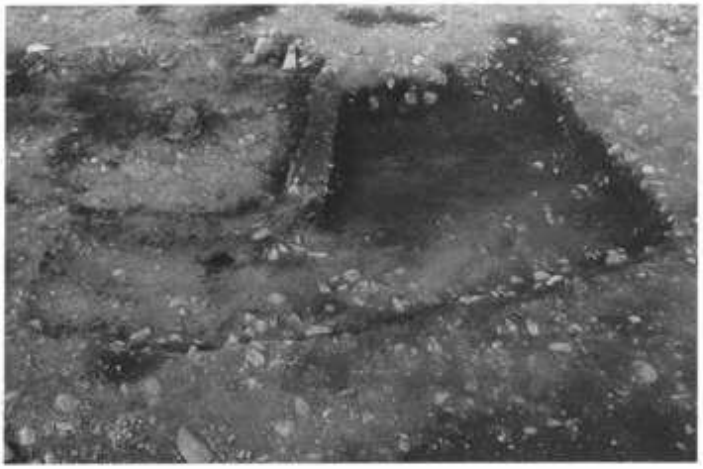
第68号住居址
（平安）

第69号住居址
（平安）

第72号住居址
（平安）

第31図版　その他の住居址(18)

第70・73号住居址
(平安)



第76号住居址
(平安)

第78号住居址
(平安)

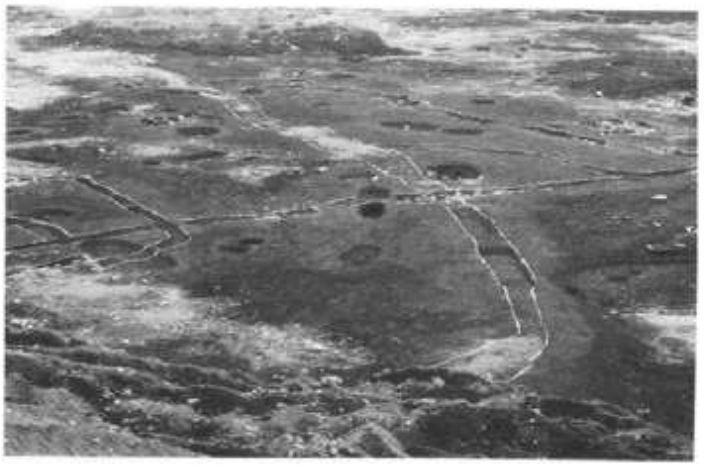
第32図版　その他の住居址(19)

第79号住居址
(平安)

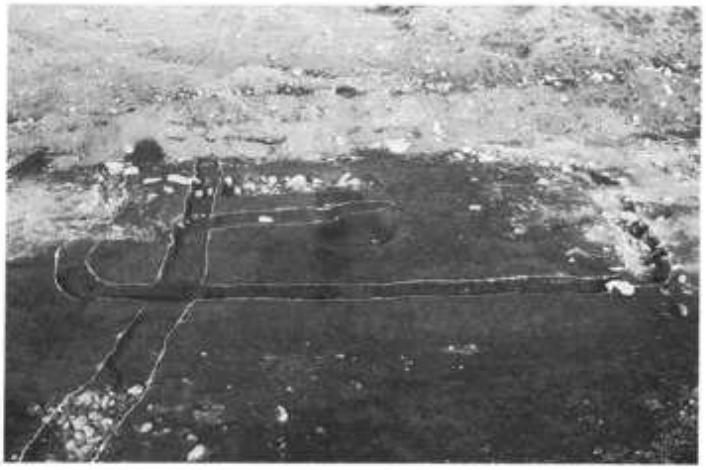
第80号住居址
(平安)

建物址1
(平安)

第33図版　その他の住居址⑳・建物址



溝401～406



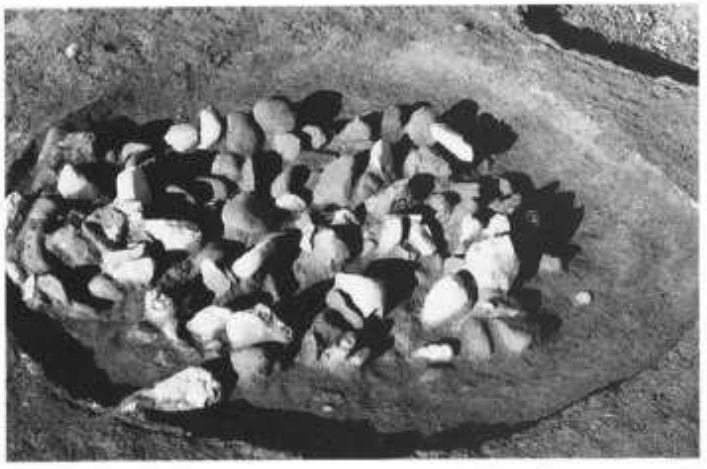
溝405・406

溝602南部

第34図版　溝

集石1
(縄文中期初頭)

集石2
(縄文中期初頭)



408土坑
(集石炉：縄文中期初頭)

第35図版　集　　石

火葬墓1

火葬墓2

土坑墓（土坑109：平安）

方形周溝墓（古墳前期）

第36図版　火葬墓・土坑

1

2

3

4

5

6

11

12

17

13

14

15

18

19

25

第37図版　古墳時代の土器(1)

26

27

28

31

32

33

39

38

43

40

41

44

第38図版　古墳時代の土器(2)

49

47

48

51

53

56

52

50

57

58

59

61

62

第39図版　古墳時代の土器(3)

2

10

15

28

38

39

41

44

45

47

57

61

65

55

68

第40図版　平安時代の土器・陶器(1)

73

76

83

86

84

93

95

96

98

99

100

102

104

105

106

第41図版　平安時代の土器・陶器(2)

108

109

110

117

114

119

112

123

129

125

126

127

128

130

第42図版　平安時代の土器・陶器(3)

134

135

第４号住居址土器セット

155

136

138

169

175

176

178

179

180

181

183

187

第43図版　平安時代の土器・陶器(4)

189

192

193

194

197

207

208

211

223

215

212

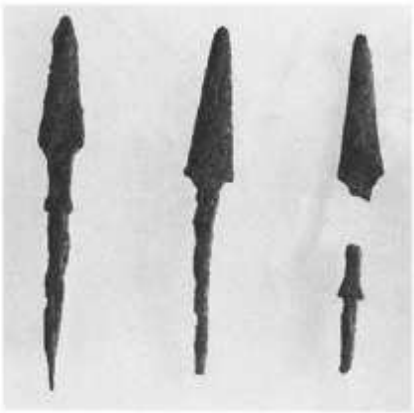
土師器皿

222

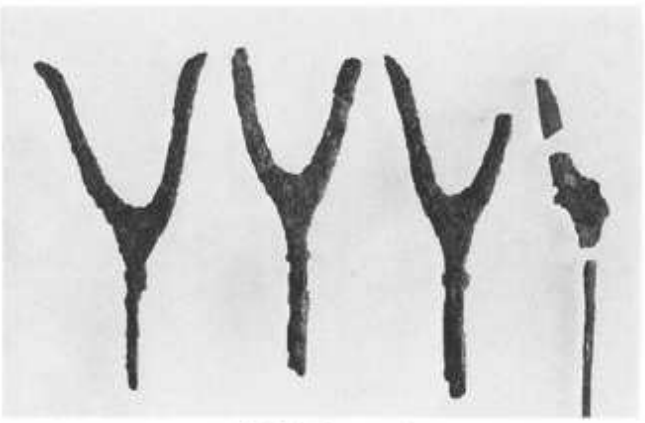
213

第９号住居址土器セット

第44図版　平安時代の土器・陶器(5)



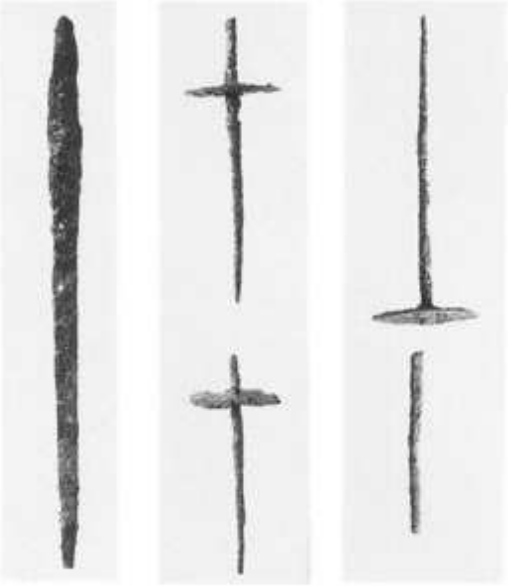
鏃（1～4）



雁又鏃（5～8）

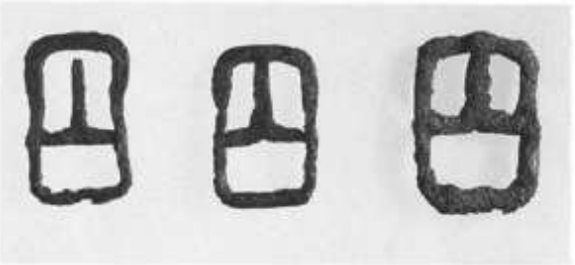
刀子（9）

苧引鉄（14）



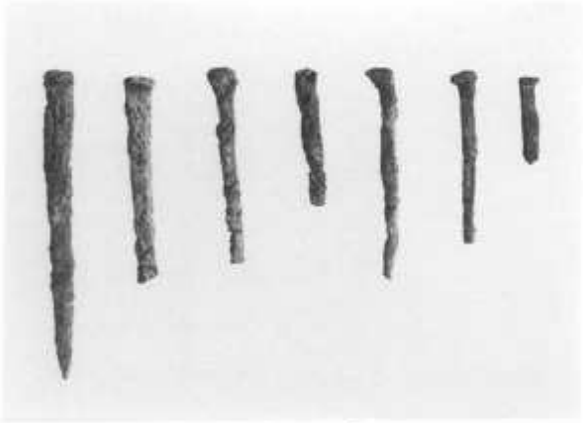
鉇（10）　紡錘車（15～17）

鎌（13・12・11）



帯金具（18～20）

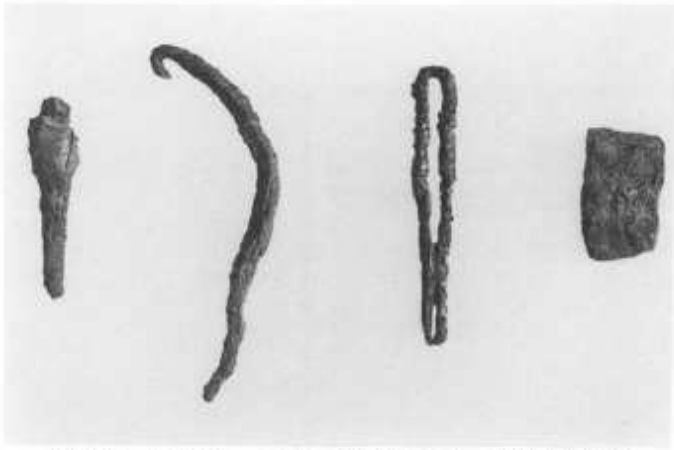
第45図版　金属製品(1)



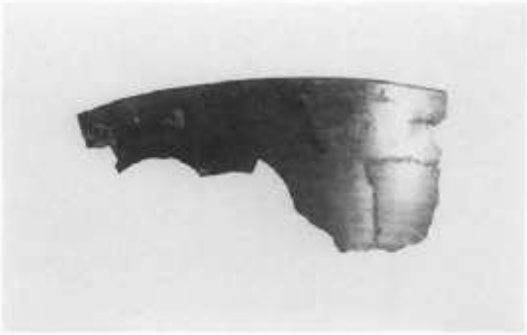
釘（21～27）

不明鉄器（29～33）

鍬（35）



鏃(34)・釘(37)・毛抜き型鉄器(36)・不明鉄器(38)



銅鋺（39）

同左

第46図版　金属製品(2)

松本市文化財調査報告No.93
松本市堀の内遺跡
平成4年3月20日　印刷
平成4年3月20日　発行
編集　松本市教育委員会
〒390 長野県松本市丸の内3-7
TEL0263(34)3000
発行　松本市教育委員会
印刷　電算印刷株式会社